14 エト6D-71
87-22

87
22

鎌田榮吉
有賀長雄閲
林毅陸譯
佛國學士會員 アナトール、レルア、ボリュー著

早稲田
叢書

露西亞帝國

東京專門學校出版部藏版

序

露西亞は世界の一大强國にして特に我日本帝國とは密接なる關係を有し其事情を知るの必要甚だ大なりと雖も其眞相は未だ我國人間に明ならずして却て一種の誤解を有するを比々皆然るが如し而て之が爲めに國交際上に大なる妨害を與ふるをあるは予の最も遺憾とする所なり蓋露西亞の建國は遠しと雖其國を開て世界の局面に現れたるは正に彼得大帝以來の事にして其國情民俗の眞相は歐洲人の間にすら未だ詳に了解せられず日本人が露國の事情に暗くして其觀察の肯綮に中らざるも亦已むを得ずと謂ふべし而て

露西亞の研究に資すべき著作は世に少なからずと雖も多くは先づ一種の偏見を抱て評論を試みたるが故に其說く所公平を欠き讀者をして其判斷を誤まらしむるの恐あり顧ふに日本人は此種の書籍又は雜誌等に依て露西亞に關する記事評論を見るの常なるは當に其誤解を來すの源なるべし又露國政府の編輯に成れる『ステーツマンス、ハンドブック、オン、ロシヤ』の如きは敢て好參考書ならざるに非ずと雖も是れ僅に紙上の露西亞を知るに過ぎずして未だ其裏面の民情を穿ち、且社會政治及宗教上の眞相を詳にすると能はざるなり唯夫れ前にしてはワレース後にしてはボリュー二

氏の著は正に公平正確なる良書として世人の齊しく認むる所なるが就中ボリュー氏の著は三卷千七百餘頁の大册子にして記事周密正確を極め議論亦最も公平該博露西亞の社會國家及人民を忠實に解剖描寫して殆ど餘蘊なし之を以て歐米諸國並に露西亞の人士は一般に此を認めて最良の書と爲し予も亦談露西亞に及べば必す此書を薦むるを以て常としたり而て今林毅陸氏は之を邦文に譯して出版せんとすと云ふ是れ實に予の深く喜ぶ所にして其抄譯の法を取て讀者の便を圖りたるは亦大に我意を得たり予は其我國人を利するとの決して鮮少に非ざるべきを信ずるなり

乃ち其請に應じ之を記して序となす。

明治三十三年晩春

英國に向て發途するの前數日

男爵　林　董　識

序

曩きに余の露西亞に遊ぶや露語を解せず露文も讀めず假令能く之を讀むとするも言論の自由絶無なる所の此國に在ては新聞に演說に喋々政事を談じ教理を論ずるが如きの盛況は決して之を見るを望むべからず去れば專制の治風を厭ひ改革の志を抱く者は往々英米瑞白等の國に逃れて新聞雜誌を發行し密かに之を鄉國に輸入するものあるに至る而して外國より入る所の各種出版物も亦た盡く之を檢閲して其の政治宗教に害ありと爲す所は墨汁を塗りて之を抹殺し又は鋏を以て其の紙片を剪除するの例なり故に余輩の

如き歐洲西部の諸國に在るも尚ほ多少の露國に關する記事評論を讀みて其の國情を察するの便を得たるものなるに實際露國の境に入て以來は却てその事情を知るに由なく諺に所謂燈臺もと暗しの奇觀を呈したるころ笑止なれ然れども此好機會逸すべからずとなし强て其視聽を鋭敏にし人に接すれば其の說を叩き物に逢へば其の由來を尋ぬる等多少の利益を收めんとを勉めたりしが一日偶々我公使館の客堂に國人の會するもの新舊合せて十數人互に所感を語り見聞の方法等を話したるに孰れも讀書の助を借るの必要を說かざるものなし而して其書籍はワレュス氏の『露西亞』ステプニヤク氏の『露帝國』チコミロフ氏の『政治及社交の露西亞』ボリュー氏の『露西亞帝國』を以て最も善しとなす余はワレエスを讀みステプニヤクを讀み遂にボリューに及び之を繙く事二三頁に至れば忽ち想ひ起すこれ余が前年曾て一讀せし書なることを然れども尚ほ卷を捨てずして之を讀み去り讀み來れば言々句々皆躍如として生けるが如く其趣味津々殆んど別書に接するの感ありしもの蓋し足其の地を踐み眼其の風物を睹つゝ之を閲讀するが爲めなるか西人の語に詩人の詩を解せんと欲せは詩人の國に遊ぶに如かずと云へるも此邊の消息を傳へしものならん爾後

隨て見物すれば隨て讀書し實物の觀察と机上の讀書は相俟て國情の一班を窺ふを得せしめ最初に發した る所の燈下却暗黑の嘆聲も漸く其の跡を收むるに至れるを見れば此等の書に負ふ所亦た鮮しとするを得ざるなり歸朝の後社友林毅陸君問ふに露國の事情を以てせるも余や未だ之に答ふるの資なし先づボリュー氏の『露西亞帝國』を一讀せよ其の不審の點の如きは余の見聞に照らして釋くる所あるべしと君直に之を讀過し得る所多し其の喜を同胞に分たんと欲して之が譯述に從事し數月にして脫稿す余之を閲するに文章流暢意義明晰而かも能く浩瀚彼れが如きを咀嚼して巧みに其の要領を捕らへたるは君の才學にして初めて之を成すを得たり今や國人北隣の國狀に注目するもの少なからざれども其の見る所頗る粗なるを以て一方に之を侮蔑して甚だ與みし易しとなす者あれば他方には之を恐怖して戰慄措く所を失ふ者あり二者共に其正鵠を得ざること斯の如きは畢竟その國狀を審にせざるの罪なり殊に纔かに彼の軍艦兵勇の多寡をのみ比較して妄りに强弱を說き之を喜憂するが如き誠に皮相の淺見に過ぎず林君の此抄譯ある聊か國人の見識を養ひその反省を催すに庶幾からんか記して以て序文となす

明治三十四年三月廿二日

東京に於て

鎌田榮吉識

序

我日本帝國は露西亞帝國と密接の關繫を有するを以て其國勢を審かふし民情ふ通ずるの急要あり而して世上其書ふ乏しきは最も遺憾とする所たり佛國碩學ボリュー氏の著はせる『露西亞帝國』は能く其國勢民情を詳述せる良書なり知人林毅陸氏は幼より學問を好み文才ふ長じ曾て久しく慶應義塾ふ在り業成るの後教授の任ふ當り研精倦まず其餘暇を以て之を譯し漸く稿を脫するふ際し佛國ふ遊學せんとし之を印行するの擧あり別ふ臨んで余ふ序を囑せらる今や氏は佛國ふ在て益々學を修め業を勵む其大成期して待つべ

きなり余は其囑を辭するを得ず乃ち一言を叙し聊か其責を塞く而已

明治三十四年五月

栗原亮一

原序

此一篇は原著者が亞米利加版の爲めに草したる所なり

今茲に英語讀書社會に向つて呈せんとする此書は、露西亞に於ては禁書たり。英米の讀者は、或は之を聞て驚かんも決して然る可らず。露西亞の事を論ぜんと欲するアングロサクソン人は、先づ始めに英米流の思想を脫せざるべからず。夫れ露西亞に於て公然差支なしと認めらゝには、唯其書籍が大スラヴ人に對する同情と、其君主に對する敬意に富むと云ふのみにては未だ可ならざる也。獨裁權は宗教の信仰と同じく「犯す可らざる」ものにして、其行爲にせよ、其主義にせよ、之に喙を容るゝと能はざる也。然るに本書は獨裁制度とは明に相容れ難き無遠慮を以て、正に此事を爲せり。されば本書が放逐の命を蒙れるに對して不平を懷くは謂はれ

なき事にして、寧ろ是れ露西亞撿閲官が著者の心事の公明正大なるを表明する所以として、感謝の意を表せざるを得ざる所なるべし。實に著者は世にも珍らしき好運、即ち露西亞に對して滿腹の好意を自由に表白し、而も其精神の獨立に關して一點世の疑を受けざるを得るの、大好運を喜ぶもの也。

一事特に我讀者の注意を請はざるを得ざるは、吾人西人は歐羅巴或は亞米利加に對すると同一なる觀念と規則とを露西亞に適用すると能はざると是れ也。若し之を同一視せんか、是れ愚の極にして亦不公平の甚しきもの也。されど是れ正に大抵の外國人が陷るの誤たり。蓋彼等は地理學者が歐羅巴はウラルの坦山及コーカサスの峻壑に達すと云ふ

に欺かれて、其分別の明を失ふ也。斯かる學校臭き先入は之を投げ棄て、斯かる便宜の境界は之を徹せざるべからず。露西亞は歐羅巴に非ず、亞細亞に非ず、正に歐亞の間に介在して而も兩者に屬する一種特別の世界也。以上の立言は敢て誤なかるべしと信ずるも、猶露西亞帝國は耶蘇教國なるに因り、或意味に於ては實に歐羅巴の一國也、然れども當世の國には非ず。若し果して歐羅巴に屬すとせば、是れ往日の歐羅巴にして當世の歐羅巴には非ず。故に人若し眞に露西亞の事情に通ぜんと欲せば、先づ之を觀察するに當り、其身を三四世紀以前の天地に退けざる可らず。苟めにも曆を手頼りとして、現在の露西亞及アレキサンドル三世は十九紀の終に屬すと思ふは、縱令年代表の證據あるにもせよ、大なる

勘定違ひ也。莫斯科のタレムリン宮に於て即位式を行ひたるアレキサンドル皇帝は、女王ヴィクトリアと同時代の人と云ふよりも、寧ろカスチルの女王イサベルと同時代也。アレキサンドル皇帝は其志公正にして其性格高邁なると一點疑を容れずと雖、帝も帝の臣民も、智識上吾人と天地を同ふせず。吾人の良心は許さざるの法令を、彼は些かも遲疑するとなく極めて平氣にて之を裁可するを得る也。若し露西亞皇帝が國内の猶太人に對し、夫の千四百九十二年の西班牙王の布令に似たる規則を四世紀後の今日に設くとせば、是れ今日の露西亞は十五世紀の西班牙と異ならざるに因る也。此「神聖露西亞」と泰西の共和國及立憲君主國との間には、事物の觀察力に富める人に取り三百年の相違あり。漫遊者と雖例に依り淺薄なる觀察を下しつゝ、瀛車に投じて露西亞の平野を通過するに當り、此變態に感ずべし。蓋露西亞の眞相を知るに困難ならしむるものは、畢竟其年代、其文明の外形、其泰西の有形科學を應用したる所、其軍制及官制等を見る時は、如何にも當世の國なりと雖、猶其人民の風俗及精神に於ては依然として中世的なるに在り。市人と農民とを問はず、露西亞多數の人民は未だ「學問復興」「宗教革命」若しくは「佛國革命」等の空氣を感ぜざる也。コロンブス。ルーテル。ワシントン及ミラボーの時代以來、過去四世紀間に歐米に起りたる一切の事は、露西亞より之を見れば全く空なる也。

勿論露西亞は全く西歐の外に超然孤立し、若くは之と關係

を密にせんとを試みたることなしと云ふには非ず。彼得大帝以來並に其以前に於てすら、常に孜々として歐羅巴に「追付」かんとを努めたるは、歴史上の事實也。而して彼得及其後繼者は如何なる意味に於て成功し、亦如何なる意味に於て失敗したるかは、予之を本書に說けり。實にロマノフ家諸帝の露西亞は、決して優々として日を空過せざりし也。彼得大帝以來其國は進歩し、時としては其君主は前に進むに急なるの餘り、遲鈍なる民衆の能く堪へ得ざる大速力を以て此彪然動き難きの國を推し進めんと企てたるとあり。歐羅巴とは事情を異にして、進歩の勸誘刺激は常に在上の執政者より來り、而も天下の君主若くは大臣にして斯くも誘導に力を要するの國を治めたるとは未だ曾て有らざる也。

然れども露西亞は絶へず諸方面に進歩したりとするも、歐羅巴も亦同時に歩武を早めて進歩し、萬事に新生面を開きしが故に、此彪然として遲鈍なる露西亞は敢て之に「追付」くと能はずして、却て常に遙に後れたり。又茲に吾人が尤もなりと思はざるを得ざる一事と云ふは、抑も我敏活なる泰西(歐羅巴及亞米利加の意味にして露西亞より之を見れば二者の區別なし)、—我動搖不定なる泰西は、所謂「進歩」なる者を得んと欲して疾驅急進するの餘り、果ては宗教臭味を帶ぶる舊露西亞の人心に不安の念を與ふるに至れり。既に彼得大帝の時所謂「舊露西亞人」即ち頑固なる國粹論者は、當時ルイ十四世及女王アンの歐羅巴を摸倣するを非難したる事あり。果して然らば我共和政及國會、我階級間の爭、さては我

政府と政黨等が紛々擾々として宛も虛言と讒謗とを武器とする內亂が斷へず行はるゝ如き外觀を呈するを見て、彼等は如何んの感を起すべきや。弱者壓制を意味すると有勝なる我所謂自由、古來の敎及尊崇心を破壞し去る我の所謂放任、下賤なる物質主義に溺れて漫に新奇を喜び富を欲するの我共和政、さては亦遙に之を望めば徒らに海波を搔き亂すに異ならざる不斷の紛紜、即ち之を略言すれば、我が止み間なき一切の動搖紛擾は、露西亞及「ツァール」をして心を寒ふせしめたり。多年露西亞人は、開化とは唯だ我等を摸倣するの謂なりと無邪氣に信じたるに、今や其中には少數の上級者間にも窃に懸念を起し、我政治家及思想家の開きたる夫の「進步」に至るの大道は、却て險阻なる斷巖に到達するに非ざるやを怪む者少なからざるに至れり。斯くて從來我等を摸倣し我等と並び立つを以て滿腹の得意と爲し居たる彼等は、今や窃に疑惑を懷き、西歐より輸入したる思想の爲めに却て盲進事を誤りたるを心に憂ひ、政府は突然手綱を制して之を止めり。思へらく、敢て他に賴らずして自己の特色を維持——否挽回——するこそ寧ろ安全なれと。

上に記したるは正にアレキサンドル三世の周圍に滿てる感情也。過去二世紀間露西亞の歷史は宛も一左一右常ならざる振子の如くなりし也。即ち歐風摸倣と莫斯科派の國粹保存との間に動搖したり。而して今日は嘗てニコラス帝の時に於けるが如く國粹派の力强きを占めり。即ち潮流は最早キャサリン。アレキサンドル一世及同二世の時の如く歐羅

巴に向はず。アレキサンドル三世は他に先んじ且擢んでゝ國民的君主たるを得意とせり。彼は人民が見て以て眞正金無垢の純露西亞皇帝と爲す所の君主也。萬事露西亞流にして之に反する者は一切棄却する也。彼は其民を化現するとの外には何等の名譽を求めざる也。彼に取りては露西亞皇帝なる者は露西亞の化身也。實に彼れの或行爲に對しては如何に是非の評を下すを得るにもせよ、其人と爲りの敬服すべきは決して否む能はず。顧ふに深く己れの義務を思ひ、熱心に臣民の幸福を圖るに於て、彼に優るの君主は古來露西亞に無かるべし。而して君主として帝の長所、及人として帝の美質は、其人に存する者なりと雖、其施政の方法に至ては然らず。是れ其國情より來り、亦其獨裁制度より來る者にして、此制度や頓て帝が自ら代表し、且之を安全に保つを以て其天職と爲せる所のもの也。而して人をして世界の大暴君たるを得せしむるに足るの萬能力を有する此皇帝は其實公明誠實なる人也。彼は勇敢に率直に溫和に亦沈着に且忍耐力あり。彼は專制權を有する人には珍らしき美質、即ち自制力を示したり。即ちブルゲーリヤに於て其政策は長く抵抗を受けたるも、彼は敢て之が爲めに怒を發して過激なる手段を取りたるとなし。此王は一令の下に千萬の兵を動かすを得るも、其實平和の友也。彼は戰爭を爲したるとあるも內心之を嫌惡せり。彼はバルカンの役に於て其慘害を實見したり。戰爭は耶蘇教徒として亦牧民の君として其良心の許さゞる所也。されば劍影相閃くの今日の歐洲が、尙能

く平和なるを得るは、畢竟アレキサンドル三世に負ふ所大なる也。自らの世界平和の擁護者、是れ獨裁君主に取ては壯大なる一好「役割」にして、吾等佛人は彼が長く其役を演ぜんことを祈るもの也。

今後何事の起るにせよ、其内外の政策が如何なる結果を生ずるにせよ、露西亞が其の爲めに力を失ふにせよ、强を加ふるにせよ、皇帝の威力が結局其の爲めに薄弱となるにせよ、猶一事の斷言し得べき者あり。即ち此大國は兎に角依然として世界の三四の雄邦中の一なるべき事是れ也。即ち露西亞は西半球に於て遙に東半球の合衆國と相對立すべき也。此一事を以て人類の運命を研究するに熱心なる者をして露西亞帝國の事情に注意せしむるに足るべし。此巨大にして不器用なる露西亞人は如何に遠く離るゝが如く見ゆるにせよ、其文明及制度は如何に世に後れたるの觀あるにせよ、此新來者は既に技藝に科學に文學に人事百般の上に一種の天才を現はせり。故に縱令其缺點及惡德をすら認めたる場合にも、吾人歐米の先輩者は決して之を輕蔑すると能はざる也。其將來に於て如何に人を驚かすに足る者あるや、未だ容易に測り難き也。されば吾人は或は羅典民族と云ひ、或はアングロサキソン人と自稱するも、請ふ吾人をして夫のエルブ及ヴィスラ河畔のチュートン民族が(暗に獨逸人を指す)往々スラヴ人に對して催すが如き愚なる人種的已惚に陷らざらしめよ。スラヴ人は未だ決して其十分なる手並を示さゞる也。否、其第一刀をすら殆んど未だ下し了らざる也。

夫れ彼等は吾人と異なるが故に、又天然及歴史上の事情は其發達を遲緩ならしめたるが故に、吾人は敢て之を永久に劣等なるべしと公言すると能はず。斯かる妄斷は自ら其罰を招くべし。スラヴ人が大國民たるの資質を有するとを世に示すには、彼等は唯機會に遭遇し、且二世紀間他に後れたる所を取返せば即事足る也。

千八百九十三年一月

凡例

本書は佛蘭西學士會員アナトール、レルア、ボリュー氏の名著にして、原名を『ツァールの帝國及露西亞人』(L'empire des Tsars et les Russes) と云ひ、先づ筆を露西亞の地形、氣候及人種に起して、次に露西亞人の性情氣質を論じ、以下社會、政治及宗教等の諸方面より其の組織及眞相を縱横に解剖評論し、事の明白著大なる者は言ふ迄もなく、更に外國人には容易に知り難き社會下層の實情及び人心裏面の眞相に至る迄、隱を開き微を穿ち、宛も利刀肉を割て片鞆を殘さゞるの概あり。故に本書を一讀する時は、露西亞とは如何なる國にして露西亞人とは如何なる民なるやを知るに於て自ら餘師あり。其の佛國に於ては既に四版を發賣し、且英語及獨逸語に飜

譯せられ、到る處に讀書社會の歡迎を博せるも亦宜べなりと謂ふべし。

本書は亞米利加東洋學會、巴里人類學會及倫敦ヴィクトリア學會の會員にして露西亞人なるゼヲード、ア、ラゴジン氏が原書の第三版より英譯し、第一卷を千八百九十三年に、第二卷を同九十四年に、第三卷を同九十六年に、米國新約ジー、ピー、ブットマンスサンス會社より發行したるを、更に原著者の許可を經て重譯したるなり。

原書は三卷千七百餘頁の大册子にして、一字一句之を飜譯すると頗る不便なるに因り、特に原著者の同意を經て抄譯の法を用ひたり。故に全卷の文章は殆と予の手に成ると稱して可なり。然れども必要なる所は些かも之を漏らさゞるに注意し、且純粹に原文其の儘なる所も敢て少なきに非ず。

予始め露西亞に關して著書を爲すの志あり、窃に參考書の調査に從事せしに、偶まボリュー氏の著に接して憮然たるもの久し。思へらく拙劣なる著書を爲さんよりも、寧ろ之を譯して我讀書社會に紹介せば其の利益遙に大ならんと。尋で之を鎌田榮吉氏に語る。氏此書の露西亞に關する最良のオーソリチーなることを說て盛に予を勵まさる。予即ち意を決し幾冊のノートブックを拋ち棄て、再び筆を新にして此飜譯を始めたり。爾來二歲餘漸く茲に其の脫稿を見るに至りしが、今にして之を思へば此成功は鎌田氏一言の奬勵に負ふ所實に鮮なからず。茲に其の轉末を述べて聊か謝意

を表す。

本書を印刷に附するに際し予俄かに佛國に渡航すると
となり自ら活版の校正を爲す能はず、從つて魯魚の誤或は
之れあらんを恐る。讀者幸に諒せよ。

明治三十四年二月二日

東京芝公園の僑居に於て

林　毅　陸　識

露西亞帝國目次

第一巻　露西亞の國及民……一頁

第一編　天然氣候及土地……一

第一章……一

露西亞を知るの困難。其地形及氣候。西歐との異同

第二章……六

二大帶。森林帶及平野帶。平野帶中の區別。黑壤區。沃野區。荒原區

第三章……一二

全國の齊一。大原野は政治上の統一に適す。人口疎密の不平均。一大殖民國。兩面の女神

第二編　人種及國體……二〇

第一章……二〇

人種の複雜。莫斯科の人種標本展覽會。人種の複雜なる所以並に彼等をして一大國民を成さしめたる原因

第一章……二五

露西亞人種中の三大要素。フィン人。フィン人中の諸種族。フィン人と露西亞人。フィンの特色

第三章……三〇

韃靼人。韃靼人及モンゴル人。カルミック人。露西亞の韃靼人と西班牙のムール人。韃靼分子の減少。韃靼人の習慣及資性

第四章……三八

スラヴ人。東西の二派。之に介在する別種族。露西亞人の形成。露西亞人中の分派。大露西亞人。白露西亞人。小露西亞人

第五章……四七

西境の異國民族。獨逸人及其勢力。波蘭問題。波蘭人及露西亞人和合の利益。下級細民と共和的政策

第三編　露人の性情及氣質……五三

第一章……五三

露西亞に於ける天然と人。氣候の影響。寒氣より生ずる遲鈍。冬と勞働の不規則。運動に對する嗜好の缺乏。食物の不足。飲酒。寒氣と衛生及道德

第二章……五八

氣候に對する戰と露人の性情。北國は自由の生地に非ず。服從心及耐忍力。着實なる思想及實驗的本性。暗慘たる天地と沈鬱なる性情。神秘主義。風景の無趣味と詩歌の缺乏。所謂露人の遊牧的傾向。風景の無變化と創造力の缺乏

第三章……六五

露國天然の變化は四季の變遷に在り。冬春及夏の變化と其の國民の性情に及ぼす影響。露人の性質は極端に走ると其氣候の如し。其矛盾に富むと。其の移り易き事。國民的好標本

第四章……七〇
露人の性質と虚無黨。虚無黨の起原及性質。其三變遷。ヘルツェン。パクニン及チエルニシエフスキー。露國的特性に屬する點。實驗主義と神秘主義の混合。虚無黨の宗教に似たる點。主義傳播の方法。一種の少年病。露西亞の婦人問題

第四編　歴史及文明の要素……八四
第一章……八四
露國は歴史を有するや。之に關する諸説。國粹派及外風派。國粹派の起原及其傾向。國粹派と虚無黨との暗合默契。三思湖
第二章……八九
往古の露西亞と歐羅巴。耶蘇教及ビザンスの文化。モンゴル人侵入以前の國情。諸公國及露國中心點の動搖
第三章……九三
モンゴル人の支配。其の道德宗教及政治上の結果。モスコヴィア帝國勃興の原因及其轉末。露國史の無趣味
第四章……一〇一
露國再び西歐の文明に復歸す。彼得大帝以前の諸帝の事業。彼得大帝の改革。其結果及缺點。道德上及社會上の二元主義。アレキサンドル二世の改革が彼得大帝のと異なる所

第五編　社會の階級　市府及市人……一一二
第一章……一一二
露國に於ける階級の區別。僕農解放及其他諸改革の影響。アレキサンドル二世の改革と佛蘭西革命との異同。四階級の區別並に其性質及起原。餘分の小階級
第二章……一一六
市人と農民との不平均。露西亞に市町の少なき事。其理由。中等民族を作らんとする彼得大帝及キヤサリンの盡力
第三章……一二〇

キヤサリン以後の市人間の階級。「小町人」。上流の「商人」及其特權。
解放令後不動產を有するを得るに至りたる次第。「名譽市民」。中等
民族漸く起らんとす

第六編　貴族……一二五

第　一　章……一二五

貴族と農民は二種の國民の如し。露國貴族の他國のに異なる所。
一代貴族及世襲貴族。貴族の多數なる事。貴族政治を成すに至らざる所以。家族制の影響

第　二　章……一二九

貴族が政治上の勢力を占むるに至らざりし歷史上の原因。貴族の起原。「ドルヅナ」及「ボヤール」の自由勤務。貴族と土地。大貴族の力を殺がんとする諸帝の政策。彼得の位階制

第　三　章……一三一

露西亞の貴族と急激主義。貴族社會の外風崇拜。社交旅券として
の佛蘭西語。一種の別國民

第　四　章……一三四

貴族の特權。僕農解放の影響。特權は有名無實なり。キヤサリン
二世が「貴族會」に與へたる特權。其の彼等に利益を與へざる理由。
團體としての貴族は無し

第七編　農民及僕農解放……一三九

第　一　章……一三九

農民に對する批評。農民の種類。僕農制度の起原及原因。力役上
納金及其の割合。僕農制度の道德上又經濟上の弊害。僕農の解放

第　二　章……一四七

僕農解放に對する貴族の反對。此改革の特色は經濟上並に行政上
の自由を與ふるに在り。土地を與へずして僕農を自由と爲すを得
べき乎。土地割賦の標準

第　三　章……一五三

土地賠償の方法。政府の貸附金。新令實施の狀況。賠償實行の遲々たる理由。賠償の得失　一六〇
第四章……一七二
僕農解放に就ての世人の失望及其原因。經濟上の結果。アレキサンドル三世の救濟策。社會上及道德上の結果。社會的革命の種子
第八編　家族及村團……一七二
第一章……一七二
借地の方法は解放令のために變ずるとなし。村團共有財產の制は露國の特有なりや。其起原に關する說。其の行はるゝ地方
第一章……一七六
村團の模型は家族に在り。農民の家長的風習及往時村落の家族制。財產相續及分家。解放令の影響。分家の增加。之に伴ふ物質上の不利益と道德上の利益。婦人の境遇。個人主義の進步及其結果
第三章……一八三
村團。使用地の分割及配賦。現時の村團及定期の土地再分配。分配の標準。分配の時期。頻々再分配を行ふの不利益。分配の方法。過度に土地を細分するの結果
第四章……一九二
村團制の理論と實際。勞働者の力に應じての分配。一村團の實例。「無資格者」及其他の家族。耕作は寧ろ義務なり。取舍斟酌は橫暴不正の基。「村團の虫」。高利貸。農民間の寡人政治
第五章……一九七
村團制の可否に關する議論。其の缺點なる者は必ずしも皆改め難きに非ず。租稅共同負擔の制より生ずる弊害。村團解散の方法。農民が之を實行せざる理由。私有主義と共有主義と兩立すべき乎。大農及小農間の爭と村團制。村團は一種の組合。村團制は社會治安の保護者なりや。農民社會問題

第二卷　露西亞の制度

第一編　村團及農民の自治……二〇五

第一章……二〇五

村團制の起原は遠し。唯一の國民的制度。解放令の爲めに行政上の自治躰と爲れり。一個の小天地。郡。家族村團及國家。村團と獨裁君主

第二章……二一一

村團の民選役員。村團の自治と帝權と衝突せざる理由。村長及郡長。官吏の干渉。書記の專横

第三章……二一四

村會及郡會。村會は代議會に非ず。家長會。此家長的共和制と西歐の個人的共和制との相違。村會の放逐權。其會議及採決の方法。村民に對する權力。自治の村團内に於て個人は却て自治自由を有せず

第四章……二二二

村團專制の由來。之を監督制附するの方法。警部和解官及地方長。アレキサンドル三世の改正が前帝のと異なる所。村團の自治は政治的自由の源たるべきや

第二編　行政及警察……二二九

第一章……二二九

露西亞の中央集權。其の種々なる原因。其の得失

第二章……二三三

中央政府。樞密院。國務院。此二院が其設置當時の希望に副はざる所以。大臣及大臣委員會。各省の孤立。行政上の統一缺乏の結果。統一ある内閣は帝權國に成立ち得べきや

第三章……二四一

地方行政。州及區。知事及其權力。良官吏の缺乏。位階制の結果。官職の專門ならざる事。賄賂の弊風及其原因。官界の腐敗が偶ま專制政治の緩和劑たる所以。賄賂矯正法の無効力。繁文縟禮の弊

と法律に對する人民の輕蔑
第四章……二五七
警察。專制國に於ける其の必要。普通警察。其缺點及壓制。其の無能力なる理由。市町の警察。村落の警察。旅行券の束縛。其の不便。其の無効力
第五章……二六七
國事警察。皇帝直轄の「第三局」。其の長官。「第三局」廢止の原因。普通警察と國事警察との合同。其の人民の自由に及ぼしたる所如何。アレキサンドル三世の時の所謂「保護の狀態」。警察權の跋扈が露人の性情に及ぼしたる影響。「第三局」及秘密警察が革命思想を養成したる次第
第三編　地方自治制、地方議會及市會……二七九
第一章……二七九
選擧に成れる議會。貴族會。今日に於ける其地位。地方議會。其起原選擧法及之を組織する分子。農夫と前主人と一堂に膝を列ぬる次第。其双互の感情。地主の勢力。地方議會の制は未だ全國には施行せられず
第二章……二九〇
地方議會の權限。廣くして同時に不正確なり。行政官吏の干渉。地方議會の蒙れる束縛。財政の窮乏。地方議會の事業特に普通教育及衛生。火災に對する强制保險法
第三章……三〇三
地方議會に關する世人の失望。地方自治の實を完ふするには政治上の自由を要す。地方議會を國會の制と爲すの法如何。アレキサンドル二世の召集したる「協議會」。地方分權の必要
第四章……三〇八
市の自治制。兩首府。市會の組織は地方議會のと同じからず。其相違の理由。選擧資格の制を市會に輸入す。選擧名簿及三級の區

別。此選擧法の結果。冷淡及棄權。商人最も勢力あり。其弊害
第五章……三二五
市會。議事の公開。議員の數。常置委員。市長。市長の選擧及其結果。市會と知事との關係。市の財政事情。市の自治と政治上の自由
第四編　司法及司法上の改革……三二六
第一章……三二六
「露西亞法典」。ニコラスの「法令全集」。法律の繁雜。往時の裁判所及其腐敗。アレキサンドル二世の大改革。其模型及大躰の特色
第一章……三三二
特別裁判所。農民裁判所。其組織及權限。笞刑。農民裁判所の一例。農民裁判所の缺點及長所。其判決に關する控訴。宗教裁判所
第三章……三四四
二種の裁判所。選擧に成る裁判所。治安裁判所。治安裁判官の指名法。其選擧の制限。名譽及常務裁判官。常務裁判官の被選資格。治安裁判所の司る事件。其判決に對する控訴
第四章……三五八
初審裁判所及控訴院。樞密院は高等法院。司法官の獨立。檢事。辯護士及法庭の自由
第五章……三六四
刑事裁判。警察及審問。審問の繁雜。拷問。「司法糺問官」の新設。其實際の有樣は有名無實なり。倍審官。之を組織する人物。其缺點
第六章……三七三
新司法規則に加へられたる制限。改革の大主義破らる。司法の獨立と國事警察。辯論公開の束縛。最后の公開裁判事件。國事犯に對する特別裁判。アレキサンドル二世の諸勅令及軍法會議。アレキサンドル三世の「保護の狀態」及行政官に與へられたる權力
第七章……三八二

肉刑。笞刑。其廢止及實際上の例外。死刑の廢止。苦刑廢止が死刑廢止の實を完ふせしめたる次第。刑法の寛大と特別法の必要。政府對革命黨の戰鬪。死刑の存廢と罪人の增減 一六

第八章……三九一

追放及苦役。西比利亞及追放地。追放人の種類及其取扱。謫地に赴く道中の苦痛。追放人の數。國事犯の追放人。追放人の配置の模樣。追放刑の缺點。其の廢止され難き理由。監獄

第五編　出版及檢閲……四〇四

第一章……四〇四

從來雜誌は新聞よりも廣く行はれ且つ政治よりも文學を主と爲したり。アレキサンドル二世の時代に於ける日刊新聞の發達。露國新聞雜誌の特色。出版法。前檢閲。兩都の定期出版物及書籍に關しては前檢閲の制を廢せり。佛蘭西より輸入したる行政處分の罰。發行停止に關する特別法の新設

第二章……四一六

外國の書籍及新聞雜誌の檢閲。露西亞語以外の內國語に對する峻嚴。地方新聞。其束縛の實況。一地方新聞の訴訟事件。地方新聞の束縛は改正事業の効果を薄からしむる一原因なり。政府及公衆が地方の事情に疎き事。書籍館備付の書籍檢閲

第三章……四二四

出版法が露西亞の文學及思想に及ぼす影響。言論不自由の爲めに政論が詩歌小說中に混入する事。寓意文學。其の學問及人心に及ぼす惡結果。檢閲の制は人をして極端急激なる議論を好むに至らしむ。秘密及在外移民の出版。虛無黨の出版局及び革命家の機關紙。出版取締の無効。現行出版法は秘密結社を養成するの傾あり。出版の自由は大利益を露國に與ふべし

第六編　革命運動及政治上の改革……四三八

第一章……四三八

諸種の改革は何故に革命思想の發達を助けたりや。國內に於て並に外界に對しての露西亞の不調和。革命家の出で來る階級。學校及學界の貧民。學校は革命黨の養成所。過激なる理論に對する人民の嫌惡。革命運動家の失敗及其理由。革命運動は如何なる基礎を人民間に有すべきや。社會主義及土地分配の問題

第一一章……四五五

革命黨の發達及組織。平和なる社會主義より過般なる破壞主義に移りたる次第。暴擧組の組織及リベック會議。急激派と温和派との分裂。虛無黨が社會問題より政治問題に移りたる次第。陰謀家は整然たる大團躰を成せるに非ず。其後援者。其運動費の出所

第一三章……四六七

政治上の改革の必要。鬱勃たる新精神は遂に抑へ得べくも非ず。改革の妨害。版圖の廣大と人種の複雜。社會の上層と下層と別國民を爲せる事

第一四章……四七三

政治上の自由は如何なる形を取るべきや。露西亞は他と異なるの國民的制度を起すを得べきや。主もなる解釋。アレキサンドル二世の特別會議。千歲の恨事。前途の危險

第三卷　露西亞の宗教

第一編　露西亞の宗教及宗教心

第一一章……四八三

本卷に於て專ら宗教を論ずる理由。宗教問題研究の利益。革命と宗教。露西亞の虛無黨及革命運動の宗教的性質

第一二章……四八七

宗教心は民間に頗る强し。其の原因。教化の程度の低き事。歷史上の事情。露西亞人の神秘主義及宿命心。其の因て來る所如何。天然及環象の影響。平原及森林。氣候。歷史的災厄。飢饉疫病及火災。露人の神秘主義は之を見ると過大に失す可らず。實驗主義

と理想主義と往々相混ぜり
第三章……五〇〇
露西亞の宗教の性質如何。露人は耶蘇教徒ならずとは眞乎。彼等の耶蘇教は多くの點に於て外形的なる次第。露西亞の改宗の摸樣。宗教上の複本位。耶蘇教的儀式と異教的思想。スラヴ人の神と耶教の「古聖」。魔術の信仰。宗教を一種の魔術と見做せり
第四章……五一二
宗教上に於て「有識者」と無教育者との相異なること。而かも二者共に當代の人に非ず。露西亞の宗教事情が佛國と相反せる點。宗教心の奬勵。政府の牧師政略。教會と國家との關係。正教と國体との聯絡。國家にも宗教的性質あり。露西亞帝政は一種の神政たる次第
第二編　露西亞正教……五一九
第一章……五一九

「東方正教」の一般の性質。スラヴ的耶蘇教と稱するを得るや。正教は文明の進歩を妨害したりや。「東方正教」の無變化が思想の自由に好都合なる次第。希露教會は中央の首領を有せず。其結果。各國獨立教會を起すの傾向。東方正教國に於ては宗教問題と政治問題の混交する次第
第二章……五二八
正教會が國家的組織なるの結果。俗權の干渉。教會と國家との關係の密なるは思想の自由及政治上の自由を妨害する事。禮拜に銘々の國語を用ふる事。教會用のスラヴ語。政治上には利益あるも文化の進歩に害あり。露西亞に於ける聖書及聖書協會
第三章……五三七
禮拜及儀式。東方教會に於ては儀式大に重ぜらる。露西亞人の形式を貴ぶ事。祈禱の儀式。教會堂内の儀式及摸樣。耶蘇復活祭。露西亞教會と美術。迷信を防ぐの注意。畫像。寄神聖女。畫像の

製作。教會の音樂及唱歌
第四章……五四九
精進日及祭日。四大精進期。人民の之を守るに堅き事。休日。其非常に多き事並に其弊害。ジュリヤス曆。之を改め難き理由。露西亞の「古聖」。「古聖」の遺骨に對する尊崇。巡禮
第五章……五五八
露西亞教會の聖餐式及僧侶と信徒との關係。僧侶妻帶の結果。結婚式。離婚。懺悔。其式の實況。懺悔式の謝金。聖式を受くべき法律上の義務
第六章……五六七
教會と國家との關係。露西亞教會史の主もなる時期。ビザンスに從ひたる時期。二中央管長の時期。獨立大管長の時期。大管長ナイコン及聖俗二權力の爭。彼得大帝と大管長制度の廢止。宗務院の創設。教會の事務に於ける皇帝の權力。皇帝は教會の首長なりとは異なるや
第七章……五八三
教會內部の組織。宗務院。其組織及其事務取扱。其正員及補助員。宗務院總監及其文書局。宗教上の出版檢閲。僧正。僧正管轄宗區の廣さ。宗區會。離婚事件の取扱。宗區會書記の勢力。僧正の地方會議
第八章……五九七
黑僧。僧庵及庵僧。僧侶に二種類あり。庵僧勢力を占む。露西亞僧庵の性質。其の歷史上の地位は頗る重し。庵僧及尼の數は比較的少なし。如何なる人が庵僧となるや。僧庵は國家の一制度なり。其種類。其財產及財源。其事業。尼寺。尼
第九章……六一六
白僧。白僧は一の種族となれり。世襲僧。持參金としての教會。教職の細別。僧侶の教育。中學林及大學林。此等の學校の特色。

教師。學校內の空氣。學科。白僧の物質上の境遇。多數は無給料。
補助費增加の傾向正教會經費豫算表。教會の財產。財源。謝金。
之を集るの困難。僧侶の貪慾。祭日に信徒の家を歷訪する事

第十章……六三八

白僧(其の續き)。其社會上の地位。其孤立。其卑屈。上役僧の處置
振り。寺僧の家族。其妻。其子。僧門に生れたる子弟の傾向。僧
侶の地位改良の計畫。寺及僧の數を減ずるの案。其缺點。僧侶と
教育事業。教會學校說教は近頃まで廣く行はれざりし事。黑僧と
白僧の別は徹去せらるべきや

第三編　ラスコル(別派)及諸宗派……六五四

第一章……六五四

「ラスコル」即ち「別派」の起原及性質。其宗教上の原因。儀式を重んず
る事。祈禱書の修正は革命を招けり。祈禱禮拜に關する主なる爭
點。「舊式家」即ち「舊信家」。彼等は「東方教會」の主義を唯だ極度に及ぼ
したるなり。彼等がスラヴ語の祈禱書を固守したるは暗に外風輸
入に反對したるなり

第二章……六六一

「別派」の起原及性質。其政治上の原因。「別派」は彼得大帝及以下諸帝
の改革に對する反動なり。「別派」は保守黨の反對なり。彼得の改革
は「末世」の徵候。彼得は惡魔。惡魔の世。ナィコン及彼得大帝以后
の新慣例の排斥。蓄髯問題。「ラスコル」と僕農制度及役人の專制に
對する不平

第三章……六六八

「別派」の進化。極めて論理的なる發達。「舊式家」は僧侶を有せず。僧
侶なければ聖式を行ふに由なし。「ラスコル」二派に分かる。有僧派
及無僧派。極端家の到達せる結論。無僧無結婚。聖式廢棄に就て
の辯明。末世の到來惡魔の世。身を殺して惡魔の世を離脫せんと
する者あり。自殺及「火の洗禮」に依て救を求むる事。基督の再來。

ナポレオンを新救世主と思ふ者ある事
第四章……六七八
「別派」信徒の數。之を知るの困難。假粧せる別派信徒。俗間に勢力ある事。別派の配置。大露西亞人間に最も多し。開拓者としての「舊信家」。別派の勢力あるは信徒の多きが爲めのみに非ず。「舊信家」の道德上の長所。其の財力に富む事。其原因。彼等の敎育
第五章……六八六
「別派」中の主なる派の組織。「有僧派」。「別派」の諸團躰は先づ始めに遯世的殖民を爲したる事。「莫斯科墓地」が大本山と爲りたる次第。「舊信家」が獨立の僧職制を得んと欲したる事。「ピエロクリニツア」の新大僧正及其任命せる僧正。其分裂別派信徒を國敎に復歸せしめんとする政府の盡力。舊式を行ふ事を彼等に許せり。連合の妨害物
第六章……六九九
「無僧派」の組織及敎義。敎會組織を爲すの困難。其分派の多き事。
其の保守にして且狹量なる事。遯世的殖民。無僧派は無政府的となるの恐あり。皇帝の爲めの祈禱。結婚。自由戀愛論。獨身論。セオドシヤン派の說。男女の交は凡て不正。今日に於ても猶極端論を守れる宗派。「遍歷派」。世を棄るは宗敎上の義務。此派の中の二種類即ち「巡禮者」及「施主」。他の極端なる宗派。「無言派」「否定派」及「非祈禱派」。「ラスコル」の最後の結論
第七章……七一六
「別派」に無關係なる宗派。其二大別。「神秘派」。「神秘派」の一般の特色豫言及權現を信ずる事。「神秘派」中の「分派」。「苦行派」。其主義及傳說。其儀式。其信徒の社會の上下に多き事。「跳踊派」。猥褻なる儀式。所謂「聖愛」。殘忍なる儀式
第八章……七二八
「神秘派」(其の續き)。「去勢派」。男女の去勢。「血の洗禮」及「火の洗禮」。其布敎法。「去勢派」の歷史及敎義。十八世紀に於ける此派の基督。彼

得三世及ナポレオンは其救世主。「去勢派」の得意の職業。其富。「去勢派」に對する政府の取締。精神的去勢を說く者あり

第九章……七四〇

合理的及新敎的宗派。「モロカン派」及「ダコボルツィ派」。其起原及神學。神及靈魂に關する一種の說。其の現社會及俗權に對する觀念。社會主義的傾向。共產黨。ポポフの共產的社團。是れ偶然特發の事に非ず。「スツンド派」。新敎的精神が南部の獨逸移民より農民に傳はりたる次第。其敎義及進步。「サベス派」

第十章……七五四

近頃の諸宗派。宗派は絕へず生ず。人民の迷信及輕信。男女の豫言者。新異端の例。當代宗派家中の摸範。スタエフ。其神學及政治上の意見。上流交際社會間に於ける派。其の下流社會に傳播するに及び鎭壓さる。レオ、トルストイ伯。其の村落豫言者と似たる所。其思想は農民と同調同色。彼れの耶蘇敎研究。惡に抵抗せざるは耶蘇敎の根本主義。彼に於けるスタエフの感化。社會改良家としてのトルストイ。其主義は耶蘇敎的佛敎と云はんよりも福音的虛無主義なり

第十一章……七七八

「別派」及諸宗派の法律上の地位。「別派」に對する政府の態度は屢々變ぜり。正敎會が俗權の助力を求めたる事。又無形の武器をも求めたる事。「對論」。近年別派信徒に與へられたる權利。其利益は大なるも彼等の自由は未だ十分ならず。第三編の結論。別派諸宗中より果して新耶蘇敎起るべきや

第四編　宗敎上の自由及異宗派……七九一

第一章……七九一

國敎と外國の異宗派。正敎會と露國との關係。外來の異宗派を忌み嫌ふ事。之に布敎を許さず。正敎會のみ布敎の特權あり。其心の自由に對する政府の見解。政府の保護は幾何の利益ありや。露

西亞の布教

第二章……七九八

外來の異宗派。耶蘇教に屬する諸宗派。露國政府は諸宗派をして正教會と同一の組織を爲さしめんとせり。アルメニヤ教。其の首長即ち「カツリコス」が實力を失ひたる次第。プロテスタント教。露化政策の犧牲と爲れり。ペルチック沿岸諸州に於ける正教派の布教。其手段方法。カツリック教。舊教即波蘭。「羅馬舊教宗務院」。法王と皇帝との爭。舊教派僧侶の不足。教會に波蘭語を禁じて露西亞語を用ひしめんとす。波蘭舊教徒の不自由。「聯合派」。之を正教會に返へらしめんとする政府の盡力。其迫害。露西亞教會と羅馬教會との聯合問題

第三章……八一四

耶蘇教以外の異宗派。猶太人。其數の多き事。猶太人問題の觀察點。猶太人排斥の暴舉。在波蘭及露西亞の猶太人の風習。其の法律上の地位。權利の束縛。內地に居住する能はず。土地を買ひ若くは借る能はず。猶太人と耕作。猶太人と市中の職業。營業の束縛。大中學入學の制限。此特別法の結果。却て其目的を破れり。猶太人に自由を與ふるは經濟上にも利益あり。回々教徒。改宗の困難。彼等の組織。彼等の法律上の地位。佛教。歐羅巴に於ては衰微の色あり。亞細亞部に於ては如何。露人に於ける佛教の感化

第四章……八三九

結論。宗教上及精神上の統一。宗教上の自由は大帝國に必要なり。容易に實行され得る唯一の自由。露西亞に於ては宗教上の自由が政治上の自由に先だつの望みなし

露西亞帝國

ア、エル、ボリユー著
林　毅陸譯
鎌田榮吉
有賀長雄閲

第一巻　露西亞の國及民

第一編　天然、氣候及土地

第一章

露西亞を知るの困難。其地形及氣候。西歐との異同

今や歐洲の諸國は一家族の如き姿を成して、相互利害の關係は複雜と爲り、啻に外交上の事件に關して利害を同ふするのみならず、内治の事に於ても亦同じく然り。即ち外國の事情を知るの必要なるは亦多言を要せざるなり。而して歐の東隅に

國を成して東洋を背に負ひ、歐洲中最廣の版圖と最多の人口とを有する露西亞に
して、却て最も甚しく人に知られざるは、抑も何ぞや。距離の遠大は最早今日に於
ては露西亞と西歐とを離隔するの力あるものに非ず。要するに露西亞の風俗制
度及言語は先づ墻壁を築き、次で政治及宗教上の偏見僻説は更らに溝渠を深から
しむるなり。露西亞人は常に自から曰く、露西亞の眞相は露人唯だ能く之を寫す
を得べしと。然れども露人能く自國の事實を公平無私に記するを得るや否やは
甚だ疑はしく、且つ露國の事に關し互に意見を異にして種々の判斷を下すは、露人
間に於けるよりも甚しきはなし。吾人は到底自から之が解釋を試むるの外なき
なり。

然れども露西亞は一の謎語なり。變化相繼ぎ動搖相接し、終に如何の定形を取る
に至るべきや未だ明ならず。左れば之を觀察するに當りても、吾人は其一時の外
形若くば紙上の體裁に誤らるゝことを避けて、深く其眞事情を看取するを努めざる
可からず。實に其過去一二世紀の間に蒙りたる變化は非常にして、伊太利及日本
を除きては亦他に其比を見ざる所なり。而して其改革や極めて雜多にして之を
調査するに非常の注意を要し、又其施行猶新にして且未だ完了に至らざる者も有
るに因り、今日に於て其得失を知るは容易に非ず。加之吾人は敢て今日の露西亞
を研究するを以て能事了ると爲す能はざるなり。夫れ現在は過去と深き關係を
有するものにして、露西亞今日の民情文物は總て其因て來る所頗る遠く、其文明は
深く國土に根ざし、人民の血液より發し、過去幾世紀間の歷史と離る可らざる關係
を有せり。即ち今日の露西亞を知らんと欲せば吾人は先づ其過去の歷史を伺ひ、
其發達を左右し其國風を養ふに至りたる所以のものを究めざる可らず。是れ實
に一大問題にして之を説明せざる以上は到底其現在を知り又將來を卜する能は
ざるなり。故に吾人は先づ其天然、土地及氣候の有形無形の影響如何、及び其人種
の性質如何等より研究を試みんと欲するなり。

露西亞帝國の地圖を披き見て先づ第一に吾人の注意を惹くものは其版圖の廣大
なること是れなり。其面積は實に千二百萬平方哩以上にして殆んど佛蘭西に十一
倍し、地球上最大の廣原は之を貫きて横はり、其西北には歐洲第一の湖水ラゴダ及
オニーガ之に湛へ、其東北には亞細亞第一の湖水ベイカルを西比利亞に有し、南に

は世界第一の湖水裏海及アラル海を有せり。而して其河亦之に應じて大にして、亞細亞部のオービ。エニセ。レナ。アムールの如き、歐部のニーベル。ドン。ヴォルガの如き、皆世界の大河たる者なり。而して其土地の十分の九は未だ開墾せられざるに、既に之に接息するの民は九千萬を超過せり。

次に歐洲の地は海岸犬牙の狀を爲して、宛も細裂せられたるの觀あるも、露西亞は全く之に反して純粹に大陸的なり。又其氣候も大陸的にして冬寒夏熱共に極度に達し、大抵の地方は一月には寒帶に屬し、七月には熱帶に屬す。蓋し西歐の如く亞米利加よりの温波及サハラよりの暖風によりて氣候の緩和を得るに非ず、寒威膚を裂くの北風は自由に全國に吹き渡りて之を防ぐの山とては無く、折角ウラルの山脈あるも殆んど赤道に垂直を爲せるに因り、敢て北極の寒風を遮きるに足らず、又中央亞細亞の砂漠より吹き來る熱風を防ぐと能はず、遂に寒暑共に其酷烈を極むるに至るなり。實に斯く山無く谷無く、滿目茫漠として唯だ變化なき平地に過ぎざるは露西亞の一大特色たり。而して又西歐に於ては太西洋より水氣を得、之をアルプスに貯藏するとなるも、露西亞は海に遠く且つ山を有せざるが故に、水氣甚だ稀薄にして雨量乏し。夫の南部地方に於て、温氣と水氣との配合宜しきを待ずして地味の豐沃を妨ぐるも、畢竟之が爲めにして、又南方の全土に樹木生育せず、見渡す限り乾燥せる一平原に過ぎざるも、幾分か之に原因するとなくんば非ざるなり。

以上に摘記したる如く、一般の地形、氣候、水氣等の點より之を見る時は、露西亞は西歐とは全く相反する者にして、夫のバルチック海と黑海との間の狹き所こそ寧ろ歐亞の境界とも見做すべきものなれば、露西亞は亞細亞の延長したるものと稱するも可ならん。人或はウラルを以て其境を爲すものと言はんも、ウラルは決して露と亞とを區別するものに非ず、山脈高しと云ふも絶えず雪を戴くに非ず、且つ其中央は割合に平坦にして峻岳の交通を妨ぐるに足るあるなし、而して北風は其兩側に等しく吹き來りて東西の植物は殆んど相同じく、要するに露西亞と西比利亞とは敢て別國土に非ず、他日若し西比利亞の人口稠密となるに至らば、ウラルは同一身躰の脊髓たらんのみ、中軸たらんのみ。

然らば即ち露西亞は全く亞細亞の一部なりやと云ふに決して然らず。其國自か

ら一種の特色を有し、西歐と異るが如くに亦東亞とも異れり。アレキサンドル三世は嘗て『露西亞は世界の第六部なり』と言ひしと云へり、是れ必ずしも誇張の言に非るなり。若し夫れ强ひて此と相似たるの國を求めば北米は即ち是れならんのみ。其廣漠たる天地は飽迄も人間の大活動を試むるに足るべく、而して文明の發生地と爲るには不適當ならんも、他より文明を輸入して之を應用實施するには最も適せり。其氣候は悪しく、山林は乏しく、茫々として一大荒野の觀を呈せるに因り、一見到底人文發達の好土たらざるが如しと雖も、由來天然の惠助饒かなる熱帶地方は却て健全なる文明の發達を爲すものに非ず。露西亞に於ては寒氣の酷烈なると土地の廣漠なるとを以て至難の妨害と爲すと雖も、寒氣は酷熱よりも之を防ぐに易く、又土地の廣漠なるは今日に於ては最早恐るゝに足らず、將來に於ては寧ろ却て其利用する所とならんのみ。

第二章

二大帶。森林帶及平野帶。平野帶中の區別。黑壤區。沃野區。荒原區

露西亞の大特色は非常に無變化なるに在り。積雪皚々たる北部地方と熱風地を焦がす裏海海岸とを比較する時は、其相違非常にして、此兩極端の間には種々の變化に富めるならんと思はるゝも、事實は決して然らず。西、カルパシアン山脈の高地より東、ウラルの横たはれる所に至るまで、其間一帶の廣野は氣候地勢全く同じく、又南、コーカサスより北、バルチックに至るまで其廣袤は西歐諸國全體よりも大なれども、變化の度は其十分一にも達せざる小國に劣れり。然れども斯く無變化なる其中に於て、地味植物水氣等の點に於て大に相反せる二大帶、南と北とに横はりて歐部露西亞を東西に横斷し、更にウラルを横りて亞細亞にも延長せり。即ち北部の森林帶と南部の平野帶と是れなり。此二帶の相違や即ち幾世紀間露西亞を裂きて之を二分したる歴史上の爭鬪の深因にして、夫の坐業の北人と遊牧の南人との不和と云ひ、露西亞と韃靼との軋轢と云ひ、後には又森林地方の中心に興りたる莫斯科王國と自由を愛する平原の健兒たるコサック人との衝突と云ひ、自か

ら其源を此に發せるなり。

扨て此二帶の中森林帶は平野帶よりも其含む所廣くして、北方及中央の全土を蔽へり。而して極北に於ては植物は生育すると能はざるに因り、其起點は北緯六十五六度の所よりして次第に南進し、莫斯科を過ぎ、キーフに達せり。樹木は始めは樅と落葉松にして次に山松、樺となり柳、白楊の類之に雜り、更に南に進む時は菩提樹楓楡等生育し、中央に及べば樫を見る。此地方特に其西北部は一帶の低地にして河流に富み露西亞の大河は皆其源を此に發せり。而して之か堤防と爲るべきの丘陵存せざるが故に、河流は相合して一大沼池と爲り、或は無數の湖水と爲れり。又此森林帶は半年は冬にして地は往々二百日以上も雪を以て蔽はれ、河流は五月或は四月の末に至らざれば其氷解を見ず。故に耕作の業に從ふは甚だ不便にして、生活するに容易ならず。思ふに他日工業の盛んに興るに至らずんば此地方の繁榮は望む可からざるなり。

第二の平野帶は南部一帶の地を含みて西より東に走り、遠くウラルを越えて亞細亞内部の荒野に及べり。此帶の地勢は前者よりも平坦にして其面積は佛蘭西に

數倍せるにも拘らず、高さ三百五十呎に達する山を一も有せず、見渡す限り唯だ茫々として、涯際なき太洋を望むに似たり。斯く山なく、谷なく、從て亦樹木なきは其大特色なり。而して雨は春と秋とに極不規則に少しく降るのみにして、極南の或地方に於ては一年中、否、十八ヶ月間一滴の降雨すらなき所なきに非ず。而して寒暑の變亦非常にして宛も熱帶と寒帶とを混じたるが如く、唯だ之を北部に比すれば冬季短しと云ふのみにして、寒威は殆ど劣るとなく、最熱より最寒に急變して春と秋とは僅かに數週間に過ぎざるなり。即ち裏海近傍及コーカサス山麓の所にても夏期は攝氏四十度の酷暑に達するに冬期は氷點以下三十度に降り、亞細亞の國境キルギヅ地方に於ては七月の日中には驗温器は沸騰して破裂せんとするに、冬は往々水銀氷結して數日溶けざるとあり。而して其最も甚しきは西比利亞及トルキスタンの内地にして、アラル海の近傍は最高寒暑の差八九十度に達せり。而して此等の地方よりも氣候稍寛和なるべしと思はるゝ黑海及アゾフ海の北方に於てすら、其差七十度を超ふるとあり。クリミヤ半島も亦此種の寒暑の激變を免れざるなり。

抑も南部露西亞は木なきを以て特色とするも、敢て必ずしも植物の生育するとなしと云ふに非ず。特に地方に依ては地味大に美なるものあり。蓋南部地方は地味、開墾及人口等の點よりして、之を東北より西南に走れる三區に分つを得べし。即ち黑壤區(ブラックエールド)、肥沃なる平野區及砂地或は鹽氣ある荒原區是れなり。此中黑壤區は西南ポドリア及キーフ地方より發して東北カザンに及び、更にウラルを超へてトボルスクの南部に達し、北は直ちに夫の森林と湖水とに富める森林帶と相接して地味最も肥沃を極め、穀物の生產甚だ饒なり。左れば人口も最も多く、平均一萬哩に付き六十人乃至六十五人の割合にして、其西部には七十五人以上なるもあり。而して此沃地と黑海及アゾフ海との間の大半を占むる者は即ち第二の沃野區にして、高さ人を沒するに足るの雜草は非常に繁茂し、從つて地味の肥沃を致し、之に人工を加ふる時は、以て良耕作地と爲すを得べきなり。然れども雨なき時は滿野の綠草は忽ち烈日の爲めに燒き枯らされ、左なくば冬に至て雪の爲めに枯死し、昨日の綠野は忽ち化して荒冷の原と爲る。要するに此地方は必ずしも樂つべきの地に非ず、現に茫々たる草野の次第に開墾せらるゝを見ると雖も、猶勞力の少きに加ふるに旱魃と材木の缺乏とのために、其進歩は甚だ遲々たり。而して旱魃の災に對しては到底如何ともすると能はず、水の缺乏の爲めに其最良の沃土も豊凶常ならずして、實際平時は露西亞帝國の穀倉とも見做さるべき地方が、忽ち飢饉の厄に罹るが如きは決して珍らしからざるなり。而して又材木の缺乏は薪材と建築材との缺乏を意味し、是亦大に其地の發達を妨ぐと雖も、道路及鐵道の開通と炭坑の開鑿とは次第に此缺點を補ふを得るとならん。特に其地たるや水利の便を有するに因り、歐洲と貿易を開くに容易なるは最も有望の點なりとす。左れば人力次第に天然の妨害に克ちて、今日は猶一哩に付き僅に三十五六人の人口を有する一大荒野たる此三十萬乃至四十萬方哩の沃土も、終には夫の黑壤區と同じく純粹の好耕作地となり、遠からずして露國の中央に六十萬乃至八十萬平方哩の一大良田を見るの時あるべきなり。

第三區は純粹の不毛磽确の土地にしてウラル、キヤスピアン荒原即ち是れなり。此地方は素と海底たりし所にして地味全く耕作に適せず、見渡す限り沙漠に非ざれば鹽氣を含める土地にして、所々に散點する者は唯だ鹽湖のみ。クリミヤの北

部と其附近のアゾフ海岸地とを見るも猶土地磽确にして耕作に適せざるは、敢て上に記したる所に讓らず。要するに東南一帶の地は到底何の用をも爲すに足らざるなり。

猶終に臨みて記せざるべからざるは、近來露領となりたるコーカサス及クリミヤの南岸なり。此地方は他と全く異なりて、山高く樹へ森深く茂り、各種の草木は盛んに繁茂して、宛も露國廣野の單調無變化を償はんとするが如し。畢竟是れ純粹の露西亞には非ざるなり。

第三章

全國の齊一。大原野は政治上の統一に適す。人口疎密の不平均。一大殖民國。兩面の女神

露西亞の土地は斯く地方に依て異なる所ありと雖も、而かも區劃割據の勢は全く無く、尤然として自から一大國民の居に適するものあるを忘る可らず。南北の二帶が各其特色を異にするは事實なりと雖も、第一に彼等は共に均しく平原地にして、其の間に境界の横はるものあるに非ず。第二には氣候亦同じくして共に嚴冬を有し、アゾフ海の氷結するは白海と同じく、裏海の北半は亦芬蘭の灣と異ならず。而して南北の間には山あるなく、之を貫ける多くの河は却て其の間を連綴繋合せり。否、啻に斯く共同の點あるが爲めのみには非ず、互に長短を異にして有無相助くるの必要あるは、正に其結合をして益々固からしむるの媒介と爲れり。例へば森林と耕作地との相交はれる所、即ち往日莫斯科王國の在りたる中央地方は敢て他に依頼するの必要なきも、北部は之に反して穀類を南部に仰ぎ、南部は亦木材を北部に求めざる可からず。即ち其相頼れるは相結ぶ所以にして、天は宛かもバルチック海よりウラルに至り、北氷洋より黑海及裏海に至る其間を以て、一大帝國の地として定めたるが如し。而して露領亞細亞も地勢自から露領たるべきの趣を具へ、特に西部西比利亞は歐部露西亞の延長繼續せるものにして、之を外國の殖民地と云ふは適當に非ず。要するに其全躰の地勢は政治上の統一を容易ならしめ、從て中央集權となり專制主義となるの傾向を有するものなり。

露國に開し第一に吾人の注意を惹くものは其人口稠密の度の非常に不平均なることにして、歐部に於てすら其相違百倍にも達するとあり。蓋東南の平原地方は亞細亞よりの侵入者に便なる爲め、古來之に人爲的配置を爲したるの事情あり、其他歴史上の原因も存すべしと雖も、第一には地理上の原因の最も有力なるは固よりなり。即ち露西亞は古來農業を主とするの國なるに因り、地味肥沃なる黑壤地方及其南に横はれる廣野中の肥沃なる部分は、キーフと莫斯科とを中心として最も多數の人口を有し、全帝國の平均人口一平方哩に付き八人、歐部にて三十人に過ぎざるに、此地方は其稠密の度殆んど中央歐羅巴に讓らず、之を西班牙に比する時は既に優れるなり。若し夫れ歐部の一半及亞細亞部の四分の三に至ては、極寒又は極熱の爲めに生活甚だ困難なるが故に、人口極めて稀少にして、今後其著しく增加せんとも到底望なきなり。然れども若し單に農業に依賴するとを爲さずして、盛んに工業を興すに至らば、爲めに人口の增加を見るに至るべきや疑なきが如し。蓋露國は各種の製造に必要なる材料を國内に有するのみならず、且つ鐵と石炭とにも富むが故に、今後諸鑛山の開墾盛んに營まれ、鐵道の便亦開くるに至らば、其地方從つて繁榮と爲り、ウラルの鑛山は西部西比利亞の好野を開き、アルタイ及アムールの鑛山は中央亞細亞の開拓を助け、宛も夫のカリフォルニア及オーストラリアの金山發見と共に其地方の開拓を見るに至りたるが如きものあらん。

抑も露西亞は次第に膨脹したるものにして、其發達史は一殖民史なり。始めは西に、次ぎには北と中央に、而して今日は南及東に殖民的運動を營めり。之を例へばニーベル、ドン及ヴオルガ諸河の下流地方は北米のミッスーリー及ミスシッピー諸河灌漑地の如く、露西亞の東部は北米の西部に似たり。現にセバストポル、ケルソン、ニコラエフ、カルコフ、ダガンロッグ、ロストフ、サマラ、ペルム、オレンボルグ等の東南地方の都府は、概ね北米太西洋沿岸諸州の首府よりも新にして、夫の新露西亞と稱せらるゝ地方の首府たるオデッサは創設後未だ百年を經ざる程なり。左れば此等新開地の市邑は人爲的に設けられたる者なるに因り、現在の必要以上の設計を爲し、暗に將來の膨脹を豫期して待つが如き狀あるは、亦北米の新開地と異なるとなし。而して此殖民事業を爲すに就ては、露西亞は自ら其人民と資本とを以て之に當りたりと雖も、必ずしも移民を歐洲に求めざりしに非ず。即ち始めには

之を獨逸より得、次きには之を土耳古及墺地利亞より得たり。而して此外來人は十八世紀の半及十九世紀の始めに入り來り、大に此事業を助けたり。其中獨逸人は彼得堡の門外なるペテルホフより遙かコーカサス地方に至る間、特に新露西亞及ヴォルガ下流地方に開墾的殖民を爲し、露西亞人間に雜居して別種の社團を爲したり。（註。バルチック沿岸諸州の獨逸人及其他各地に散在せる商工業者は此等の獨逸移民の外なり。）又土耳古及墺地利亞よりの移民は南部及オデッサ地方の開拓に從ひたり。政府は此等の移民に種々の特典を與へて之を奬勵せしが、就中兵役の義務を免じたり（註。千八百七十四年の法律にて此特典を廢するや、之に不平なる者多かりしが、然しブラルに於て好成蹟を得ずして再び露西亞に歸りたる者少なからず。）斯く外人の助力を求めたりと雖も、而も第一の殖民者は露國の農民（Mujik）自身なりしと固よりなり。彼等は實に徐々に且確實に內地に向ひ、且東南に進み、恰かも春水の廣野に漲るか如く次第〳〵に全露西亞を開拓せり。且露西亞人は一方に於て西歐より文明を輸入し、同時に又之を未開の地に移さゝる可らざりしなり。此事や既に容易ならざるに、而かも之を行ふに軍隊的、專制的方法を以てしたるが故に、自から殖民地の自由なる發達を妨げたると、地味氣候の不利よりも甚しきものあり。是れ實に彼等の殖民事業をして北米に於けるか如き好成蹟を得せしめざりし一大原因にして、歐洲移民の多く來らざりしも畢竟之か爲めなり。

要すこに露西亞は新殖民國なり。此事は吾人の深く留意すべき點にして、露西亞幾多の特色幾多の缺點は此一事實より來れり。或は文明流の嗜好と野蠻の本性と奇妙に混交せるとと云ひ、或は其文化文明の外面的なるとと云ひ、幾分か其原因を此に有せり。蓋此種の矛盾は文明日尙淺くして何事も未だ能く調和するに至らざる新開國には常に有勝の事なり。

されば露西亞は僅に一二世紀を經たるの新殖民國なりと雖も、同時に又千歲の齡を重ねたるの舊帝國なり、一面は亞米利加に似て一面は土耳古に類せるものなり。新にして亦舊、半は亞細亞風の老帝國にして亦歐羅巴風の新殖民地なり。之を譬へば露西亞は二面の女神にして、一は東に向ひ一は西に對し、半面は衰餘の老人にして形容枯槁し、半面は紅顏の少年にして未だ稚氣を脫せざる所あり。此矛盾反對や即ち其政治上の制度並に國民の性情を說明するに足るものにして、吾人の最も注意すべき所なり。

蓋此二面的なるとは夫の露西亞の萬事に行渡れる大特色なる矛盾及相反の源にして、古來各種の事情は凡て此特色を養成助長したるが如し。或は歐亞の間に介在する地理上の位置と云ひ、或は異民族の雜居と云ひ、或は相反する東西二傾面の競爭間に立て其惱ます所となりたる過去の歷史と云ひ、何れも此結果を生ずるの原因ならざるはなし。斯くて事々物々矛盾の性質を帶び、一正一反、半明半晴、人をして其眞相の何れに在るやを知るに苦しましむるは、即ち露西亞に關する批評の紛々たる所以にして、且概ね半面をのみ觀て判斷の正鵠を失ふ所以なり。夫れ此矛盾は有形に無形に、社會上に政治上に、個人の思想感情風俗に、國民の氣風事業經營に、乃至衣服家屋市街等の形に至る迄、凡て到る處見る處に歷々として存せざるなし。吾人は露西亞を觀察するに當り、常に此矛盾の一語を頭中より脫す可らざるなり。

且夫れ露西亞の道德上の發達は勿論、其物質上及政治上の進步も今現に此二面主義の下に進みつゝあり。即ち今日の露西亞は武斷的王國なると同時に年少の殖民地にして、何れにも未だ十分の力量を有せず。亞米利加の如く新開國としての經營に忙はしきと同時に、歐洲の舊國と相對して事を共にせざる可らざるの必要あるに、而かも何れに於ても資格未だ整はずして、恰も藝能を習熟せざる內に登場を强ひられたる役者の如く、又幼時敎育を等閑に附しながら、年長じて勞役に忙はしき其際中に、其敎育を完全にせんとを迫らるゝ青年に似たり。其多忙實に思遣るべく、亦其幾多の失錯も宜べなりと謂ふべし。之を要するに露西亞は今正に定形を取らんとするの途中に在るものにして、縱令今日は他の先輩國に劣る所あるとするも、百年の後其愈々混純の境を脫したる曉には、却て彼等をして後へに瞠若たらしむるものあるべきなり。

第二編　人種及國體

第一章

人種の複雜。莫斯科の人種標本展覽會。人種の複雜なる所以、並に彼等をして一大國民を成さしめたる原因

露西亞の地勢は自から大國の勃興を助くるものあるは前章に述べたるが如しと雖も、國土は必ず人を待て始めて興るを得。知らず露西亞に接息する人民の種類及資性は如何。彼等は歐羅巴人に屬する者なりや、或は亞細亞人に屬する者なりや。能く文明の進歩に適する者なりや、或は然らざるや。

（譯者曰。原譯者ラゴン氏は著者が西歐文明は天下唯一の文明國たるが如き語氣を漏らすに反對し、何故に佛英獨と同一ならざれば露西亞は文明國たる能はざる乎、又何故に發達盛りの年少巨人が其身に適はずして手足の邪魔なる夫の老人の出來合ひの古衣を而かも高價に買求めざる乎と皮肉し、大に氣焰を吐けり。蓋し亦露西亞人の抱負を以て親ふに足るべ可からざる乎と皮肉し、大に氣焰を吐けり。）

且夫れ政治上の統一を致すには、地理上の便利のみにては未だ可ならずして、別に人民の物質上並に精神上の一致を要するなり。血液腦髓の相同きものあるを要するなり。知らず露西亞人は佛蘭西若くば伊太利の如く結合堅固なる民族なりや。或は近頃迄の土耳古及墺地利亞の如く歴史と利害とを異にする雜人種の集合なりや。

抑も露西亞の地勢は極めて無變化にして、斯かる大國にして此の如きは他に其例と見ずと雖も、同時に亦露西亞ほどに多數の異人種を有するは天下實に無比なりと謂ふべし。而かも其複雜なる人種は各其風俗言語宗教を異にするが爲めに、益々紛然として殆んど辨じ難きものあり。例へば其宗教を云へば、耶蘇教にては、希臘派、アルメニヤ派、カソリック派、プロテスタント派及其他西人の知らざる雜多の別派あり、猶太教にてはタルマッド派及ケライズム派あり、回々教にてはサンナイト派、及シーイズム派あり、又佛教シヤマン教其他有らゆる異派異宗紛然として其中にあり。而して其人種は單に歐部のみの概算すら其數二十を下らずして、若し小種族をも加へんには更に之を二三倍するを得べし。

千八百六十七年スラヴ會議の時、莫斯科のダシユコフ博物館に實物大の人形を以て全帝國の人種を活畫的に現はしたるとあり。今其摸樣を記さんに、先づ其大展覽場の北方には西比利亞のタンガス人、ヤクト人、ブリアット人等の次に、馴鹿の皮

を被りたるサモエッド人の、人をしてエスキモー人を想起せしめ、又ラップ人のモンゴル人を聯想せしむるあり。更らに下れば西方に芬蘭のフィン人及ペルチック諸州のエスト人あり、其扁平なる顏面は自がらラップ人及サモエッド人と遠く血統を引けるとを示せり。又東方には同じフィン人中にてヴォルガ灌漑地に散布せる異種族の代表者あり、其風貌愈々歐人と異り、愈々高貴ならず。即ちベルム人、ヴォチヤック人、チエレミス人、モルドヴィン人及チユヴァシユ人等にして、其中央にはカザンよりの妙齡の韃靼婦人閑かに立ち、其覆面を脫して晴に東洋的美形を露はせり。此一團と相對して、西方にレット人、サゴミット人及リスエーニア人の農夫、及其終尾にパイエロラッス人あり。是れ即ち西露西亞(一名白露西亞)の移民を代表するものにして、其方形の顏面は猶太商人及機械師の長顏痩鼻と相對して人の注意を惹けり。

扨て愈々展覽場の中央に進めば廣きプラットフォームの上に全帝國の主人たるヴェリコラス人(大露西亞人)悠然として立ち、粗野素樸たる長靴赤シヤツ等の農夫は、其地方〳〵の風俗を現はせり。其下にマロロス人(小露西亞人)は稍開化したる

裝束にて、男子は高き羊皮の帽を被ぶり、少女は組紐の加はれる飾りの花を戴けり。小露西亞人の後には波蘭人及南部地方の諸種族あり、即ちベッサラビヤよりの夫婦のモルダヴィアン人、クリミヤよりの韃靼貴公子、さては其隣りのジプシー乞食、カライト新婦等相並んで立ち、終りには新露西亞及ヴォルガ下流地方よりの二名の獨逸移民差控へ、骨格衣服等全く露西亞人とは異なるあり。

更に南西の方に當ては、東方平原地方の回々教及佛教を奉ずる諸種族、亞細亞風の異種異樣の風俗骨相を其儘に現はして立てり。先づキルギズ人は高く尖りたる帽を被り、スタヴロポル及アストラカンよりのカルミック人は細目黃色にして、美しき絹或は天鵝絨の飾を帶び、其次にオレンボルグ或はウファよりのバシユキル婦人は赤衣を被むり、頭には貨幣にて端を飾りたる頭飾を戴けり。猶極南に於てはコーカサス地方の諸種族即ちアルメニヤ人、チエルケス人、グルヂン人(ジオーヂア人)ミングレリアン人、クルド人等は、目を驚かす計りの奇異の粧飾を盡して立てり。若し夫れ更に此室の最端に至れば、ベクよりのケベル人の半ば裸體の儘にて火を拜めるあり。

右展覽會の示す所を見るも、露西亞の人種が如何に複雜雜多なるやは明なるが、其の此に至りたるは畢竟地理上の事情に基くものなり。即ち東にも西にも境界となるべき者なきに因り、諸方より侵入するに易く、從て此に入り來りて國を成したる者は古代のクルツ及チユートン人等は暫く擱き、有史以後に就て之を見るも、シス人、サルマット人、ゴス人、アヴァル人、バルガ人、ハンガリア人、カザル人、ペチエネグ人、リスエーニア人、モンゴル人、韃靼人等勝て算ふ可らず。而して此等の諸民族は、其地勢互に割據して別々に國を成すと能はざるに因り、自然に相集りて統一を爲すに至れり。即ち北、北氷洋より南、黑海に至り西、バルチック海より東、ウラル山脈に至る其間には、山一も無くして茫々たる其中に、雜多の人種は水の平原に氾濫するが如くに流れ込み、風習宗教言語等の差の其和同を妨ぐるにも拘らず、宛も諸泉より流れ下りたる水の相合して大河となるが如く、彼等は耶蘇教と莫斯科王國の力の下に、終に相集りて露西亞國民なる者を興すに至れり。

第二章

露西亞人種中の三大要素。フィン人。フィン人中の諸種族。

フィン人と露西亞人。フィン人の特色

紛然として辨じ難き此雜種中にも、自から其主なる要素と爲れる三大人種あり。即ちフィン人、韃靼人及スラヴ人は是れにして、夫の西部地方の三四百萬の猶太人、北より南に散布せる一百萬の獨逸人、ベサラビアの八九十萬のルーメニヤ人及其他三四を除く時は、大抵の種族は皆此三者中の一に屬し、且其混和は未だ十分に完了せざるが故に、各人種の徵證は歷々として尙ほ認むるを得べし。

フィン人は往時は今日露西亞と稱する地方の大半を占めたるが如し。註。フィン人は又チユッド人と云ふ「チユッド」とはスラヴ語にて「怪物」若くは「異人」の意味あり。露西亞人間に有名なりし寬術師より此名を生じたるものならん。而して此人種は明かにアーリヤン族に屬せず、亦セミチック族にも非ず、夫のウラロアルタイ派と稱する部中に加ふるを以て至當と爲すが如し。蓋ウラルとアルタイ山脈間の地方は正に其の起點なるべしと思はるればなり。次に彼等フィン人は太古アーリヤン人が中央歐羅巴に移住したる其當時に、同處に棲息し居たる種族中の

遺民なりや否や、其邊は頗る茫漠として之を知るに由なく、寧ろ之を以て比較的後世にウラル地方より直接に露西亞の野に降り來りたるものと爲す方、事實に近かるべし。而して其降來の時代はアーリヤン人が歐羅巴に降りたる時代と殆んど甲乙なかるべく、現に夫の羅馬帝國を倒したる蠻人侵入の擧に於て、フィン人は之に與て大に力ありたり。例へば當時の蠻人中最も勇猛の名を博したるハンス人はアヴァル人バルガル人及ハンガリヤ人と同じくフィン族の出なりしが如し。今日の國民中フィン人と直接の系統を有する者は此ハンガリヤ人のみなり。匈牙利以外の地のフィン人は殆んど皆歐部露西亞中に棲息し、其數五六百萬人あり、數多の小種族に分れり。然し之を大別すれば三四族と爲すを得べし、即ち第一はアグリアン族にして之に屬する西部西比利亞のオスチャック人及ウラルの北部に住するヴォガル人は各僅かに數千人より成り、其風俗サモエッド人と異ならず、名義は耶蘇教徒にして實際はシャマン教信徒なり。匈牙利のマジョル人は此族に屬するものなり。第二は東北地方のビアルミアン族にして其數三十萬乃至四十萬の間に在るも、年々減少の傾あり。第三は更に下りてヴォルガ地方に住する一族にして、夫の多少韃靼人の血を混ぜる南部地方のフィン人も其中に在り。ヴォルガの左岸即ちカザン州の近傍に住する二十五萬人程のチエレミス人及ヴォルガ、オカ兩河間の露西亞の中原即ちニヂニノヴゴロッド、ペレザ、シムビルスク、タムボフ及サラトフ等の諸州に住する一百萬程のモルドヴィン人、並に又ヴォルガの左右即ち往時韃靼人の所領地たりしカザン地方に住して其數も少からざるチュヴァシュ人等の、露西亞本部に住する三大フィン民族は、正に此第三族に屬するものなり。第四は西北地方の純粹なるフィン人即ちスオミ人と自稱せるものにして、芬蘭人は正に其主なる代表者たり。此第四族は最も其特色を保存し、同人種中他に同化併呑せらるゝ傾向なきは唯是れのみなり。彼等は芬蘭大公國の總人口の六分の五を占め、其數百八十萬以上と稱せらるゝが、此外近傍の露領諸州に二十五萬人程あり。實に彼得堡府の附近は往時フィン人の占領し居たる所にして、同府門外の村落に於て露西亞語の通ぜざりしは、僅に半世紀程以前の事なり。而して今日に於ても尙ほ所々に散在せり。又バルチック沿岸諸州の主人たりしエスト人と言ひ、若くは今は殆んど亡滅せるリヴ人と云ひ、同じくフィン民族に屬す

るものにして、其他之と血統を引ける者は各所に少なからず。

扨て露西亞のフィン人は斯く小種族に分裂して所々に散在し、種々の宗教を奉じ、種々の生活を營み、且到る處に異人種に支配せらる、始めに幾分か韃靼化せられたる後、更に露西亞化せられ、以て種々の變化を蒙りたれば、縱令其數は在匈牙利の同胞と等しとするも、其政治上に於ける勢力の見るべきもの無きは固よりなり。然れどもウラル以西ヴォルガ地方の所謂露西亞の中原並びに北部に一時散布し、現に地名の如きも其跡を存するもの少なからざる程の此フィン人が、露西亞國民の血液中に一要素と爲て混入せるは、蓋何人も否む事能はざる所なるべし。

フィン人とスラヴ人と相觸るるに當り、後者は唯だ來て前者の間に雜居したるか、若くは之を逐ふて其場所を奪ひたるか、此點は何れとも明言する能はず、多分は二種の運動同時に並び行はれたるとならん。今フィン人實際の配置の有樣より考ふれば、彼等はスラヴ人の爲めに西はバルチック海岸に推され、東はウラル及ヴォルガ中流地方に逐はれたりと言はざるを得ずと雖も、而かも尙ほ混交雜居の跡は露西亞人の骨相の上に藏ふ可らざるものなり。

フィン人の骨格は其文化の度と同じく、種族に依て大に同じからず。例へばラップ人及チュヴァシュ人の如きは頗るモンゴリヤ人に似たる所あるも、芬蘭のスオミ人及バルチック海岸のエスト人等の如きは、モンゴリヤ人よりも寧ろコーカシヤ人の痕跡に富めり。されど不同の中にも共通の特色を有し、最も歐羅巴と混じて至大の變化を受けたりと云ふマジアル人の間にすら尙ほ其存ずるものあり。即ち彼等はアーリヤン人及セミチック人に比すれば、概して骨格の構造稍脆弱にして足も短小なり。又頭は概ね圓く短くして、後頭部は餘り發達し居らず。顏は大抵扁平にして顴骨高く、目小にして鼻廣く、口大にして唇厚し。此特色は露西亞人の上下を通じて之を見ると珍からず。而して農民特に婦人間には最も多し。

扨て此のフィン人は無數の種族に分かれて處々に散在孤立し、而かも天然の不便甚しき地方に推し込められたるが故に、到底一種觀るに足るの發達を爲すと能はざりしと雖も、其代りには他の進歩せる人種と同化するの力に甚だ富めり。實に他の文明に投じて之に同化するに敏なるは其大特色たり。且つ彼等は早くよりして耶蘇教を奉じゝに因り、特にスラヴ人と合同し、歐洲の文明と混和するに便なり

しなり。又彼等は音樂及詩歌に對するの嗜好を有し、特に詩歌の如きは西歐先進國の珍とするに足るものあり。加之彼等は剛毅忍耐固執の性を有し、抵抗の力强く、不撓不屈の勇氣に富めり。是れ夫の眇たる一少團隊を以て、獨逸人、スラヴ人及土耳古に對して屈するとなかりしマヂアル人、若くば夫の堅忍勤勉なるボルガー人が、最も明かに世に發揮したる所なり。

之を要するに、彼等は決して他の民族に比して特に劣等と稱すると能はざるのみならず、芬蘭のフィン人の如きは或る點に於ては露西亞の農民に優り、就中政治上に於ては、アレキサンドル二世の時自治の舊に復せられて以來、全帝國中最も進歩せる地位にあり。フィン人決して輕んず可らざるなり。

第三章

韃靼人。韃靼人及モンゴル人。カルミック人。露西亞の韃靼人と西班牙のムール人。韃靼分子の減少。韃靼人の習慣及資性

第二の要素は通常韃靼人と呼び來れる人種なり。始めヂンギスカンの帝國を興したるモンゴル人が、西に向て侵入し來るや、歐羅巴人は之を呼ぶに韃靼人なる名を以てし、爾來引續き推し寄せ來れる雜種族をも、一般に韃靼人と稱したり。而してモンゴルなる本名は、却て夫のウラロアルタイ人中の一種族にしてトルキスタンを起點とし土耳古人を主なる代表者と爲せる者を意味するとと爲れり。然れどもヴォルカ河畔に居住したる韃靼人は土耳古人と血縁頗る近く、否、寧ろ土耳古人と同一にして、正に同一地方より起り、同一言語を有し、相異の點は唯だ土耳古人は後れて歐羅巴に侵入し且侵入後に回々教に改宗したりと云ふに過ぎず。されば、トルキスタンより降り來て露西亞に居住したる種族の苗裔は、今日に至るも尙ほ其起原を忘れず、カザン及アストラカン地方の韃靼人は自から土耳古人と稱せり。

歐羅巴に入り來りたるモンゴル人は其後次第に變化を受け、今日の土耳古人はモンゴル族よりも寧ろフィン族に近く、特にバシュキル人及チュヴァッシュ人の如きは、之を土耳古人と云はんか、フィン人と云はんか、殆んど其血の厚薄を辨じ難き程な

り。

歐部露西亞には其起原をモンゴル族に有するもの今尚ほ一種存せり、即ちカルミック人是れなり。是れ裏海岸の低地ヴォルガ河の西方に住する種族にして其數殆んど十三萬あり、天幕を携へ駱駝及家畜を伴ひ、アストラカン及スタヴロポル諸州の荒原地方に遊牧的生活を營めり。此種族は支那人的骨格を具へ、一見明かに露西亞人と異なるが如くに亦韃靼人とも異なれり。而して彼等がヴォルガ河畔に移り來りたるは十七世紀の事にして、夫のヂンギスカンの一派には關係を有せず。露西亞はモンゴル人と韃靼人との從來不和なるに乘じ、此新來者を誘ふて土耳古人及クリミヤの韃靼人を攻むるに利用せしが、然し之を嚴密に統御せんとするや、彼等は直接の束縛を受くるを好まざるに因り、飄然相率ひて他に去りたる者少なからず。即ち千七百七十年の冬ヴォルガ及ウラルを越へて東に去りたる者二十萬乃至三十萬の多きに達せり。而して露西亞に留りたる者は、皇帝の主權の下に極近頃迄皆佛教を奉したり。其首長は所謂大喇嘛にして、アレキサンドル一世以來は皇帝之を指名するとと爲れり。此に注意すべきはウラロアルタイ民族中の三大

派が各々宗教を異にしたるとなり。即ちフィン人は耶蘇教徒となり、土耳古或は韃靼人は回々教徒と爲り、モンゴル人は佛教徒と爲りたり。而して其結果としてフィン人は最も好く歐羅巴の文明に移るの便宜を得、韃靼人は一時有力なる國を成して盛況を呈したるも、全く進歩の途を絶てり。事小なるが如くにして其關係する所深きを知るべきなり。

扨て露西亞人がモンゴルの名を受くるは韃靼人の爲めにして、其韃靼人も元來はモンゴルの名に當らざるものなり。然しそは兎も角も、露西亞人はモンゴル人の血を受くると殆んど無しとするも、韃靼人との關係は如何。是れ今吾人の研究せんと欲する所なるが、思ふに韃靼人の露西亞人に及ぼしたる影響はムール人の西班牙人に於けるよりも小なるが如し。ムール人は西班牙に留まること長く、其の占領したる區域も廣く、人數も多く、且つ直接に西班牙半島を支配したれども、韃靼人は十三世紀に露國に入り來りて十六世紀には既に國邊に逐ひ返へされ、其の支配區は歐部露西亞の半を出でず。而かも之を直接に支配するには非ずして、從來の諸公國に貢稅を納めしむるを以て甘んじたり。又ムール人は西班牙最良の地に

殖民したるも、韃靼人は今日に於てすら人口稀少なる夫の南方及東方の平野に散布し、中央の地に向ては僅にヴォルガ及其支流に沿ふて之を溯りたるに過ぎず。當時露西亞人は既にヴォルガ河の中央灌漑地並びに其のオカ河とニッヂニ、ノヴゴロッドにて合せる地方に達し居たりしが故に、亞細亞よりの此新殖民者韃靼人は未だ露西亞人の群中にも進み入らざりしものと謂はざる可らざるなり。而して彼等は西班牙のムール人の如くに殷富繁榮を致さず、且つ專ら定居農業に從ふが如きを爲さずして、遊牧の舊態を猶稍存し、其の設けたる市府も多からずして、其最大なる者も之をムール人のに比すれば猶小なり。即ち何れの點より見るも、其のムール人に劣れるは明かにして、此相異や言語の上にも之を見るを得べく、韃靼語の露西亞に殘せる痕跡は、亞剌比亞語の西班語に於けるよりも比較的小なり。

三百年間露人を支配したる韃靼人も、モスコヴィヤ帝國の勃興の爲めに却て其地位を顚倒するに至るや、露人は彼等に對し敢て西班牙のカスチルが亞剌比亞人を迫害したるが如きことを爲さゝりしと雖も、而かも露人の同化すると能はざりし韃靼人は自から排除せらるゝに至りたり。即ち其次第は敢て他に非ず、韃靼人は今迄自己の支配したりし異教徒の臣民となるとを喜ばざるが故に、耶教徒の軍旗未だ向ひ來らざるに先ち、自ら身を退けて回教の猶勢力ある所に移り、次でカザン及アストラカンの亡ぼさるゝや、轉じてクリミヤ及其附近の平野に降り、(クリミヤ地方に小韃靼の名ありたる所以)、後キャサリン二世の爲めにクリミヤの征服せらるゝや、更に其の同胞の土耳古帝國に向て移れり。而して今日に於てもセバストポールの役後コーカサスの露領と爲りてより、韃靼人はシルカシアン人と同じく、續々其地を去て他に移り、現在に於ては其在留者は合併當時に比して五分の一に達せざる程なり。實に千八百六十年より千八百六十三年に至る間に、殆んど二十萬の韃靼人はトークス州(クリミヤ)を去り、跡に殘れる七百八十四村の四分の三は全く荒廢に委し、其の狀況は西班牙に於けるムール人放逐後の有樣と異ならざるものあり。而して千八百七十四年國民皆軍役に服すべきの制を布くや、其の去る者亦新に起り、今や終に幾世紀間其の支配したりし所、特にクリミヤの如く、百年程以前には專ら其の占領地たりし地方に於ても、僅に其の一小部分を占むるに過ぎざるに至れり。

要するに回教徒は耶蘇教に改宗せらるゝと極めて困難なるの常にして、之が爲めに韃靼人は露西亞人と同化すると能はず、否、自ら去らざるを得ざるの有樣となり、且つ亦彼等は遊牧の民にして南方の平原地方を漂然として去來し、敢て深く內地に立ち入ることを爲さゝりしが故に、其の露人に及ぼしたる影響も從て深きを得ず彼等が最も擴布せし南部地方に於てすらも、其人種上の影響は、北部に於けるフィン人に比して遙かに小なり。

今日クリミヤ地方に在住する韃靼人の數は、其地位を奪ひて之に代りたる他民族に比し、二三倍小なり。然し其半島の中央及北部の高原地方に於ては、依然として遊牧の生活を營み、又バクチ、サライ及カラス、バザル等の豐饒なる地方に於ては、商賣及耕作を業とし、東洋流の舊習を守りて其生に安んぜり。ヴォルガ河附近に在る者、亦農商の業に從ひ、且つカザン地方にてもクリミヤにても、革皮モロッコ皮等を用ひて長靴スリッパ鞍鞘の類を製造販賣せり。而して其の資性に至ては固より一樣ならずと雖も、概して勤儉にして家庭の道德厚く、此點に於ては其土耳古の同胞に決して讓らざるなり。又清潔實直及正廉の美質に富めるに因り、能く各種の業務に用ひられ、特に正直を第一とする職業の如きは殆んど其の獨占たるの姿あり。唯其の第一の缺點と稱すべきは、創造の力を缺くに在り。是れ其の建築物等に微するも明かなる處にして、蓋宗教の結果此に至りたるものなり。抑も回々教は宗事と俗事とを混交し、「コーラン」は聖書にして又法典なるが故に、舊來の法律習慣は其信條も共に動かす可らざる者となり、進步發達は全く望む可らざるとゝなりしなり。扨て今日歐部全躰にて回教を奉ずる露西亞の臣民は僅に三百二十萬に過ぎざるが、其中コーカサス地方の者を除く時は其數二百五十萬となり、更に亦其中より當年露西亞に侵入したる韃靼人の子孫のみを求むる時は、僅かに百二十萬にも達せざらんとす。颱風地を捲くの勢を以て露國に侵入し、且現に長く之を支配し、一時は歐洲全躰をして戰慄せしめたる彼等も、今や全く勢力を失ひて其數次第に減ずるは、古今の變も亦大なりと謂ふべし。

第四章

スラヴ人。東西の二派。之に介在する別種族。露西亞人の形成。

露西亞人中の分派。大露西亞人。白露西亞人。小露西亞人

第三のスラヴ人種は前二者にも優さり、凡て他の種族を從へ且つ併呑したる者なり。此人種は純然たるアリヤン人にして、夫のラチン及チユートン等の民族と異るとなきは、其骨格、言語及舊話に徴するも明かなり。而して其の往古亞細亞を去りたる年代に就ても、何れが前にして何れが後なるや、之を明言すると能はず。而かも其の文明は大に他に劣り、西歐同胞の嗤笑を受くるに至りたるは、畢竟地理上の事情に基けるなり。即ち歐の東北隅に國を爲して亞細亞よりの侵入は受け易く、而して西歐文明の新潮流は至ると難く、斯くて自から其の進歩を遲鈍ならしむるに至りしなり。況んや歐洲近世の文明に貢献したる所の如きは些かも無く、唯だ歐羅巴の東藩と爲りて亞細亞よりの侵入を防ぎたるの一事、錄するに足るのみ。

然らば彼等の天才は他に劣る所ありやと云ふに決して然らず。「學問復興」及「宗教革命」の二大運動の先鞭を着けたるは實にスラヴ人にして、コペルニックはガリレオに先んじ、ヨハン、ハッスはルーテルの先驅を爲しゝなり。且つサキソニー及東方普魯西亞の住民の多數はスラヴ人なるが故に、獨逸の誇稱せる偉人中スラヴ人なる者も決して少からざるべし。特に詩歌に於てはラチン及チユートン兩民族のに優る程の者を有し、セルビヤの「パイズム」(Piesme)と言ひ、小露西亞の「デユミー」(Dumy)と云ひ、共に天下の珍とするに足るの文學なり。若し夫れ科學哲學等の點に於て其の將來の發達如何は吾人の保證し得る限りに非ずと雖も、彼等は内心大に抱負する所あるが如し。

スラヴ人は資性に於てはチユートン人の如くに、魯鈍ならず、極北の地方に於てすら快活敏捷にして熱情に富み、又南方に於ては他國同度の處には珍らしき程感情鋭敏にして、事に動き易く激し易き所あり。之が爲めに純粋のスラヴ人間には政治上の不和紛爭も自から生じ易く、年來其進歩の一大障礙たりしなり。而して其全體を通じて最も特色とする所は、其柔軟にして曲かり易く、能く如何なる思想制度にても之を採用して我物となすを得ると是れなり。蓋スラヴ人の摸倣性に富

むは人の能く稱ふる所にして、實に事の如何を問はず、男女老幼の別ちなく、齊しく認むるを得るの特色は正に此一事なり。思ふに彼等は長く蟄居して大に隣國に劣り、萬事汲々として他に學ぶの必要ありたるに因り、習自から性と爲るに至りたるとなるべし。然れども是れ決して其の別種の國民たるべきの特色を有せざるを意味するには非ず。彼等スラヴ人は列底他の民族中に沒し去らるべき者に非ざるなり。

太古吾人の知り得る限りに於ては、スラヴ人は二團に分れ、之よりして次第に頑頑競爭すゝに至りたるが如し。即ち東ニーベル河の方に當てはボルガー人、セルヴ人、クローツ人及スロヴェン人等の東方スラヴ人あり、是れ露西亞人及南部スラヴ人の祖先たるものなり。又西ヴィスラ及エルブ河畔にはリアシ人、ボール(波蘭)人、チエク人、スロヴァック人及其他の西方スラヴ人あり、是れ爾後獨逸人に亡ぼされ若くば併呑せられたるものなり。而して西に在る者は羅馬の影響を蒙り、東に在る者はビザンスの感化を受け、人種言語の同一なるに拘らず、宗教、文字、曆等の相違は其の連鎖を斷ちて、全く相忌み相爭ふの民族となせり。是れ即ち露西亞人と波蘭人との間に、有形無形に敵意強くして、終に相兩立すると能はざるに至りたる所以なり。

此二大分派の間に西北の方バルチック海に臨み、コーメン及ドヴィナ河の流るゝ地方に、別に一隊の民族存したり。即ちレトリスエーニア人にして、同じくアリヤン族なるもスラヴ人とは離れて國を成したり。然れども其地既に文明の發達に不便なるが上に、之を圍める諸強國の下に絕えず壓せられ、獨逸人、波蘭人及露西亞人の代はる〳〵蹂躪する所と爲りたるに因り、今や其總數は三百萬程に減ぜり。其用ふる言語はリスエーニア語、サモギッド語及レット語の三にして、流石に多年幽居の姿となりて少しも他に移動せざりしが爲めにや歐羅巴の言語中最もサンスクリットの面影を存せり。其地は今日露西亞と獨逸との間に分割せられ、一部分は先きの波蘭王國の東北部(所謂リスエーニア)と爲り居りしが、是れ亦波蘭分割の時露領と爲れり。

此民族中の主なる者はレット人とリスエーニア人となるが、後者は多年露西亞と波蘭との間の所謂リスエーニアと稱する所を占め居たり。今も此邊リスエーニア

に住するリスエーニア人は二百萬人程あり、ヴィルナ及コヴの二州に於ては人口の多數を占めり。此外、境を接せる普魯西亞には二十萬のリスエーニア人あり。第二のレッド人は總數一百萬にも達すべく、クールランド州及リヴォニア州の南半に多數を占めり。此等は人數も少なく且つ細裂せられ居るに因り、固より一國民を組織すると能はざるものなり。

扨て露西亞人の中堅たるスラヴ民族の起りたるはニーベル及ドヴィナの上流地方にして、即ちパルチック海、裏海及黑海の三大海に注ぐ河流の方向を決する高原附近なり。彼等は此地方より河に沿ひて徐々に東進し、同時に南北兩面にも手を伸ばし、斯くて森林の生ひ茂れる其中心に進み入り、フィン人を追ひ散らし、且つ併呑し、終に其間より新しき一大國民を興せり。而してフィン人との同化の容易なりしは、其互に宗教境遇を同ふせしに因ると固より大なり。人或は露國が雜多の人種を含むを以て其の國躰を疑ふものありと雖も、露國は決して土耳古に非ず、墺地利に非ず。異分子の人民は大抵國邊に逐はれて其の離と爲り、中央の地は全く夫の併呑及膨脹の二性質を具ふる一國民之を占め、其の中に在りては獨逸殖民も、フィン人も、韃靼人も共に沒了せらるゝなり。實に此新興露西亞民族の內部に不和不同の點少なくして、却て其生活の同一齊等なるは吾人の驚く所なり。其言語は方言の變化割合に少なく、市邑の躰裁到る處同じく、農民の容貌、習慣、風俗相類似し、能く他國に於て見るの地方的特色なる者極めて少なく、宛も其國の茫々として一大平野なるが如く然り。

然れども此露西亞人の中に二個の別派の各々異れる方言を用ひ、又歷史の上より相和せざるものあり。即ち大露西亞人と小露西亞人とにして其の長短の相違は正しく北と南との永久の反對を代表せるものなり。而して前者は莫斯科を、後者はキーフを中心とし、一は東北に一は西南に伸びて各々其の方面を異にせるが、其中南方の小露西亞人は南方平原の地形上自から外敵の侵入を受け易き爲め、大に膨脹すると能はずして、ニーベル・パック・ニースター諸河の地方に閉居せる其一方に於て、大露西亞人は自由に北と東に擴がり、森林地は殆んど西より東に掛けてウラルに至る間を占領し盡し、更に徐々に南に向ひ黑壤帶及平原地方に膨脹せり。此大小二分派の外に白露西亞人と稱する一小分派あり。白露西亞は一名西露西

亞と云ふ。即ち二派の西方に當りモヒレフ、ヴィテブスク、グロドノ及ミンスク等の諸州に住する者なり。而して其言語より云へは大露西亞人に近きも、歴史的には小露西亞人との關係を以て深しとす。

扨て以上三分派の概數を擧げんに、白露人は殆んど四百萬、小露人は千七百萬乃至千八百萬、大露人は四千萬乃至四千八百萬にして、即ち此等のみにて殆んど歐部露西亞の全人口の半ばを占むるなり。

大露西亞人は最も多くフィン人の血を交へ、且つ韃靼人の感化を蒙り、スラヴ民族中最も純ならざる者なりと雖も然し最も勇悍にして膨脹の力に富み、ロマノフ諸王の現はるゝ迄は、單獨にて莫斯科帝國を形成せしなり。彼等は元來大殖民者にして先づドヴィナ及ニーベル河の邊より徐々に東北に進み、歐羅巴より亞細亞に向ひ、斯くて五六世紀の間に、東はウラルを越へ、南は裏海及コーカサスの外にまで膨脹するに至れり。後ァィヴァン三世及同四世及其後彼得大帝がバルチック海及西歐に向ひ攻勢の運動を取りたるは、唯だ其の本に返りたるに外ならざるなり。

扨て六世紀間ニーベルよりウラルまでの廣土を統御する其間には、彼等大露西亞人も亦自から有形に無形に其の併呑したる人民の影響を受けて變化するとなきを得ざりしなり。即ち彼等は他のスラヴ民族に比する時は稍粗野の風を帶び、且つ獨立自尊の精神及個人的特色等の點に於ては劣るに至れり。然れども一致忍耐不撓不屈等の美質を大に養成して、夫の輕躁事を誤まるの缺點を矯むるを得たるは大に喜ぶべきなり。即ち韃靼人の銅或はフィン人の鉛と混和したるが爲めに大露西亞人の金は其質の純粋を失ふと同時に、其堅牢の度を增すことを得たり。大露西亞人が他の同胞に優りて露西亞大帝國の中堅となるに至りたるは畢竟之か爲めのみ。若し夫れ其同化の方法に至ては、敢て征服に依りたるに非ず、敢て故意に急激なる手段を取りたるに非ず。唯だ徐々に漸々に、宛も春水の野を潤すか如くに進みたるものにして、一見其如何なる順序に依りたるや、其跡は殆んど辨識し難し。且其同化は今も尙行はれつゝあるものにして、露西亞國民は儼然として既に明かに成立せるも、露西亞人の模型は果して如何なる形を取るべきや、今正に「下圖の時代」に在りと謂ふも可なる程なり。

大露西亞人が他の諸民族より蒙りたる影響の跡は、往々之を其顏面上に認むるを

得ると雖も、猶明かにコーカシア人の特徴を存せり。即ち其丈けは低きよりも高き方多く、色は白く目は緑なると珍しからず、亦毛髪は概ね褐色にして色澤あり。是れ正にコーカシア人或は地中海岸の人種に屬するの特徴なり。

小露西亞人は南方の温和快適なる處に住み之を大露西亞人に比すれば容貌麗はしく、丈け高く、手足細く、又資性快活敏捷にして、感情に馳せ空想に耽り、從て沈毅剛健の質に乏しく、着實穩健の思想を缺き、心變り易く且つ惰怠なり。然れとも獨立を愛し個人の自由を重んずるとは北人に優れり。夫の自由獨立の標幟として露人間に尊敬せらるゝザポロッグスは實に此派に屬せし者にして、自由共和のコサック國は今も猶其の多數の理想とする所なり。但今日のコサック人中アゾフ海に臨めるクバン地方に在る者のみ小露西亞人にして、ドン河及ウラル地方に在る者は大露西亞人なり。

大露西亞が韃靼人の侵入を受けたる其當時、小露西亞は自から之と分離し、爾后五世紀の間波蘭及リスヽーニヤの支配を受けたり。是れ其西歐の文化を受け易かりし所以にして、實に彼得大帝以前並に幾分かは同帝の時にも、歐羅巴と莫斯科及露西亞との間に立て、歐風東漸の媒介と爲りたるは、主もに小露西亞人なりしなり。

第五章

西境の異國民族。獨逸人及其勢力。波蘭問題。波蘭人及露西亞人和合の利益。下級細民と共和的政策

露西亞人は小露西亞人及白露西亞人を合するとするも、尚ほ帝國の内部を占むるのみにして、未だ國境に推し廣まるに至らず。即ち國境地方は概ね皆異民族之を圍み、東方亞細亞の方にはフィン人、バシユキル人、韃靼人、キルギス人及カルミック人等の一團あり。西方歐羅巴に面しては波蘭人リスエーニア人及獨逸人等の一隊あり。特に注意すべきは、露西亞人の骨髓たる大露西亞人が西方の異民族と相接觸するは僅に一局部にして、而かも芬蘭灣頭の最も僻れに且人口稀少なる處なるとなり。實に中央及南部に於て、往時のモスコヴィア(露西亞の舊名)と後世彼得大帝及キャサリン二世の征服したる處との間、即ち一方に於ては大露西亞他方に於てはリ

ヴォニア、リスエーニア及波蘭の間には、白露西亞及小露西亞横はりて其間を隔てり。而して白露人と小露人とは露西亞人中僅に第二等に位し、他を露國化するの力に乏しきものなり。之に加ふるに白露西亞には人口乏しく、且小露西亞の境と爲れる地方はピンスクの濕地なるに因り、益々不便を大ならしめり。されば此等の地方は露西亞本部と西方新版圖とを離隔するの溝渠と爲り、ポール人、リスエーニア人、レット人及獨逸人等は自から露化の憂を避くるを得るとなれり。且人口の膨脹は水の低きに就くと一般、其稀少なる地方に向て進むの常なるに因り、露西亞人が亞細亞の無人の野を選で之に溢れ流るゝも亦自然の勢なるべし。

然れども此等異民族の中、或は內地のフィン人と云ひ、トランスコーカシアのジルシン人(普通にはヴォーヴァ人と云ふ)と云ひ、概ね帝國忠良の臣民にして、又バルチック沿岸諸洲の二百萬のエスト人及レット人の如きも、寧ろ十六萬の獨逸人の專横を免るゝの道として、政府の保護を喜べるが故に、必ずしも其の未だ露國化せられざるを憂ふるの必要なきなり。唯だ夫れ獨逸人はバルチック沿岸地方に於て古來主位を占め、政治上、社會上並びに經濟上に其勢力頗る强く、現に文武の要職に上りたるものも少なからずして、極近頃迄は殆んど「特權ある種族」の如き姿を爲せしが故に、自然露西亞人の嫉妬嫌惡を招き、所謂「ニーメット」即ち獨逸人排斥の感情は、公に私に新聞に社交に、能く之を認むるを得べし。(註。ニーメットは啞子即ち言語不通の。外國人の意にして獨逸人の異名なり。)固より其人數より云へば、リヴォニア、エソニア及クールランドの沿岸三州に於ける獨逸人は、其人口の十分の一に達せずして、大多數は南方にてはレット人、北方にてはフィン人なりと雖も、彼等は長く武力に依り商權に依り又宗教に依て之を支配し、其上層有力の階級を成せるが故に、其勢力の根は甚だ深きなり。左れば彼得大帝以來既に二世紀間之を支配したる露國政府が、此地方の獨逸風を掃ひて之を一新せんとするは尤もなるも、俄かに之を改むるは決して容易に非ざるべきなり。

且つ獨逸人の勢力の盛んなるは敢て上記の地方に限れるに非ず。普魯西と墺地利に接せる地方、即ち波蘭、リスエーニア及小露西亞等に入り込む獨逸人は年々其數を增し、現に波蘭に於てはバルチック沿岸に於けるよりも比較的多數を占め、其勢力次第に加はらんとせり。(註。或人の統計に據れば、國境を越へて入り來る獨逸人は年々去る者よりも三萬乃至五萬人多數なりと云ふ、之に加ふるに三四萬の墺地利人中一部は獨逸人なり)されば、アレキサンドル三世が千八百八十四年の勅

令に因て、西部諸洲に在る外國人が、購買若くは相續に因て土地を取得するとを禁じたるは、畢竟獨逸人の手に不動産の歸するとを防ぐの意に出でたるなり。而して夫の露人の最も苦心せる波蘭問題の如きも、要するに獨逸人問題と關聯せるものにして、其の眼中に獨人を置かずして此問題を解かんとするは大誤見なり。思ふに露西亞政府が波蘭を怖るゝの極、其人民に土地購買權を許さずして却て之を獨逸人に許し(千八百八十四年迄)たるは蓋其の一失錯たり。千八百六十三年の一揆の當時、ニコラス、ミリユチンは『予は波蘭人ほどに獨逸人を怖れず』と言ひしも、今日に於ては決して然らざるべきなり。且波蘭人の爲めに之を謀るも、獨逸は決して依るべきの國に非ず。獨逸に於ては波蘭王國を其附庸若くは聯邦に加ふべしと唱ふるもの無きに非ずと雖も、其温言は唯だ人を欺くものにして、其裏面には貪婪飽くなきの併呑心燃るが如きものあり。波蘭人は自ら之を知るが故に、獨逸を怖るゝ心は露西亞を憎むの情と相半ばせり。而して經濟上の點より之を見る時は、波蘭は露西亞と合併したる爲に大に製造貿易の繁榮を來し、其の利する所極めて大なるが故に、到底之と離るゝと能はざるの狀あり。即ち其合併を維持するの得策なる所以なり。

註。露西亞の統計に據れば其支配に歸せる波蘭人の數は六百萬に達せざる程なり。彼等は夫のヴィエンナの會議に依て生じたる波蘭王國に大多數を占め殆んど總人口の七割を爲せり、但古波蘭中の他の地方にては極めて少數なり。以上は純ぜ波蘭人なるも其外リスエーニア人、小露西亞人、白露西亞人其他の中にも多少波蘭の血脈を引けるものありと知るべし。

之を說くが如くに容易ならずと云ふ其次第は、抑も利害を異にし歷史を異にし又人種を異にする人民、紛然として雜居するが故に、人々の滿足するが如き解釋を下すとは容易に望む可らず。バルチック沿岸の諸洲も波蘭も事情は即ち同一なるなり。且つ異國民間の爭は階級間の爭の爲めに益々紛糾錯雜を極むるは、一層其處置を困難ならしむるものと謂ふべし。即ち獨逸人或は波蘭人は上級の地位を占め、リスエーニヤ人、白露西亞人及小露西亞人の如きは下級を爲し、而して優者は自ら其勢力を逞ふして私利を營んとするは蓋亦自然の勢なり。之を以て露國政府は之を制するが爲めに小農保護の政策を取り、芬蘭の瑞典人、バルチック海岸の獨逸人及リスエーニアの波蘭人等に對し、フィン人、エスト人、レット人、サマゴット人、白露人及小露人等の地位を進めんとを圖れり。是れ實に夫の共和的社會主義的なりと人の稱する農民政策を取るに至りたる理由の一なるなり。

然れども露西亞の如き大帝國に於ては、各種の異分子を包有するとは到底己むを得ざるが故に、露國たる者は唯だ公平に之に處し、敢て國風人種を異にするの故を以て其の間に私意を挾まず、寛大なる心を以て之に對すると第一の得策ならん。而して萬事を時節の到來に任せ、自由寛大の政策に依て進まば、自から國家の強盛を致すに至らん。是れ吾人が露國の爲めに祈る所なり。

第三編　露人の性情及氣質

第一章

露西亞に於ける天然と人。氣候の影響。寒氣より生ずる遲鈍。冬と勞働の不規則。運動に對する嗜好の缺乏。食物の不足。飲酒。寒氣と衛生及道德

天然の境遇が國民の氣質に至大の影響を及ぼすは言ふまでもなき事にして、特に文化進むに及べば人能く天然の力を制するとを得るも、其の然らざる間は大に天然の爲めに左右せらるゝものなり。今露西亞は文化未だ大に進まざるに、而かも北天の氣候は強く人を壓し、其影響束縛を脱却する事他の地方に於けるよりも困難なり。即ち露西亞は天然が慈悲深き手を以て人の爲めに備へたるの樂土に非ずして、人は武裝して之を征服せざる可からざるなり。果して然らば露西亞人は

未熟の手を以て至強の敵と戰ふの境遇に在りたるものにして、之か爲めに其氣質性情の上に、大なる影響を蒙りたるは固より怪むに足らざるなり。試みに露西亞の北半に眼を轉じ、大露西亞人の搖籃となり且つ往古莫斯科王國の中心となりたる地方を見るに、其の地位北緯五十度の北に横はりて氣候は聖彼得堡よりも寒く、冬期の平均温度は巴里に比して十三四度低し。斯かる嚴寒の動植物に及ぼす第一の結果は之を痲痺せしめ且つ往々其の生活力を失はしむるにも至ると是れなり。即ち汁液は植物に上らず、血液は動物の血管中にて氷結し、爲めに其の生色活氣を見る能はざらしむ。是を以て動物は概ね睡眠狀中に冬期を過ごし、極寒の季節中には蹶まりて能く動くことを爲さず。人間は固より多少之に抵抗し得るの力ありと雖、而かも四圍の風物皆此の如き中に於て獨遲鈍不活潑の風を帶びざると能はざるなり。モンテスキューは北國を以て活動勇氣自由の生地として之を說けるも是れ寒氣の過度に酷烈ならざる場合に於て始めて可なるのみ。北方の極寒は南方の極熱と等しく遲鈍不活潑の風を養ひ、寒天の火爐と夏日の樹陰は共に人をして惰弱に流れしむるなり。而して重く且つ長き衣服を多く重ねて運動の不自由を來すは寧ろ北國の南國に劣る所といふも可ならんのみ。

然れども北國は猶大に南國に優るものありと云ふ、其次第は敢て他に非ず。酷烈なる寒氣は生活を不自由ならしめ、隨つて彼等を驅て勤勉事に從ふに至らしむるなり。且つ夫れ莫斯科附近の中央露西亞に於ては寒氣の爲めに戶外に在る能はざる如きは極めて稀なり。特に天氣靜穩にして風の吹き荒まざる時には、氷點以下二十度乃至二十五度の温度は之れを忍ぶに難からず。況んや最寒期中の平均温度なる十度乃至十二度に於ては天氣却て麗かにして愉快に戶外の業務を執るを得せしむるなり。畢竟露國に於て農夫が戶內の生活を爲さゞるを得ざるは春と秋との霜降より雪解に至る間にして冬期結氷の季節中は盛んに橇を用ひて戶外の業に從ひ、貨物の運輸取引等を行へり。唯だ夫れ季節の變化急激にして且つ其の相違非常なるため一年中規則正しき勞働を執ると能はず、唯野に出でゝ耕したる農夫、今日は忽ち爐邊に横臥して長く惰眠を貪るの人となる。即ち「農夫よ何故に眠るぞ、や」の歌の來る所以なり。而して斯く勞働を半途に止め、勤惰勞逸極めて整はざるは、決して堅實に且規則正しき風習を養ふ所以に非ずして、夫の所謂ス

ラヴ人の通弊なる矛盾不規則の如きも其の由て來る所あるを見るなり。

且つ露西亞人はスラヴ民族の血を受け居るためにや、時に猛然として神經的に敏活なることありと雖、元來其擧動は北方のチュトン民族の如くに活潑ならず、上下を通じて運動に對する嗜好少なきが如し。即ち其の遊戯舞踏の如きも甚だ遲鈍靜肅にして靜安休息は其の最も喜ぶ所なるが如し。此點は正に英國人と正反對を爲すものと謂ふも可なり。而して斯く心身の不活潑なるは其の食物にも大に關係ありと云ふは、抑も北方の寒國に近づくに從ひ炭素と窒素とに富む食物即ち肉食の必要なるは生理上の規則なるに、北露の地味は極めて不良にして小麥の生育に適せず、且つ飼糧に乏しきために家畜を養ふと甚だ難く、爲めに彼等は北方の寒地に於て南人の爲すが如き生活を營まざるを得ざるとなり、粗末なる菜食を爲し肉食の如きは殆んど之を爲さず。唯だ近年に至りて大に改良に向へるものありと雖、而かも農夫の多數は僅に祭日に一片の肉を味ふを得るに過ぎず。然れども氣候上の必要は全く之を避くると能ざるに因り彼等は酒を以て食物の缺乏を補へり、蓋是れ已むを得ざるに出づるものにして必ずしも人の罪に非ざるなり。

左れば北方に赴くに隨ひヴォドカ(vodka)と稱する火酒を飲用すると甚だ盛んにして、敢て西歐諸國民よりも甚しと云ふには非ざるも、兎に角其の農民間の一大弊風なるは疑を容れざるなり。

扨て斯かる國に斯かる食物にて生活する自然の結果として、躰力を減じ氣力を弱め從て勞役に對する嗜好を薄くし、且死亡の數最も多く平均壽命最も短し。然れども短命者の多數なるにも拘らず、長壽者の數最も多きは奇なりと謂ふべし。而して小兒は最も育ち難くして、唯た壯健なる者のみ生長するを得るなり。

病氣は瘰癧最も普通にして、又流行病能く發生す。蓋寒暑の交、霜降と雪解と相交り、一冷一熱常ならざる中間の季節にては極めて健康に不可なる時にして、流行病最も發生し易く、疱瘡、窒扶斯、ヂプテリヤ等は頻りに暴威を逞ふするなり。

且つ夫れ冬期火を爐頭に絶たずして室内の温度は室外のと四五十度も異なる其間を出入往來するは決して健康を維持する所以に非ず。又終日終夜家を閉ざして外氣の入るを防ぐに努むるは適々空氣の不潔を招く所以にして小蟲の類自から發生するに至るなり。而して戸外に棄つる塵芥は、一時は雪に蔽はれて人目を

避くるも雪解の季節に及べば其の醜を曝露し、衛生に害を與ふ少なからず。又彼等は其の宗教上の習慣に依り、毎土曜に蒸汽浴を行ふと雖、日夜同一の衣服を着け、寢ぬるにも之れを脱せざるの常なるが故に、自から不潔となるを免れざるなり。」人或は曰く北國に於ては道德自から清しと。然れども是れ亦決して然らず。露國に於ける私生兒の數は南方よりも北方の遙に多數なるは一大事實なり。蓋一小矮屋の内に、多數の男女爐を擁して團欒し、冬天長夜、枕を亂して爐頭に臥す、是れ決して家庭道德の清淨を保つの道に非ざるなり。要するに彼等は男女共に西歐の人よりも粗硬野卑にして羞恥の念敏ならず、婦人すら裸躰の醜を露はして平然たるは、能く吾人の目擊する所なり。

第二章

氣候に對する戰と露人の性情。北國は自由の生地に非ず。服從心及耐忍力。着實なる思想及實驗的本性。暗慘たる天地と沈欝なる性情。神秘主義。風景の無趣味と詩歌の缺乏。所謂露人の遊牧的傾向。風景の無變化と創造力の缺乏

天然は直接に人間の身躰、習慣及其の生活等の有形の事に至大の影響を及ぼすと雖、又間接に其の思想感情を左右して、全躰の性情の上に著しき感化を與ふるものなり。今大露西亞に於ては生活は即ち天然との爭鬪にして、慘憺たる天地は常に怖るべき力を以て人を壓し、可憐なる彼等は斷へず耐へ忍びて之を戰はざる可らず。而かも之を克服すること能はず、涙を飲で默從せざるを得ざること往々にして然り。正に是れ服從心及忍耐力の好養成所と謂ふべし。而して天然の束縛を脱すること能はざるや、彼等は隨て人間の束縛をも怪まず專制權の下に默從して意に介せざるに至れり。且つ、彼等は汲々として唯だ生活の經營に餘念なきが故に、專制の苦痛は左程之を感ぜざるなり。

實に天然との爭鬪の結果として最も發達したるは、能く艱難に耐へ、苦痛を忍ぶの消極的勇氣にして、由來冷然たる確固不拔の忍耐は大露西亞人の理想たるなり。彼等の間に古へより行はるゝ一種の拳闘あり、其の勝敗は腕力又は熟練の如何に

因らず、唯だ耐忍力の多少に因るものにして、即ち敵を投げ倒したればとて可なるに非ず、能く痛打を長く耐へたる者、其の勝者たるなり。此一競技、亦以て其の性情を伺ふに足るべし。實に彼等は一種のストイック主義を奉じ、能く苦難に耐へ、能く平然として死を迎ふるは何人も及ばざる所にして夫のクリミヤ戰爭の時に禍根盡き果てゝ累々路傍に斃るゝに至るも、猶自若として不平嘆息の聲を發せざりしが如き、或はペルカン戰爭の時に平然として、寒暑の酷烈に耐へ、疲勞飢渴の苦痛を忍びたるが如き皆此特色を示すものにして此點に於ては天下土耳古兵の外に之に比すべき者あらざるなり。

且つ彼等は一種複雜なる性情を有せり。即ち剛にして柔、執着力深くして且つ彈力に富み、又粗暴にして而かも温厚、冷情にして且つ親切、是れ吾人の須らく看取すべき所のものなり。又家族を愛し貧者及不幸者を憐むの心深きは彼等の一大特色にして、其の粗なる外皮の下に別に温情の濃かなるものあり。蓋是れ其の不幸なる境遇が自から他人の不幸に對するの同情を養ふに因るなり。唯夫れ一度障礙に接し、爭鬪に向はんか、其の豪氣冷膓の本質は勃然として現はれ來るべし。然れども此本質を現はすは其の危急に迫りたる場合のみにして、然らざる限りは露人は敵として最も温和なり。而して戰爭勝利に歸して事平げば、先きに冷刻無慈悲なりし兵士も、忽ち化して温和親切の人となる。嘗て波蘭に一揆の起りたる時の事なり。土人の家に屯營せし露西亞の一下士、無遠慮に其家の一兒に接吻したるに、敵愾の念に燃へ居たる其母は大に怒り、之に箱を投げ付けたり。然るに下士は之を怒らず、又上官に訴へもせず、靜かに之を忍びて其室を去れり。後間もなく其地を立退くや、同僚に請ふて其の臨月に近かりし子の誕生の報を得、之にクリスマスの贈物を送りたりと云ふ。此の種の佳話は他に其例少なからざるなり。

次に思想の點に於て天然との爭鬪の結果として最も養成發揮せられたるは、其着實にして實際的なると是れなり。是れ實に大露西亞人が小露西亞人及西南部のスラヴ人に異る所以の要點にして、沈着に前後の分別を爲し、巧に事を案じ方策を立て、而して人に接し事に當て處理宜しきに適ふは、正に大露西亞人の特色たり。而して此特色は啻に風俗、政治、文學等に於て明なるのみならず、詩歌、宗教の如き者に於ても猶等く之を認むるを得べし。即ち抽象幽玄の妙は其能く解せざる所に

して、彼等の如くに形而上的冥想の傾向に乏しき者は他に其類を見ざるなり。而して其最も好む所は物理學、博物學、社會學等にして教育の有無を問ず一般に實驗主義に傾き、常識は其最も重ずる所たり。されば シェークスピアの如きは一文の價も付せられず、却てゾラは『實驗主義の聖』と稱せられて最も崇拜せらるゝなり。

然れども人間の性質は極めて復雜なるものにして、個人且つ然るが故に國民の多岐多角なるは固よりなり。されば吾人は注意して一方にのみ偏するとを避け、努めて他方面をも觀察せざる可らず。今夫れ露西亞の茫漠たる天地は陰森として自から慘色を帶び、旅客をして一種凄愴の感を起さしむる者あるは何人も先づ第一に經見する所なるが、其の影響は果して欺く可らずして、露西亞人は南北の別なく皆沈鬱なり。而して此特權を最も明かに示す者は、ヘルツェンが『有聲の涙』と稱する大露西亞人の俚歌にして、之をチープルス及シ、リーのに比するときは其相違天淵も啻ならざるなり。而してレルモントフ、プシュキンよりチクラソフ及チウチェフに至るまで各派の詩も、又皆凄愴沈痛の氣を帶びざるはなし。ヘルツェンヨ曰く『悲哀懷疑及諷刺、此三者は露人の詩の三絃なり』と。又曰く『我等の笑は厭ふべき苦笑に過ぎず』と。是れ正に其の特性を說破せるものなり。

斯く天然に養はれ、且つ政治上の事情に皷吹せられたる沈鬱の性は、往々露人をして神秘主義に傾かしむることあり。是れ其の實際的の天性と奇妙に混合せる所の者にして、或宗派の如き、或はツヤコヴスキー、ゴゴル、ドストエフスキー、トルストイ等の作者の如き、皆之を證せり。而して虛無主義並に幾多の宗派間に著しき夫の一種の厭世主義も自から之と關係あるは明かなり。又下級社會に於ては此の自然に成れる沈鬱の性は、自から一般動作の靜肅となり、多人數の集會にも、勝負事の時も、酒宴の折も、大露西亞人は概して沈靜にして、宛も雪皚々たる其天地の、陰々として靜かなると相似たるものあり。

猶其の性情を明かにするか爲めに、更に其の國の形狀を見るに、茫々として天高く、地廣く、見渡す限り平坦にして些の趣味を有せず。且つ南國の如くに麗光和氣の能く詩情を養ひ妙想を鼓吹するものあるに非ず。而して山なく、海なく、湖水は多きも大なる水溜と同じくして懸崖の以て風致を添ふるあるに非ず、時に河岸に峻岩の峙つもの無きに非ざるも、河幅餘りに大なるが故に、釣合を失して美觀を爲す

に至らず。されば萬里滿目、高壯なる風景の人の精神を鼓舞激勵するが如きもの一も存せず、又優美なる山水の愛すべきものもなし。而して其の植物は變化なく且つ生氣なく、到る處同種の草木のみにして、其の發育甚だ不十分なり。是れ遂に詩歌及美術の生ずべき地に非るなり。

人或は曰く露西亞人は游牧的の嗜向を有すと。蓋其の旅行冒險を好むを謂ふなり。而して是れ實際の事實にして特に北部に於ては居を轉じて遠く他に移るを少しも意に介せず。而して其原因は茫漠無限の廣野が彼等を遠距離の旅行に誘ひ、又其平垣なる地勢が彼等の來往を妨げざるに存すべきと固よりなりと雖、更に之を助くる者ありと云ふは、即ち火災の頻々なる事是れなり。露西亞特に北部露西亞に於ては專ら建築に木材を用ふるに因り火災起り易く、而して新に家を設くるは甚だ簡單にして、一丁の斧を以て事足るが故に、農夫等其家を失ふときは直ちに去て他に移るを意とせざるなり。（農夫等は火事に「レッド、ルースタ」の異名を與へ「赤き雄鷄」の意なり）而して此冒險的傾向は更に其精神上に於ける無謀大膽と能く相一致せり。即ち彼等露西亞は哲學に宗教に凡て議論の極處にまで論じ詰め、大膽に突飛に論理の赴く所を盡さゞれば止まず。蓋彼等の思想に制限なるものゝ無きは、其天地の茫々として涯際なきと同じきなり。

又世人が能く露西亞人に加ふるの一非難、即ち個人的特色を缺き創造の才に乏しとの評も、幾分か天然の事情に基けりと謂はざる可らず。或は歴史上及其他の原因も存すべしと雖、要するに是亦其國土の特色を反射するものにして、即ち其無趣味無變化なるは正に彼等の思想をして單調平凡ならしめたるの原因たらずんば非ざるなり。

第三章

露國天然の變化は四季の變遷に在り。冬春及夏の變化と其の國民の性情に及ぼす影響。露人の性質は極端に走ると其氣候の如し。其の矛盾に富むこと。其の移り易きこと。國民的好標本

吾人は前章に於て露國の變化に富まざるとを詳論したり。然れども是れ重もに

土地に關するものにして、其の氣候より之を言へば、季節の變甚だ著しくして、四季各〻異れる風景を呈し、特に冬と夏との相違非常にして、同一の場所に於て北極と赤道との光景を合はせ見るを得るなり。而して此變化反對は夫の單調無變化なる土地の及ばざる所を補ふて、露人の性情に影響を及ぼすこと極めて大なり。

露西亞の氣候中、最も長く且特色に富むは冬にして、積雪は山野を蔽ひ河海を埋め、滿目皚々、他に眼界を遮ぎる者なし。而して日中月下、光輝燦然として一種の壯觀を呈し、闇夜と雖其の反射のために晝を欺く。特に森林の樹木が燦爛たる時ならぬ花を以て盛飾せられ、天地陰森たる其間に幽奥莊嚴なる一種の美を呈するに至ては、月明の夕と否とを問はず、殆ど身の此世の人たるを忘れしむるものあり。されば冬の長夜は都人士が橇を驅て清遊を試むる最良の時にして、田舍の農夫も亦三五相携へて廣場に集まり、或は歌を謠ひ、或は舞踏を行ふ。而して百五十日乃至二百日間雪に埋められたる後、漸く四月頃に至れば天地俄に一新し、雪去り氷解けて地は骨を露はし水は眠りより覺む。斯く俄に氷雪溶解するが故に、春の始は一年中最も不愉快なる時にして、見渡す限り泥濘の海に異らず、宛も枯死したる天地の復活せんと欲して先づ靡爛解体するが如し。然れども長き冬に厭き果てたる彼等は非常に喜びて春を迎へ、春頭の初雨に接しては宛も旱天に雨を得たると同樣なる喜悅を感ずるなり。歌に曰く『來れよ春よ、美はしき春よ、來れよ喜悅を伴ひて、生ひ伸ひたる亞麻と實れる穀類とを携へて』と、是れ實に彼等が三月の頃よりして既に歌ふ所にして、其の待ち詫ぶるの情以て知るべし。而かも此春や甚だ短くして直ちに中夏苦熱の季節となり、俄然崩へ出でたる植物は驚くべく速かに生育し、播かれたる種子は直ちに芽となり、葉となり、花となり、蕚で實は結ぶに六週を出でず。故に往時の露人は春を一季節と爲さず、一年を夏秋冬の三に分ちしなり。扨て夏は色々不便利の事なきに非ざるも、亦霞影雲色の賞すべく、綠陰清曉の喜ぶべきもありて、自ら南國に似たる所ありと雖、北露の夏は一種無類の美を有し、實地に境を踏むに非ざれば如何なる想像も之を描き得ざる者あり。南國の夏の夜の和氣晴空は美なりと雖、北國亦之に讓らずして吾人に一驚を喫せしむ。實に其の淡霞彩雲の美は何人の筆も能く之を寫つす能はざるなり。而して太陽の全く沒し了らざる夜に於ては天色亦一種特別にして、夜に非ず、晝に非ず、天明に非ず、黃昏に

非ず、是れ到底他に於て見るを得ざる所なり。而して夜の長くなるに隨ひて秋返り來る。秋は露國の季節中最も特色薄きも、其の美なるは敢て他に讓らざるなり。總て此等季節の千態萬容の美は、露人强く之を感じ、文士は之を寫し、畫家は之を描き、一片の雲影水色も其の筆を脫せず、精妙靈活を極むるものあり。而して季節の變化多樣なるは、特に露人の性情に影響を及ぼし、其の柔軟にして曲かり易きも彈力に富むも、又新說を容れ易く、甲より乙に移るに敏なるも、皆之より生ぜるなり。思ふに夫の往々不規則不秩序にして、或は平均を失し偏狂に流るゝの弊も亦然るべし。而して寒暑の極端より極端に急變するが如く、其の思想感情も卒然として極端より極端に走り易く、痲痺より過敏に、溫和より激怒に、從順より反逆に、凡て容易に變じ、溫順にして亦た激烈、沈靜にして亦躁狂、快活にして亦拗捩、冷淡にして亦熱心、是れ實に其の特性にして公に、私に、個人も國民も、萬事に於て皆然らざるなし。即ち個人も國民も政府も、事を思ひ、事を感じ、事を營むに、一時熱心溢るゝ許りなりしかと思へば間もなく放棄して顧りみざるが如き、或は同一の人にして懷疑と確信と無情と熱誠とを混有することと有るが如き、自から氣候の影響に因るものにして、露西亞人に前後撞着と朝變暮改の謗あるも畢竟之がためなり。

然れども其の變り易きは即ち他を學び新に就くに敏なる所以にして、ヘルツェンの所謂受納性（レセプチヴイチー）は、其の其の由來自から此に存するなり。而して此の模倣同化の性は敎育ある上流の人士間に最も著しくして、思想に風俗に文學に言語に一々其の跡を見るを得べく、此點に於ては彼等は英人と正反對を爲せり。而して普通の人民は如何あらんと疑ふ人あるも、彼等も各種の藝能に熱し易く、居に隨ふて適合する所以の道に通ずるが故に、明かに又此特性を認むるを得るなり。

此特性は創造力の發達を妨げたるに相違なきも、兎に角に其の露西亞人の一大長所たるは明かにして、大露西亞人が容易に南北に膨脹し得たるも、又過去二百年間に西歐を驚かすまでの進步を爲し得たるも、而して又將來如何なる進步變化を爲すべきや測り難きも、一に之がためなり。

若し夫れ此露西亞氣質の標本を求めんか、彼得大帝は正に其人なり。其の半ば野蠻流なる、其の過度に逸して撞着に富める、其の向ふ見ずにして且つ着實の分別を有する、其の宏量雅懷にして且つ非常に狡猾なる、而して又其の萬能萬藝に通ぜる、

他迄も露西亞國民の好標本なり。實に露西亞人の特性は長所短所共に悉く彼に備はりて而かも其の極點に達し、農夫の頑愚執拗と貴族の輕佻浮泛との露國の二極端は、正に彼れの一身に集りて長短相矯め相補ふが如し。孜々として國風を打破して外物の摸倣に是れ努めたる彼れが、却て純露西亞人たるこそ面白けれ。而して幾多の缺點を有するとするも、彼等の如きは正に此活動世界に於て最も企業成功に適するの人にして、之に似るの國民は將來大に有望なりと謂はざる可らず。蓋高尚優雅なる性格には缺くる所あるも、國運の强大を致すべき資質は之を有すればなり。

第四章

露人の性質と虛無黨。虛無黨の起原及性質。其の三變遷。ヘルツェン。バクニン及チェルニシェフスキー。露國的特性に屬する點。實驗主義と神秘主義の混合。虛無黨の宗派に似たる點。主義傳播の方法。一種の少年病。露西亞の婦人問題

露西亞人は氣候及地理上の影響のために、實驗主義に傾くと同時に一方に於ては沈欝にして神秘主義に流るゝ所ありとは、上來既に說きたる所なるが、是れぞ即ち幾多の矛盾反對を說明するものにして、虛無黨（ニヒリズム）は實に其の一例なり。蓋虛無黨の理論は西歐よりの輸入にして、全く佛獨の哲學批評社會主義等に胎胚するものなり。而して之をして一種の特色を帶ばしむるものは、畢竟露國の政治經濟及社會宗教等の事情、就中人民の性質なり。註。「虛無黨（ニヒリズム）」なる名は千八百六十年頃に現はれたるアイヴァン、ツルゲニーフの小說「ファーザー、エンド、サンズ」中より來りたるものなり。彼等は通常「社會主義共和黨（ソシアリスト、デモクラット）」若くは單に「遊說者（プロパガンディスト）」と自稱せり。又其各派は概れ其秘密機關新聞の題號を以て、名と爲せり、第一卷第二卷第五編。第三章を看よ。

虛無黨の最も世人の注意を引きたるは千八百七十八年より千八百八十三年の間なるも、其の存したるは既に其の以前よりにして、敢て新奇なるに非ず。而して其の一意味も常に同一なるに非すして、大凡三變せり。即ち始め千八百六十年より千八百七十年に至る間は政治上の臭味を帶びざる一種の流派にして、全く大學等に遊べる青年男女が、舊來の政治宗教及社會上の陋說迷信に對する、物質的及急激的

の新思想を謂ふに外ならざりしなり。然るに千八百七十年頃に至り、巴里共產黨及萬國勞働同盟會の二重の刺激に因り、此理論上の抽象的の虛無黨は、一轉して形あり力あり活動ある者となり、從前の如く個人私交の間に之を限るを以て甘んぜず、更に結社と秘密運動とに依て、廣く天下に其主義を傳へんとし、一躍して政治の渦中に投ぜり。而かも猶陰謀暗殺等の暴手段に訴ふる事は無かりしに、千八百七十七八年頃に至り、空論の實効なきに失望して平和の手段を棄て、爆裂彈を其の武器とし、恐怖を其の警語とするに至れり。（註。其次第は第二卷第四編第二章。革命黨の組織なる論ずる所に明なり）抑も虛無主義は組織ある主義學說に非ず。其の哲學は物質主義（マテリアリズム）の粗雜なる者に過ぎして科學的の主張を有するに非ず。政治論としては壓制專橫のために激成せられたる社會的急激主義に外ならず。又黨派にも非ず、何となれば種々の意見を有する異分子を、其旗下に混集せる者なればなり。蓋彼等は將來の實地問題には互に意見を異にするも、差當り現制打破の目的は一なるに因り相提携せるなり。例へば千八百七十四年ラヴロフが『ゴー、アヘッド』新聞を起すや、其の同志者間に如何に革命すべきかに就き議論ありたるに、トカチョフ等は揚言して曰く『未來の組織に關する事は之を舍きて可なり、吾人は先づ破壞にのみ從ふべし』と。是れ爾後虛無黨員の概ね守りて方針とせる所なり。

斯くて其主義理論なるものは西歐の革命家に學びたるに外ならざるも、猶ほ才能、人物若くは勢力に於て、敢て西歐の人に讓らざる一人の國民的理論家を有せり。是れヘルツェンにも非ず、バクニンにも非ず。ヘルツェンは熱情燃ふるが如く、中心懷疑的にして悲意を帶ぶるも、猶小說的に且つ理想的なる所あり、同情と希望信仰との爲めに、身を革命主義に投じたるものなり。而して其情は銳く其心は敏なるに因り、如何なる思想感情にも觸れ易く、往々自家の主張以外に逸することあり。バクニンは之に反し、徹頭徹尾寸毫の餘裕なき懷疑家にして、其の理論の冷刻なるは氷を欺き、其の推斷の組織的なるは幾何學者の如く、而して萬事を妄斷して他人の說は一切之を顧みず。且つ彼は事業活動の人にして文筆の士に非ず、其の勢力は本國よりも瑞西、伊太利等の外國の勞働者に及ぼしたるもの强く、又學窓の青年よりも專門の陰謀家を動かしたると大なり。要するに此の虛無黨界の二大豫言者たるヘルツェンとバクニンは、或は火の如き熱情を以て其主義を唱へ、或は氷の

如き意思を以て其遂行を期したるも、此爵勃たる革命的大思想に組織を與へ、理論を與へ、以て青年讀書社會の明星となりたるは未だしと謂はざる可らざるなり。而して此明星鼓吹者たるの人はヘルツェン及バクニンの如く、上流縉紳の間に育ちたる貴族に非ず。又半生を外國に過ごして倫敦若くは巴里より革命主義を唱へたるの人に非ず。其人や實に田舍の一寒僧の子にして、一度も露國を去りたることなく、常に彼得堡に在りて筆硯に從事したり。即ちチェルニシェフスキー是れなり。彼は哲學者、經濟學者、批評家兼小說家にして、特に露西亞の急激主義を綜合して其學說を立て、第一に其の犧牲となりたり。而して其の筆硯に從事したるは、千八百五十五年に『美術と實在の關係』と題する者を公けにして戰鬪の火を切てより、千八百六十三年彼得堡の獄中にて小說『如何せん』を著したるまで、僅に十年以內の間なるも、而かも其學は博くして事に當るや精悍倦まず、或は嚴正なる論理に因り、或は皮肉なる諷刺を用ひ、孜々として著書に批評に其主義を唱へたるに因り其及ぼしたる感化は實にヘルツェンを凌ぐものあり。特に彼は千八百六十三年より千八百八十三年に至る二十年間西比利亞に逐はれ、其中七年は坑山の苦役に從ひ後には更に窮北雪深くして人跡到らざる地方に移され（千八百八十九年に死せりと云ふ）非常なる迫害を受けたるに因り、其の悲慘なる生涯は一層露西亞人の同情を引て其の崇拜の念を高め、露國のカール、マークスと尊稱せらるゝに至れり。

然れどもチェルニシェフスキーの學說の形式と細目とは自から斬新なる特色を有するも、其の本質に至りては概ね西歐より取れるものにして、之に露國的臭味を帶びしむるものは、其の一種の神秘的夢幻的實驗主義の傾向ある事是れなるべし。且つ其の勞力如何に大なりとするも、虛無黨は元來其の尊崇する學者先輩に盲從するが如きことは決して爲さず、且つ其の理論明晰なる說明のために勤くと言はんよりも、寧ろ其の魔力ある小說的奇談のために鼓舞せらるゝものなることを忘る可らざるなり。

心理學的に之を觀察するときは虛無主義は絕對と現實主義とに對する露人の相反する二傾向の合したる者と謂ふを得べし。又前に論じたる夫の大膽に極端に走るの性癖も此に現はれ居るを認むるなり。而して道德及政治上の點より之を見るときは、虛無主義は第一に一種の厭世主義にして、天然及歷史上の事情に養は

れたるは固より言ふまでもなし。蓋身外の萬事皆非ならざるなきを見て、政府も宗教も社會も家族も一切に之を破碎して別に新天地を造らんと願ふに至りしなり。千八百四十八年の頃、虚無主義なる名の未だ人に知られざりし時に於て、ヘルツェンは既に左の如く言へり、曰く『露人の思想の本質はニコラス帝の治世間に十分に發達したり、而して其の運動の特色は、悲壯なる良心の自由、激烈なる否定、及深酷なる諷刺、是れなり』と。以てニコラス帝の壓制が如何に之を刺激養成するに力ありたるかを知るべきなり。斯くて彼等は猛烈なる獨斷に因りて萬事を悲觀し否定し、之を冷嘲唾棄せんとす。嘗て或る虚無黨員は其の主義とする所を問はれたる折、答へて曰く『天と地と、國家と教會と、王と神と、之を一團と爲して之に唾せよ、是れ即ち我黨の標幟なり』と。實に彼等は好んで一切の事物に向て唾し、夫の一般の露人間に深く存する、尊崇謙讓の心を輕侮するを以て快となし、尊王愛國敬神等の精神は笑ふべき迷信なりと爲して之を踏み碎かんとす。是れぞ即ち露人間に、政治並に宗教上の深き尊崇心と、非常に大膽深酷なる侮慢嘲笑の念との二極端の并び存するを見る所以なり。

斯くて急激なる新思想の次第に青年及一般人民の間に蔓延せんとするを見るや、政府は大に之を憂ひ、實驗主義、物質主義の新學問は甚だ危險なるが故に、寧ろ青年をして古典を修めしむるに如かずとなし、アレキサンドル二世の時、文部大臣トルストイ伯は、希臘及羅典の古學を復興せしめんと試みたり。而して此古典たるや先きにニコラス皇帝の時には革命心を養ふの嫌ありと認められたるものなり。又實際に於てデモセニス及シセロ等の共和的作者は、專制治下の民の良師には非ざるなり。されはニコラス帝は之を嚴禁せざるまでも、可成其の研究を束縛し、却て博物理學の如きに重きを置きたり。然るに今や其の反對に出で、博物理學の類をのみ修むるときは自から實驗主義に流れ、危險なる思想の發生を促すが故に、古學を復興して其弊を矯めんと云ふに至れり。然れとも此政策は非常に民間の反對を招き、折角十五年間のトルストイの骨折も、滔々たる天下の實驗的急激的の新傾向を防ぐに由なく、終に千八百八十年に辭職せざるを得ざるに至れり。蓋學校の課程表を改むるが如き小策に依て、天下の大勢を制せんとするは愚の極と謂はざる可らざるなり。

吾人は上に於て虚無主義の否定的破壞的の物質主義(マテリアリズム)を有するとを說きたり。然れども是れ僅に其の半面にして、別に之とは異れる、而かも等しく露國的なる者あり、即ち神秘主義(ミスチシズム)是れなり。彼等は實に有らゆる信條夢想を嘲笑するにも拘らず、自家一流の理論夢想を有し、實驗的現實主義の裏面に一種の理想主義の欝勃たるものあり。此の實際社會を唾棄破碎せんとする厭世主義の中に、別に放縱不羈なる樂天主義の、夢想的未來の奇幻を畫くもの存せり。實に露の青年男女は大抵理想家と稱せらるゝを以て大恥辱となすも、實際に方ては蔣然事實現在の世界を去て狂妄なる夢想に入ること多し。而して露人の夢想に耽り絶對を求むるは、概ね此現實世界の方面即ち社會及經濟上の理論に於てにして、思ふに餘りに現實主義及功利主義に深入りし過ぎて、再び抽象的の空想に返り、宛も輪を廻るが如きの弊に陷れるなり。蓋此弊や世間に珍しからず、實驗主義の經濟學者若くは政治學者にして、知らず〳〵其實驗主義とは全く無關係なる結論に陷るとあるは吾人の能く知る所なり。然れども露人の如くに甚しきは他に有らざるなり。

且つ夫れ彼等は宗教的精神を以て革命の業に從ひ、其の主義とする所の斷見を信條の如くに神聖視し、盲信と熱誠なる献身とを以て身を萬難に投じ、「人民」を神として禮拜せり。而して一面迷信と尊崇心との敵なるにも拘らず、其主義のために幾れたる人を見るや、宛も古代の殉教者に對するが如く、之に詩的尊崇を奉じて凡人以上の者となし、熱心に追仰遥拜するなり。此點より見るときは無學なる外國人が虚無黨を宗派と思へるは、必ずしも誤れるに非ざるなり。

此の現實主義と神秘主義と、實際的思慮と夢幻的空想と、奇妙に混和せる其事實はチエルニシエフスキーの小說『如何せんに』於て最も明かに之を認むるを得。而して物質的快樂を棄てゝ理想を追求する、ストイック派一流の生活は、虚無黨員中之を實行するの男女少からず。特に婦人中には、其主義の亂暴過激なるにも似ず、其生活の大膽無法と見ゆるにも拘らず、實際の品行は淸淨無垢なる者決して少なからざるなり。又婦人中には處女も多きことなるが、茲に奇なるは所謂假設的結婚を爲せる處女なり。假設的結婚とは既婚婦人の有する自由を得んがために、唯だ名義上の結婚を爲すの謂なり。即ち彼等は其の友人或は時としては全くの他人と、教會に於て結婚の式を行ひ、式了るや直ちに去て其目的の地に向ひ、秘密運動に

從事するなり。夫のアレキサンドル二世暗殺の陰謀に與りたるヴィオフは現に之にして、彼と其の假設的妻とは直ちに彼得堡に向て國を出立し、着後別々に生活したりしなり。

此熱心と此宗教的献身とは彼等が秘密に主義の傳播を努めたる時に於て最も發揮せられたるを見る。彼等が未だ今日の暗殺主義を取るに至らざる當時に於ては、彼等は種々の粉裝を爲して農夫貧民の間に投じ、直接に彼等に接して之に主義を傳ふるを第一の務と爲したり。而して之かためには如何なる苦難に遇ふも辭せず。或は少年貴族の大學生にして、身を職工に粉して製造場に入り込み、親しく民情を探り且つ主義を傳へんとする者あり。或は身分あり教育ある妙齢の婦人にして、故らに料理人となりて勞働問題を研究せんとする者あり。此の如きは實に他國に於て見ることを得ざる所にして、其の宗教的献身は古代耶蘇教の使徒に劣らざるなり。而して斯く親しく人民に接して實際を視且つ主義を弘めんとする此運動は、露人が如何に實際的思慮に富み、且つ理想的空想に燃ふるかを、併せ示すものと謂ふべきなり。

然れども此革命的大運動の主もに少年に限らるゝは、大に注意すべき事實なり。大抵の虚無黨員特に法廷に現はれたる者の大多數は極めて年若き男女にして、捕縛せられたる陰謀者中三十才の人は極少なく、二十五才以上の者も多からず、大抵は丁年に達せざる者なり。而して十年乃至十五年を過ぐる中には、當年の夢想家狂熱家は忽ち一變し、空論よりも實利害を重んずるの實際家と化し了るの常なり。蓋少年と大人との間に思想の變化あるは世の常なりと雖、露人は特に其の甚しきを見る。思ふに彼等露人は本來實際的精神に富めるに因り、一時は夢想的熱情に燃ふるも、忽ち目的と方法と一致せずして其の實際に行はれ難きを悟り、豹變して實際的の人となるなり。是亦極端より極端に急變する其の國民的性情の一例とも稱すべし。

要するに露西亞の虚無主義は一の少年病なり。年若くして萬事に經驗なきの結果なるなり。而して是れ啻に個人に於て然るのみならず、國民全躰より見るも亦然り。彼等の文明は猶幼稚にして未だ多くの經驗を積まず、而かも一躍先輩を凌がんと欲するの念甚だ盛んなるが故に、事往々にして極端に奔るの弊あり。虚無

黨の發生の如きも蓋亦已むを得ざるなり。

露人の急激的精神は自から婦人問題にも現はれ來り、婦人の自由を得んと欲する の運動甚だ盛んなるものあり。而して迷信陋習を打破して大膽なる改革を爲さんとする同一の精神は茲にも著しく現はれ、前世紀の始めには露國婦人は今日の土耳古婦人と同じかりしに、現今に於ては男子と同じく、否、男子にも優りて自由を得んと運動するに至れり。而して無學なる農民は暫く別とするも、教育ある社會の婦人は其の智識才能に於て敢て男子に讓らず、萬事相並びて頡頏するの趣あり。中學大學等に入りて修學する女子の多きは以て其の一斑を知るを得べし。然れども是れ單に男子と同等の地位を得んとを願ふ心の外に、經濟上の原因も又與れるとは忘る可らず。即ち一般に生活の困難なると、結婚の容易ならざると及婦人は法律上父母の遺產を多く相續すると能はざると等は其の自立自營を謀らしむるの一大刺激たらずんば非るなり。而して神經銳敏なる婦人の此希望運動は、自から世の革命的精神と相和し、女學生にして身を革命黨に投ずる者少なからざるに至れり。之を以て政府は地方議會にて女醫を任用するに度々反對し、或は婦人

のために設けたる醫學校を閉ぢたる事もあり。是れ女醫學生は特に陰謀の手段となり、又革命の布教者となるの恐れあるに因るなり。然れども婦人の新運動は駸々として日に進み、其の高等教育の如きは既に他の先輩國を凌がんとするものあり。且つ夫れ露西亞婦人は現に十八才以上は既婚未婚の別なく自己の財產を支配するを得、又地方の或種類の選擧に於ては之に投票するの權あり。左れば其の久しからずして面目を新にするに至るべきは我輩の信じて疑はざる所なり。

第四編　歷史及文明の要素

第一章

露國は歷史を有するや。之に關する諸說。國粹派及外風派。國粹派の起原及其傾向。國粹派と虛無黨の暗合默契。三思潮

吾人は上來露國の天然、人種及露人の性情等を研究したり。今や吾人は其歷史が如何なる文明の要素を露國に與へ、如何に氣候人種等の影響を助長し、或は矯正し、又如何なる基礎を其の文化及制度に與へたるかを見んと欲するなり。

抑も露國は如何なる歷史を有するやと云ふに、露國は本來歷史なく、過去なく、隨て亦未來もなしと唱へて、絕望の聲を漏らす露人もなきに非ず。或は亦其國の新にして傳來の陋說迷信なきを誇り、是れ西歐老國の試み得ざる新經營を試みて、諸種の文明を出だすべき新開懇地なりと稱する者あり。此後說は多數露人の奉ずる所にして、特に急激派の唱ふる所なり。

然れども去る千八百六十九年に千年祭を施行したりと云ふ國に於て、斯かる意見を字義通りに解す可らざるは言ふまでもなき事なり。若し其の千年の歷史にして一個基礎となるべき大遺物を止めず、僅に碎片斷礎の散點するに過ぎずとせば之を說明する者亦過去の歷史ならざる可らず。近來露人間に歷史研究の非常に盛んなるは大に喜ぶべきなり。蓋露國は長き歷史を有するも、其歷史たるや一二度斷ち切られて自から空處を存し、且つ國民自作の歷史に非ずして他より受けたるものにして、自動的ならずして他動的なるものなり。其の外よりなると上よりなると、異國よりなると自國の支配者よりなるとは、是れ問ふを要せざる所にして、兎に角に其歷史は外部的表面的にして、宛も人民の頭上を空過したるの狀あり。即ち國民の發達史と云はんよりも寧ろ王公の年代記と云ふを以て當れりとするなり。

露西亞は元來歐羅巴に屬するか、將た亞細亞に屬するかとは、先きに其土地及人種に關して起りたる問題なるが、其歷史に於ても同一問題の盛んに爭はるゝを見る。而して是れ敢て歷史上の空問題に非ずして、實地政見の分派も自から之より生じ

其の關係する所極めて大なり。即ち彼得大帝以來保守的露人と其の反對派と、莫斯科と聖彼得堡と、國粋派（スラヴォフィルス）と外風派（オクシデンタルス）と、相爭ふて止まざる其の論點の正、味は正に此に存するなり。外風派は思へらく露國は其歴史上敢て甚だしく歐羅巴と區別すべき點を有せず、唯だ西人に後れりと云ふのみにして特種の國風國粋を有するに非ず、故に唯だ當に彼に採り彼に學ぶべきなりと。之に反して國粋派は曰く、露西亞は實質に於て全く歐羅巴と異れる特種の制度を有し、其起原、發達及敎化の要素同じからざるが故に、全く別種の運命を有するものにして、且つ其の新文明は彼を凌ぐことあるを得べしと。

此國粋主義は十九世紀の露國に於て最も奇なる一現象にして、其の信者は未だ多からざるも、勢力は案外に大なるものあり。畢竟此主義は歐風の滔々として入り來るに慨し、其の反動として起りたるものなりと雖、此反動も亦外國に負ふ所多しと云ふ其次第は、抑も千八百三十年より千八百四十年の間は歐洲到る處に學理上の討論研究盛んに行はれ、特に獨逸に於ては哲學に、史論に、政論に、其の盛を極めしが、此の獨逸の哲學即ちヘーゲルの論理及史論は正に莫斯科の國粋論者の師となり模範となりたるものなり。即ち彼等はヘーゲルが人類の歴史を論じチユートン民族を論じたる其筆法を其儘露國及スラヴ人に應用したるなり。されど兎に角に此主義は十八世紀の間長く外風を崇拜模倣したる其反動としてニコラス帝の時に現はれたる者にして、或は國史國風を重んじ古制舊物を愛するの念を國民の胸裡に醒起し、或は農民に對する上流人士の注意を促し、或は聖彼得堡の政府が漫に西歐を模倣するの弊を制するの力となりたるは大に取るべき所なり。實に是れ露國が國民的自覺に返りたるものにして、一時は外風に對する其反動たりしなり。然れども其の餘りに保守に流れて外來の者は一切不可となし、自由も進歩も併せて排斥するに至ては寧ろ悲まざるを得ず。而して斯く、排外的なるよりして自から革命主義の虚無黨と手を握るに至りたるは奇と謂ふべし。

夫れ虚無黨の起原は西歐の老文明に對する失望反動と大關係あるなり。先きに十八世紀に於て彼得大帝及キヤサリン二世等の頻りに西歐文明の輸入に努めて以來十九世紀に入りニコラス帝の初年の頃に至るも、猶西歐崇拜の風盛んにして夫の「八十九年の主義」即ち千七百八十九年の佛國革命の主義を神聖なるものとな

し、只管に之に依て世を濟ひ民を救ふを得べしと信じたり。然るに次第に之れを熟察細視するに、事實は必ずしも豫期の如くならず、本家本元の西歐に於てすらも其文明を非難する者あるを見、昨日の熱情は忽ちにして去り、自由も、科學も、富も、凡て人を欺くの幻に過ぎざるを悟れり。是に於て熱心なる昨日の信者は俄かに變じて猛烈なる敵となり、其の崇拜したる制度法式等を一切に排斥し、其の自から建立したる殿堂を打ち倒し、夫の自由平等博愛の美名の下に人を蠱惑して、却て過失騒動困難を保持する醜偶像を粉碎せんと欲するに至れり。是れぞ即ち有名なる虚無黨の起點なるなり。斯く觀察するときは虚無黨は西より傳はりたるに非ずして、却て露西亞の西歐に對する反抗と稱するを得べく、其の狀宛も師に欺かれて憤れる少年の反動に類するものあり。されば國粹主義と虚無主義とは共に模倣文明の徒勞なるに失望したるより起りたるものにして保守家と急激家と互に手を握るに至りたるも偶然に非ずと謂ふべし。

蓋按ずるに十九世紀に於て最も露國を煩はす者は、相反せる二大傾向の一勝一敗常に爭ふて止まざるに在り。即ちアレキサンドル一世の時には西歐崇拜勢力を占め、ニコラスの時には所謂國民的精神に人心傾注し、又アレキサンドル二世の時には其の消長定まるとなく、而してアレキサンドル三世の時に至ては再び國民的傾向の勢力あるを見たり。此の外風派と國粹派との不斷の爭は、實に各種の紛爭、變改、矛盾等の源なるなり。而して虚無黨は此二派の間に介在して双方の消極的主張を取り、一方に於て露西亞を否認すると同時に亦西歐を否認し、双方諸共に破却せんと欲するなり。此の三種の思潮は互に相擠し相混じ、順次露國を三極端に傾かしめて常に動搖定まる所なからしむ。而かも一度露國の歴史を顧みれば此の相和せざるか如き三思想の、共に同一過去の産物なるを發見するに難からず。

請ふ更に後章に於て之を説かん。

第一一章

往古の露西亞と歐羅巴。　耶蘇教及ビザンスの文化。　モンゴル人侵入以前の國情。　諸公國及露國中心點の動搖

歐洲の文明は耶蘇教、羅典文明及チユートン人の三要素より成れるが、扨て露西亞が此の三者に對する關係如何にと云ふに、其の希臘及羅馬の感化を受くるに至りたるは中世以後にして、夫の腐敗衰微に傾けるビザンチン帝國は、其の羅典文明を得るに於ての唯一の模範たりしなり。而して地方の冒險家にして此地に來往したる者は敢て少からず、自からチユートン人の痕跡を存し、夫の露西亞最古の法典たる『露人の權利』に於て、猶其の跡を認むるを得と雖、而かも速かにスラヴ民族の壓倒する所となりたるが故に、其の感化は固より深からざるなり。次に又耶蘇教は十世紀の頃よりして既に露西亞に入りたり。即ち露西亞のクロチルダとも稱すべきオルガがコンスタンチノープルにて洗禮を受けたるを始めとして、其の孫にしてクロヴィスとシヤーレマンとを合はせたる如きヴラヂミルの保護奬勵以來、耶蘇教は容易に露國に弘まり、自から文明の先驅を爲したり。然れども其の來るや羅馬よりに非ずしてビザンスよりなりしに因り、露と歐とを結ぶべき鎖は却て其の離隔を生ずるの媒介となれり。斯くて露西亞は耶蘇教を通じてコンスタンチノープルの老帝國と關係を結び、盛んに其の感化を蒙むり、一時ビザンスの殖民地に似たるの觀を呈するに至れり。即ち多數の希臘人はキーフに入り込み、キーフの君は希臘の公主と婚を結び、多くの學校は希臘人に因て設けられ、爾來二世紀間は其間の交際頗る親密にしてビザンスは露人の風俗、性質、嗜好等に深く感化を與へたり。而してビザンスの外に佛蘭西、波蘭、諸威、匈牙利及日耳曼等も亦其の交際國たりしなり。此の如く十一二世紀の露國は、十八世紀以前には見ることなき程に歐羅巴に近づき、文化亦大に進み、之を當時の北方の日耳曼に比するときは遙かに優れる有樣なりしなり。然るに十三世紀の初年、西歐の文明は漸くに曙光を催ふさんとする其時に至り、突然モンゴル人の侵入の爲めに蹉跌を來し、雷に三百年の後戻りを爲したるのみならず、且つ一旦西歐に向ひたる其方向を全く他に轉ぜしむるに至れるり。實に露西亞と西歐とを引き離して其關係を斷ちたる者は夫のジンギスカンなるなり。

抑もモンゴル人侵入以前の露國の有樣は如何なりしやと云ふに、國祖ルリックの子孫は皆其國土の幾部分を領有するを得るの仕組にして、族中の最長者キーフに都して、「大公」(Grand-kniaz)と稱し、名義上諸公の覇王たるなり。而して此諸子同權の

制は一二代の中に全國を無數の小領地に裂くに至れり。然れども此制度は西歐の封建制度とは大に異るのみならず、却て其の發達を妨げたりと云ふ其次第は敢て他に非ず、斯く領地は分割停止する所なきも、主權は分割せらるゝにあらずして、諸公の分有する領地も之を死後に傳ふるを得るに非ず。是れ其の農民が土地を村團の共有と爲して時々之を村民間に配分耕作するの制と正に相似たるものなり。（註。後編農民の村團に關する諸章を看よ）且つ諸公が甲領地より乙領地に轉ずることあるは益々此農制との類似を深くするものと謂ふべし。實に諸公は如何なる領地をも互に相續するを得、且つ「大公」となり得るの權利あり。要するに同族中の最長者を頭に戴きて一種の家長的聯邦を成せしものなり。而して斯かる制度の自然の結果として內亂起り易く、且つ甲乙地を轉ずること頻々なるに因り、互に勢力を微弱ならしめたり。是れ其の却て封建制度の發生を妨げたる所以なり。

然れども此競爭不和の間にも、否幾分か其の刺激の爲めに、彼等は徐々に東北に向て進み、今日大露西亞と稱する大地方に殖民事業を營みたり。是れ此時代の一大運動にして最も注意すべき者なり。而して稍百年を過ぐる中には此等中央地方の殖民地は西部の市府と雄を爭ひ、全帝國の中心たらんとするに至れり。即ち十二世紀の半に至り、今日の莫斯科に近きヴラヂミルの公（Kniaz）は自から僭して「大公」と稱せり。此名や從來キーフに都せる公にのみ限られたるものなり。而してキーフは久しからずして陷れられ、露國の中心は茲に北方に移りて大に西歐と遠ざかるに至れり。此の新開地方に於ても諸公間の關係は甚だしく異ることなかりしも、然し自己の力を以て殖民又は征服したる土地は之を人手に渡さず、各自定居を構へて之を子孫に傳へ、自から主權の分割を來せり。

第三章

モンゴル人の支配。其の道德、宗教及政治上の結果。モスコヴィア帝國勃興の原因及其の顚末。露國史の無趣味

十三世紀の始にモンゴル人が露西亞に侵入したるは、天下の一大事件には相違なきも、此事たるや元來歐亞間の大爭鬪の一局にして、十字軍は即ち其の主戰たる者

な。露西亞は耶蘇教國の左翼となり、西班牙は其の右翼となり、佛、英、伊、獨等は其の中堅となり以て亞細亞及亞非利加よりの來襲に當りたるなり。而して露西亞は最も侵され易き地位に在るに因り、其の終に大敗を蒙むるべきは、前以て明かなりしなり。斯くて千二百二十四年露西亞の諸公が力を合はせてカルカ河畔にヂンギスカンの軍と戰ひたるを始めとし、幾多交戰の後、ヴラヂミル及キーフの二都も其の陷る所となり、露西亞を擧げて將に其の蹂躙に歸せんとしたり。然れども彼等韃靼人は北方の森林地方に入ることを好まず、且つ其の望む所は寧ろ貢調に在るに因り、土地は一切封地として之を舊諸公に與へたり。而して「バスカック」と稱する韃靼官吏は其封地に止まりて人口調査及收稅の職を行ひ、諸公叙任を受くるには其地より甚だ遠ざかれる「大酋長」(Great khan) の本營(亞細亞の內地なることもあり)に赴かざるを得ざりしなり。

扨て斯く韃靼人に征服せらるゝや、漸くに萠芽を催ふしたる文化も一頓挫を來し、僅に夫のノヴゴロッド及プスコフの西北地方の外は凡て自由に且つ獸風なる生活を失ふに至れり。而して其の人心に及ぼしたる結果は最も著るしく、束縛は卑屈を生み、壓服は賤劣を來し、力は今は無用なれば唯だ纖巧詭計を是れ重んじ、滔々として巧詐の風を養成せり。此點に於てはムール人の侵入を受けたる西班牙は大に事情を同じくするも其結果は正に反對に出でたり。蓋西班牙は山多くして蠻人に抵抗するに容易なるに因り、彼等は飽迄も武器を舍てずして之と鬪ひ、終に非常なる敵愾の精神と外國人を輕侮するの念とを養ひたり。然るに平原國たる露西亞に於ては事情自から異なり、據て以て籠城固守するの便なきが故に、唯だ武器を投じて忍耐默從するの外なかりしなり。要するに大露西亞人は天然の影響の結果として既に服從忍耐等の傾向を有しゝを、更に此の韃靼人の壓制の爲めに益々之を助長したるなり。

次に宗教心大に發達して國教を重んずるに至りたるも其の主なる結果なり。蓋不幸に陷りて信仰を求むるは個人も國民も異ならざるに因り、彼等露西亞人は外敵の侵入を受くるや痛く宗教心に打たれ、教會は到る處に盛ふるに至れり。而して韃靼人の酋長も人心を和げん爲めに寧ろ宗教の保護者となり、教會の財產には免稅の特典を附與したり。而して上に立てる敵人は皆回々教を奉ずるの異教徒

なるに因り、露人の自己の宗教を愛するとは一層深きを加へ、宗教と國土とは相合して、一種の感想を彼等に與へたり。其の愛國心の常に宗教心と離れざるものあるは蓋之か爲めなり。

政治上に於ては韃靼人の支配は二結果を生じたり。即ち統一を早め且つ專制政治を強めたる事是れなり。抑も彼等の侵入以前に於ては諸公四分五裂して殆んど拾收し難き有樣なりしに、偶彼等の鐵腕に依て之を防ぎ其の統一を保つを得たり。而して韃靼酋長(Khan)の專制主義は萬事に波及し、其の代官となりたる莫斯科公の施政の如きも凡て之に則り、自由權利特權等は全く之を見ると能はざるに至れり。

此の如く韃靼人の露西亞人に及ぼしたる影響は大に注意すべきものありと雖、其の程度等に至ては諸說紛々たり。特に往時に於ては萬事を韃靼人の影響に歸するの風なりしも、近來は國民は內より自から生長するものなりとの理論と、且つは一種の愛國心との爲めに、露人は其の文明の自發的なる所以を論じ、韃靼人侵入の影響を抹殺せんと努めり。實に韃靼人は三世紀間露西亞を支配したりと雖敢て露西亞人と雜居したるに非ず、代官及收稅吏を派遣して遠く之を支配したるが故に、其の感化は案外に小なりしならん。而して其の前師たりしビザンスの感化にて却て深かりしが如く、風俗、技術、教化、制度等萬般の上に、其の痕跡の存するもの甚だ著るし。然し其の輕重論は暫く別とし、此の古典の老國と半ば遊牧的の兵群と、此の耶蘇教國と回々教徒と、各々大に異なる所あるにも拘らず、共に專制主義の摸範と奴隷の手本とを露人に與へたるは一なるなり。

最も驚くべきは莫斯科の勢力が韃靼君主の下に在りて徐々に而かも隆々として盛なるに至りたる事なり。抑も莫斯科公アイヴァン、カリタは千三百三十年頃に韃靼君主より「大公」の號を與へられ、又韃靼人の爲めに自ら總收稅官となり、速かに富を增すと共に勢力を加へしが、既に其孫デミトリ、ドンスコイの時に及びては、韃靼酋長と爭議を決するに之を干戈に訴ふるを辭せざるに至れり。實に其の千三百八十年にドン河畔のクリコヴオの野に於て韃靼人を破りたるは、露西亞人が彼等の「背骨を折りたる」始めての一大打擊として、今も猶誇稱する所なり。斯くて次第に統一の大業に向はんとする其一方に於て、韃靼人は內訌を生じて三に分れ、而

して十五世紀の末に至ては愈々夫の英明の大王なるアイヴァン三世(千四百三十八年生千五百〇五年死)出でゝカザンの韃靼人を屬藩と爲し、尋で其の孫アイヴァン四世はカザン及アストラカンを全く征服し、且つ內に於ては二王相續で諸小公の地を剝ぎ力を殺ぎ、又公領地の間に介在獨立して別に勢力を有したる自由市ノヴゴロッドを從へ、茲に全國統一の業成りて、北白海より南裏海に至る間の地は全く一大帝王の支配に歸するに至れり。此アイヴァン四世は資性殘忍冷酷にして「怖るべき」(テリブル)との綽名を得たるほどなりと雖、而かも國事に熱心にして畫策倦まず、能く陰謀の間を潛り困難の中を進み、終に帝政の隆盛を致したるは偉なりと謂ふべく、實に彼得大帝の前身と稱するも可なり。

韃靼人の羈絆を脫し去るや、露西亞人は直ちに四方に向て膨脹し、特に西比利亞征服を始めたり。即ち千五百八十二年アイヴァン四世の時エルマックなる大將コサック兵を率ひてウラルを越へ、幾多の困難を冒して深く內地に進み、遂にシビル(或はイスケルとも稱す)を陷れて茲に西比利亞占領の序幕を開けり。此遠征の最初の主意は唯だ塞外の遊牧民族を防ぐに在りしも、エルマックは攻擊の態度を取て遂に此偉功を奏しゝなり。此の如く國力大に外に伸びて今日の大を致すべき新運を開きたるも、然しアイヴァン四世の皆殺し終るや、僧王蜂起して露西亞は一時支離滅裂に歸し、帝國の大業は王家と共に將に絕へんとするの危機に陷り、果ては波蘭人莫斯科に入り來りて、波蘭の王子ラヂスラスを皇帝と布告するに至れり。此際身を挺して此內憂外患を救ひたるは公子に非ず貴族に非ず、即ちミニンと稱する一介の屠牛者にして、彼はポジャルスキー公を戴きて義兵を擧げ、波蘭を逐ひ、更に「民會」を開きて帝位をロマノフ家に捧げたり。而して事平ぐや人民は忽ち政治より退きて各々其の業に復し、敢て自由を求むるが如き事もせざりしなり。されば帝政の威勢は少しも減ずるとなく、專制政治は依然として行はれり。

蓋露西亞人は元來家長的の氣風に富み、君臣の關係を父子の如くに見做し、皇帝に事ふること猶父に於けるが如くずべしとの念存するに因り、機會に乘じて民權を主張するが如きは、固より思ひ及ばざる所なり。斯くてアイヴァン諸帝以來強大なる專制政治は盛んに行はれ、人民の生殺與奪を恣にして之を奴隸の如くに取扱ひ、人民亦唯々服從して逆らはんともせず。是れ多年韃靼人の壓制に慣れ且つ

ザンスの感化を受けたるに因ることと深かるべしと雖、抑も亦天然及地理上の原因の更らに大なるものあるを忘る可らざるなり。此の茫々として限りなき國に於て、人口は極めて少なくして宛も大沙漠中に小流の沒し去らるゝが如き趣あり。之を收攬統一して確固不動の者となすには、到底東縛主義に依賴するの外なきなり。

露國の歴史は甚だ無趣味にして、國のみは古きも一として事の觀るべきなし。封建制度なく、勳爵士なく、隨て權利名譽の念の養はれたることなく、又西歐の「ゼントル、メン」に對すべき階級は之を有せず。コサック兵は其の誇る所なりと雖、是れ本來亡命逃竄の徒の群にして、唯だ亂暴なる冒險家が場所の利に依て不羈自由なる共和躰を爲せるに過ぎず。固より夫の勳爵士に當るに足らざるなり。又市府と稱すべき者極めて少なく、莫斯科すら尤然たる村落なるに過ぎず。夫れ市府なければ富なく、技藝なく、科學なく又政治的生活なし。是れ結局文明なきなり。語原既に此眞理を證明せり、シビリゼーション(文明)とシビタテス(市)とは素と其の語原同じきなり。

斯くて十七世紀頃までの露西亞の狀態は甚だ幼稚にして、文物制度の觀るに足るもの一もなく、歐洲の「宗教改革」「學問復興」等の大事件も露國には些の影響を及ぼさゞりしなり。蓋韃靼人と波蘭人とに前後侵入せられ、國土亦天然の惠助乏しきに因り、唯だ自存の道に汲々たるの外、手を施すの暇なかりしならん。其の智識發達の妨害せられたるも亦已むを得ずと謂ふべし。

第四章

露國再び西歐の文明に復歸す。彼得大帝以前の諸帝の事業。彼得大帝の改革。其結果及缺點。道德上及社會上の二元主義。アレキサンドル二世の改革が彼得大帝のと異なる所

露西亞と歐羅巴とは此の如く長く分離して大に相異なるに至りしが、一旦一偉人の現はるゝあり、俄かに之を結合して歐風の輸入を是れ努め、他國が多年を費したる長行程を一躍して過ぎんと試みたり。是れ果して空想的の計畫にして其の改

良なるものも人爲的のものに過ぎざるやと云ふに決して然らず。抑も有形に露西亞を西歐に接近せしめんとしたる彼得大帝の事業は、業に既に二百年來諸帝に因て企圖經營せられたる所のものにして、其のアゾフ海及黑海に於ける經營並にバルチック沿岸の征服の如きは、全く其の父アレキシス及其の姉ソフィアの遺業を襲ぎたるに過ぎざるなり。且つ夫れアイヴァン三世以來大抵の皇帝は外人を招きて西歐の技術發明を輸入せんと試みたり。而して外風の感化は先づ最近なる波蘭、小露西亞及リスエーニア等より來り、終には日耳曼、荷蘭、英吉利、伊太利及終りには佛蘭西より來れり。此の外風輸入及其他の點に於て彼得一世の前身と稱して可なるアイヴァン三世は、既に十五世紀に於て歐洲の諸國と交際を開き、醫者技術家及機械師を迎へ、當に寺院殿堂を建つるの技術家のみならず、且つ亦鑄工、金匠、壙夫、石工、烟火製造師等をも招きたり。即ち露西亞が歐羅巴に學びたるは最初より物質的機械的生産的の方面にして、後彼得大帝の如き人物の出でたるも、其の由來自から偶然に非ざるを見るべし。アイヴァン三世の後ヴァシリ四世は唯だ外人を招くを以て甘んぜず、且つリスエーニア人なる其妻を喜ばすがために、自ら外風を學びて鬚を剃り落せり。又アイヴァン四世の時には英國と交際を開き、活版を輸入し、人を歐羅巴に派して良職工を求めり。後僧王蜂起して天下騷亂を極め、尋で波蘭人逐はれてロマノフ家帝位を受くるに及び、國風保存の反動は起りたりと雖も、而かも「スラヴ希臘羅典學院」の莫斯科に設けられたるより察する時は、其の氣運の如何を知るに難からざるなり。現にミカエル、ロマノフは商人、職工及兵士をすら外國より求め、歐羅巴と通商條約を結びたり。特に亦アレキシスに至ては多數の外人を招聘して益々外物歐風の輸入を努め、優に彼得の父として其事業の開拓を行へり。彼得は斯く招聘せられたる外人の間に成長し、之に師事して學びたるが故に、其つ帝位に登るや今迄下位に在りたる外客は、忽ち國師の位置に上ぼりて威勢を振ひ、其姪アーンの時に及びては一時專横を極むるに至れり。之を要するに露國が歐羅巴に接近して新文明に入るに至りたるは、敢て偶然特發の新現象に非ざるや明かにして、二百年來諸帝王は實に彼得のために路を開き備を爲し、而して彼得は唯だ其の大勢に從て國運の歩を進めたるなり。敢て俄かに國勢を一變して亞細亞より歐羅巴に轉じたるには非ざるなり。即ち唯だ捷路を取て

其の進歩を急速ならしめたるに外ならざるなり。

抑も彼得は十才にして帝位に登り、十七才にして全權を握り、爾後孜々として舊風を打破し新文明を輸入するに當り、其の力を用ひたるは專ら物質的文明の進歩にして、西歐文明の外形を模倣するとを是れ努め、內容心髓に注意するとなかりしは遺憾なるが如しと雖も、然れども有形より無形に進むは自然の順序にして敢て怪むに足らず。否、露西亞人の性情は元來有形實用の技藝を重んずるの風あるなり。されば彼得の西歐に遊びて最も意を注ぎたるは機械、工藝技術の類にして、之を學ぶがためには自から職工となり徒弟となり、孜々倦むことを知らず。而して其の國に歸るや、身親ら萬事の師となり、兵士を訓練するに當ては自から鼓手となり、或は引水者となるを辭せず。實に彼の如くに多藝多能なるは他に其類を見ざる所にして、造船、陶器、彫刻等の術に至るまで之を知らざるなし。畢竟大露西亞人の物に應じて移るに敏にして且つ實際の事に重きを置くの特性が、著るしく此大改革者に於て表現したるなり。

彼得の改革中最も注意すべきは都を聖彼得堡に遷したる事にして、此遷都は實に多くの改革の標幟と爲り又手段と爲れり。即ち此一擧能く露西亞の門戸を開きて歐羅巴と相接せしめ、且つ有形無形の諸改革を促す基とは爲れり。而して彼は天然の障礙を少しも顧みざるが如く、人に對しても果斷專制にして、其の目的を達するがためには如何なる手段をも辭せず。コストマロフの言ひしが如く、其國を歐風化するがために亞細亞流の手段を用ひたり。即ち啻に好んで人を鞭撻虐使するのみならず、歷史上の故障も道德上或は物質上の故障も、一切之を顧みざるなり。然れども一人の力を以て天然及歷史を全然蹂躪せんことは到底出來難き事にして、彼得が能く幾多の障礙を排して改革を斷行し得たるは、畢竟其の障礙なるものゝ實は微弱にして敢て强く反對せざりしがためにして、モンテスキューの言へるが如く既に歐羅巴風なりし國民に歐羅巴の風俗習慣を與へんとしたるに因るなり。

彼得は相續者なくして死したるも其事業は繼續せられたり。其の死後一世紀間帝位に上りたるものは、多少外國人の血統を有するか、或は全く外國人なる四婦人と、二少年と、二狂人とにして、而かも即位毎に陰謀の騷動、大臣交迭の混雜等頻りに

起り、昨日の有力者は忽ち西比利亞に逐はれ、或は斷頭臺の露となるの有樣にして、或は亦都を莫斯科に復しては再び之を聖彼得堡に遷し、或は外客を逐ひては復之を招き、其の施設計畫する所常に動搖して定まることなく、十八世紀の全體を通じて唯だ變化反動を繰り返へすに過ぎざりしなり。而かも此の如き狀態なるにも拘らず、彼等の遺業は決して中絶するとなく、敵も味方も知らず〳〵其改革の完成を助けたるは奇と謂ふべし。

然れども彼得の非常なる成功は驚くの外なしと雖、其の露國をして一躍一二世間の行路を進ましめたる突飛の改革は、却て道德上、智識上、社會上及政治上の四重の弊害を生じたるは致方なき次第にして、露西亞今日の國難を招きたるも亦自から由來なきに非ざるなり。即ち改革に急なる彼は舊來の習慣道德を破壞して人心の適從する所を失はしめ、又規律を嚴にして外形の訓練を重じたるために却て僞善の風を養ひ、且つ入り來れる無數の外客は概ね名利を是れ求むる山師流の徒なるに因り、敢て國風民俗を蔑視蹂躙して憚らず。實に十八世紀の露西亞は正に道德破壞の時代にして、一世滔々向ふ所を知らず、社會の紀綱地を拂ふて空しからんとしたり。佛蘭西の或哲學者が之を評して、熟せざる中に腐敗したる菓物なりと曰ひしは、眞相穿ち得て妙なりと謂ふべし。而して斯く古來の習慣制度等を破壞し、一世を擧げて無信仰の淵に沈ましめたるは、正に夫の虛無黨の一遠因を爲せるものにして、此點より見る時は彼得は近世虛無黨の開祖なりと謂ふも敢て不可なきなり。

次は又智識上に於ては、外物の輸入に汲々として唯だ模倣を是れ事としたるに因り、大に智力の發達を妨げ、夫の創造力の缺乏をして益々甚しからしむるに至れり。國民文學の發生を一世紀も遲延せしめたるは畢竟之がためなり。而して社會上の弊害亦之に伴ふて起り、外風模倣の新階級は主もに獨逸語(後は佛語)を用ひて一種の別人種となり、而して他の普通人民は全く之と異なりて依然たる舊態を守り、兩者各々思想、風俗、言語等を異にして、互に相解せざる別人種となれり。正に是れ民衆の中に外人の殖民地を設けたるの姿にして、其の社會上の弊害の如何なるべきやは固より說明するを要せざるなり。而して其の結果は忽ち政治上に現はれ、國風と一致せざる新制度は續々として輸入移植せられ、民情に適合せざる新法律

は頻りに飜譯發布せられ、全躰の政治組織は一般人民の與かり知らざる他所事となり、宛も身にも合はず又着樣をも知らざる衣服を借りたるが如き有樣となれり。而かも法律の改廢常ならずして、朝令暮改、依ること能はざるに因り、遂に天下の人心をして法律なるものに威信を措かず、堂々たる天下の政事を一擘の擊柝にて舞臺幾回轉するの演劇と同一視するに至らしめたり。蓋一片の法令以て國事を理するを得べしと爲して、法律濫造の弊に陷るは十八世紀以來の通患たるなり。之を要するに彼得大帝以來露國を惱ませる諸種の弊害は之を矛盾の一語に約するを得べし。即ち制度と民情と相矛盾し、形式と內容と相矛盾し、社會の上層と下層と相矛盾し、宛も之を裂きて二個となしたるが如し。蓋露國の革命は內部の刺激に因て下より起りたるに非ず、全く外人の指導を借り帝權の力に依て上より之を起したるものなるが故に、根底の基礎なるもの下に存せず、是れ其の動搖不調和の特に甚しき所以なり。されば之を矯正するには、先づ孰れにか向ふ所を定め、斷然西歐の新文明を取るか、或は莫斯科帝國の舊態に復するか、二者其の一に決せざる可らず。然れども其の所謂國粹なるものも觀るに足るものあるに非ず、且つ今日に於て露西亞を歐洲以外に保たんとするは、到底行ふ可らざるが故に、結局其の未來の問題は、從來の二元主義（デュアリズム）を破却して露と歐との調和を圖り、文明と國風との一致を致すに、其の方法如何と云ふに在るべきなり。

思ふに彼得の改革も佛蘭西革命と其狀甚しく異なるとなし。過失流弊は到底人事に免れ難きものなれば、露西亞人たる者は敢て之がために悲むことを爲さずして、唯だ孜々として誤を正し且つ歩を進め、以て終局の大成を期すべきなり。且つ夫れ露國の實際を觀察するに、一進一退、其の歩甚だ遲々たるが中にも、自から其の向ふべき所に向ひ、彼得の大業年を追ふて完からんとするは慶すべきなり。即ちニコラス帝がアレキサンドル一世の改進主義の正反對に出でゝ、非常なる排外保守の政策を取り、一切西歐の新文明を斥けんとしたるも、彼得以來の大勢は萬能の帝權を以てするも猶抑ふるに由なく、且つはクリミヤ戰爭の失敗は舊態を一新して西歐と並び進むの必要を萬人に示し、尋でアレキサンドル二世の出づるや、愈々門戸を開放せられ、改革の業は遂に其の完成を見るに至れり。即ち今回アレキサンドル二世の改革は上層外部の粉飾に非ずして、社會の基礎根底を改造したるなり。

全躰の人民に自由を與へて文明の門に入らしめたるなり。實にアレキサンドル二世の僕農解放の一擧の爲に、彼得の偉業も始めて其の基礎を有するに至りしなり。固よりアレキサンドルも帝權の力に依て上より其の改革を行ひたるは彼得に異ならずと雖、而かも決して昔日の如く外客の力に依り鞭韃の方便を用ひ、强ひて之を人民に加へたるには非ず。輿論と稱する一新勢力の協力に依り、又其の要求のために、之が實行を見るに至りたるなり。此一點は實に前後二改革の大に異なる所以にして、要するに時勢の進歩と謂はざるを得ず。而して今後人民の國事に與かることは益々深きを加ふべきが故に、アレキサンドル二世は正に昔時以來の獨裁的改革時代の結尾を爲せるものと稱するも不可なかるべし。或は飽迄も專政制度を維持して獨裁政治を保存せんと欲する者ありと雖、時勢の進歩と共に移らざるは決して安全の道に非ず。思ふに經濟上、社會上及行政上の大改革は、既に十八世紀及十九世紀に於て行はれたれば、今や政治上の改革の早晩來らざるを得ざる場合となれり。吾人は露國が二十世紀に於て、無事に此大事業を成し遂げんことを祈るものなり。

註。アレキサンドル二世の改革は實に近世露西亞の大事件なるが、其僕農解放の事は本卷第七編に、又其司法上の改革は第二卷第四編第三及四章に詳かなり

第五編　社會の階級、市府及市人

第一章

露國に於ける階級の區別。僕農解放及其他諸改革の影響。アレキサンドル二世の改革と佛蘭西革命との異同。四階級の區別並に其の性質及起原。餘分の小階級

露國の社會組織は遠く之を望めば宛も幾多の層より成れる金字塔の如くにして、上下各種の階級截然として相分るゝやに思はるゝ雖、近て之を見れば決して然らず、特に近年種々の改正を行ひたる以來は、其階級の區別は極めて微々たるものとなれり。抑も現代露國の種々の改革中第一主要の特色は上下階級の區別を撤去して、特種の恩典若くは負擔を次第に減却したるに在り。是れ實に司法、行政、宗教、財政又は　事等の萬事を貫ける一大特色にして、前後幾多の改革者は知らず〳〵皆此點に向て進めり。固より其改革に矛盾不調和の點は少なからず、彼得大帝及其の後數代は各階級を別々に取扱ひたるも、今日に於ては共和的思想大に行はれ、眼中唯だ人民を見て復た階級を見ず。此點より言へば十九世紀の半ばには猶中世的の見解を脱せざりし露國も、アレキサンドル二世の時に至て全く局面を一新したり。即ちアレキサンドル二世の改革が平等の一點に歸着したるは正に夫の佛蘭西革命と酷似するものと謂ふべきなり。

然れども二者の間に大なる相違ありと云ふ其次第は、抑も佛蘭西革命の階級破壞は既に實際上には倒れ居たる區別を形式的に徹去したるに外ならずと雖、露亞西にては之に反し、現に實際に存在したる區別を廢したるなり。且つ佛蘭西革命は下より起りたるものなるに因り、主として外容形式を變更して面目の一新を努めたりと雖、露國のは上より行はれたるに因り、外形を變ずるとは敢て努めず、成るべく舊容依然たる中に實際の改革を行はんと期したり。而かも一發の令、以て舊風の一變を來したりと云ふには非ず、本來露西亞は最も貴族的なるが如き外觀を有するも、其の實此の如くに共和的なるはなきなり。僕農解放令の起草者中の一人たるチェルカッスキー公曰く『我國には階級の區別は唯だ表面に於ての外存した

るとなし』と。蓋此の外觀と實地との相違は亦是れ露西亞の特色たる矛盾の一例とも稱すべきなり。

露國には法律上貴族、僧侶、市人（ウルバンクラス）及農民の四階級あり。而して身分職業に從ひて階級の別を設けたるは彼得にして、更に西歐の模形に從ひて貴族市人等の制を立てたるはキヤサリンなり。而して此區別たるや元來職分の異同より來りたる者にして、敢て特權の如何を意味せしに非ざるなり。されば階級の別は唯だ帝王の便利のために存するものにして、各自相分れて堅固なる國躰を結べる譯にも非ず、帝王は常に思ふが儘に其臣民を甲級より乙級に移すを得、貴族及僧侶と雖敢て階級としては何等政治上の特權又は勢力を有せず、唯だ法律若くは帝王の寵遇に因て與へられたる一身上の權利及特權を有するに過ぎざるなり。即ち此點より見る時は其の階級なる者は殆んど團躰とは認む可らずして、寧ろ無緣無聯絡なる個人の集合とも稱すべき者なり。又人頭稅及肉刑を免ぜらるゝの特典を有すると否とは唯一の區別なるに因り、之を貴族及僧侶の「特典ある階級」（プリビリージド、クラス）と其他の「無特典者」（ノンプリビリージド、クラス）とに分つも可なり。

扨て上に擧げたる四種の階級は各々亦二種より成れり。即ち僧侶は寺僧（イーグーレスト）と庵僧（ゼンゾ）とに分かれ、貴族は一代貴族と世襲貴族とに分かれ、市人は特典に與かり得る「縉商」（イクワルス）と「小町人」（スモールビーフル）とに分かれ、農民は普通の地主に屬する者と王田に屬する者とに分かれたり。此四種の階級に加ふるに軍人も亦アレキサンドル二世の時に至るまでは自から一種の階級を成したり。然れども千八百七十二年及千八百七十四年に徵兵令を改正し、服役期限を短くしたるに因り今は然らず。

露西亞の兵士中に自から他と異なるの一團躰あり。即ち夫の南境に在るコサック兵なり。彼等は古來國境防衛の特別なる義務を負ひたる其報として特に自由特典を許され、同國人間に於ては之を自由平等の代表者として見るの常なりしなり。然れとも中央集權の增加並に一般文物の進歩のために、其の自治自由の特色は次第に去て、今や殆ど過去に屬するの事となれり。

次に又「一田の民」（ワンヤーダース）と稱する一種の階級あり。是れ一家一田をのみ有するの自由民にして、其使用する土地は純然たる私有なり。斯く自由にして且つ土地を私有するを得るの點より云へば、彼等は寧ろ貴族に近しと雖、其の風俗習慣又は其の人頭

稅並に軍役の義務を下級人民と共に負擔するの點より見る時は、却て農民の部中に入るべき者なり。其數は男女合せて二百萬乃至三百萬にして往時のモスコヴィアの境界たりし地點に於て最も多し。而して其の起原は甚だ不分明なりと雖、思ふに其の大半は或事情のために地租を免ぜられたる兵士の後裔なるならん。兎に角彼等は從前の僕農と地主との間に介在して一種中間の階級を成せるが故に、他日或は中農なる瓦階級を作るの種となるやも測り難きなり。

右に記したる諸階級は各々特種の性質を有せるに因り、外國人にして新に露西亞の支配の下に立つに至りたる者は、歐羅巴と亞細亞とを問はず、別に亦新國躰を成して一種他と異なるの權利と義務とを有することゝ爲れり。是れ蓋全帝國の制度をして劃一ならしむること能はざる一原因なり。

第一一章

市人と農民との不平均。露西亞に市町の少なきこと。其の理由。中等民族を作らんとする彼得大帝及キヤサリンの盡力

露人階級の分配に付き第一に吾人の注意を引く者は其の割合の甚だ不平均なるに在り、特に市府の人口と地方の人口との大相違なり。千八百六十七年の調査に據れば歐部露西亞(波蘭王國、芬蘭公國及コーカサスを除き)に於ける農民は殆ど五千五百萬人にして、市人は六百萬に達せず。而して其外に貴族は八十萬乃至九十萬にして、僧侶は殆ど六十萬なりと云ふ。蓋其後二十年間に市人の數の益々增加せるは事實なるも、而かも猶今日に於ても農民は依然として大多數の位地に在り。是れ實に社會經濟及政治の諸方面に大關係を有するの一大事實なるなり。若し夫れ露國の統計に於て市府と稱するものは果して如何なるものなるやを思ふ時は、此不平均は更に著しきに至るべし。蓋露國の市府は粗末なる木造の家より成りて、而かも其家は廣く相離れ、路幅亦不恰好に廣く(火災を防ぐためなり)雨雪の都度に泥濘となり、少しも市町の躰裁を備へず。即ち之を一見する時は宛も町外れの如くにして、漸くに本町に入らんと思ふの頃は既に町外に出でし時なり。要するに町と村落との相違は敢て他國に於けるが如くに非ずして、其の町は畢竟

村の大なるに過ぎず。夫の莫斯科すら一都會の躰裁を帶ぶるに至りたるは千八百十二年の大火後大改築を加へたるよりの事なり。其他市町の名に相當するものは僅に各州の首府のみなるべし。（註。十年以前にはヴルツー及波蘭王國を別さし、露西亞に十萬の人口を有する市は唯だ聖波得堡、莫斯科、オデッサ及りガの四あるのみ、今日に於てし其數殆ど十に達せずた。）されば露國の市町は宛も太洋上の孤島の如くにして、夫の西歐の市町が群島の如くに散布せるの比に非ず。且つ人口の點より之を云へば、西歐各國の市府は全人口の三分の一、多きは二分の一を占むる事あるも、露國にては九分の一にも達せざる程にして、而かも其中市人と綱するを得ざるもの少なからず。尤も西部露西亞特に波蘭邊に於ては、市人と村民との比例は他の歐洲諸國と稍相似て、一と三位ひの割合なるも、而かも其町を成せる者は大抵猶太人及獨逸人にして、スラヴ民族とは起原、思想、利害を異にし、宛も水中に油の點したるが如く、全く別社會を成せるものなり。而して本部露西亞に於ける市町は固より之と異なると雖、其數甚だ少なくして曉天の星も啻ならず。要するに露西亞は一大農帝國と稱すべき者にして、其の西歐文明國と異なる所以のものは實に此一事實中に存するなり。即ち市町の少なきは社會活動の一大要素を缺く所以にして、一般の事業甚だ振はず、物質的發達の觀るべきものなきも、蓋偶然に非ざるなり。而して斯く市町の勃興せざるは畢竟其の土地甚だ廣漠にして交通に便ならず、又氣候寒烈にして外出を厭はしむるがため、自から人は皆土着の農業に從ひ、且つ大抵必要の物は皆自から之を製し、農工相兼ぬるの姿なるに因ると大なるべし。

されば往時の莫斯科帝國時代には殆ど町村の區別を爲さず、隨て市人と農民とは敢て今日の如くに二個の階級を成せしに非ず。而して行政上町村を區別して取扱ふに至りたるは、十七世紀僕農制の起りしより以後の事に屬するなり。斯くて彼得大帝の出でたる頃には工業未だ起らず、市町未だ榮へず、西歐の所謂中等民族なる者は猶未だ存せざりしなり。是に於て彼得は先づ模型を荷蘭に取り、特別の制を市に與へ、孜々として其の發達を謀りたるも、其の成功は海陸軍の改良の如くに速かなる能はず、特に其の後の諸帝は施政を誤まり、市町及商人の自由に制限を加へ、終にエリザベスに至ては其の寵臣をして重もなる商業を獨占せしめたるに因り、益々中等民族の發生を妨げたり。キャサリンは之に反し、彼得の遺業を繼續

し、市人を各種の組合に分て之に自治を與へ、其の進歩發達を促すを努めたり。然し此組合法なる者は西歐にて將に廢れんとしたるを輸入摸倣したるに過ぎずして、且つ露西亞には之に適せざるの事情も在るがために、遂に著しき効果を生ずると能はざりしなり。

第三章

キャサリン以後の市人間の階級。「小町人」。上流の「商人」及其特權。解放令後不動產を有するを得るに至りたる次第。「名譽市民」。中等民族漸く起らんとす

彼得一世及キャサリン二世以來露西亞の市人は各種の階級に分れるも、之を大別すれば二と爲る。即ち市町社會の下層を成せる職人若くは小商人と、多少資本を有し一定の免許稅を納むる上流商人と是れなり。

前者は所謂「小町人」(Miesh-tchanin 即ちSmall burgher)と稱する者にして、僅に其日〳〵の生計を營み、最も憐れむべき境遇に在り。彼等は近頃迄は業を營むにも或一定の額を超ふる能はず、又不動產を所有するにも五千若くは六千ルーブル以上に出づる能はず、之を超ふる時は「商人」として他階級中に錄せられしなり。而して彼等は法律上名は市町の人なるも、其實生活に窮して田舍に移住するもの少なからず。同時に農夫は亦耕作の收入不十分なるが爲め、市町に來りて各種の職業に就けるもの多し。彼得堡のみにて此種の農民の數は二十萬以上に達せり。(註。或統計に據れば農民は市人の二割を占むるの平均なりと云ふ。)斯くて此二階級の民は分立せずして、却て相競爭するに至る事あり、畢竟其の共に不幸不如意なる境遇に在るに因るなり。然れども農民は僕農解放令に依り家と土地とを與へらるゝことと爲り、幾分か生を營むの道を有するも、小町人の地位は更に非にして、概ね朝にして夕を側ること能はざるものなり。思ふに彼等の中家を所有するは恐らく十分の一にして餘は借屋住居を爲せるなり。

小町人は他日工業の進歩と共に夫の西歐流行の貧民問題を誘起すべき種子なるとは固よりなるが、然し其の西歐の同種族と異なるは階級的精神及市町的感情を

有せざるに在り。即ち彼等は上級の者を嫉視して相軋轢するが如きとなく、又農民と思想、感情、風習等を同ふして其間に敵意なるもの少しも存せず。是れ要するに時勢の進歩せざるが爲めにして、其の長く此の如くならんことは到底望む可らざるなり。

次に町人中の上流に屬する者は通常之を「商人」(Kuptsy 即ち Merchants)と云ふ。此「商人」は其資本額及免許税の多少に應じて三種の組合(ギルド)に分かれ、今日は共に同一の權利を享有するも、往時に於ては甚だ特典を異にし、其の第一級及第二級の組合に屬する商人は貴族と同じく人頭税、兵役義務及肉刑を免ぜられしなり。是れ畢竟奬勵の趣意より出でたるものなるが、彼等は又同一の趣意に因り「住民ある土地」を所有することを禁ぜられたり(貴族のみ此特權あり)。是れ即ち僕農を有すると能はざらしむる者にして、換言すれば資力を悉く商業に投ぜしむるの意に外ならざりしなり。而して此禁止は商と農と相分かれしめ、商人及製造家と地主と相離れしめ、斯くて一方に於ては僕農制のために地方の中等民族の發生を妨害せるに、更に此禁止は次第に市に發生し來る中等民族をして地方に膨張すると能はざらしめたり。是れ實に露國中等民族の發達を妨害したる大原因なるなり。されば其後僕農解放の大改革に依て事實上不動産中の「住民ある」と「住民なき」との區別を做したるは、實に間接に中等民族の膨張發達に一刺激を與へたるものにして、此一事以て未來の社會的革命を誘起するに足るや疑なきなり。

ニコラス帝はキヤサリンの組合區別の外に商人中特に功勞ありたる者を選びて往時の「緒商(ノーブルス)」に當るべき「名譽市民(オンヤリーシチズン)」なる新階級を作り、之に貴族と同等なる特典を與へ、且つ貴族と同じく之を一代と世襲との二種に分かちたり。然れども人頭税並に肉形は廢せられ、且つ兵役を一般に課するとなりてより後は、其の所謂特典なる者は有名無實となり、今や彼等は少しも普通人民と異なる所なきなり。

又露國には從來辯護士、醫師、記者、教授、機械師等の職業に從ふ者甚だ少なく、彼得及キヤサリン二世の時代も往古のアイヴァン諸帝の時と殆ど異なる所なく、自から中等社會の一要素を欠たりしが、千八百六十五年アレキサンドル二世の司法改革を行ふに及び、學問に依て立身出世を求むるを得るの道新に開け、同時に大學の設置、鐵道の布設及産業の發達等は共に新中等民族の發生を促しつゝあり。而て此

中等民族は古來の諸階級中より出でゝ別に新國體を組織し、終に一大新面目を開き來らんとせり。思ふに十八世紀に於ける彼得及キヤサリンの改革の主なる結果は敎育ある上流社會即ち歐羅巴風の貴族を作りたるにあり。而して十九世紀に於けるアレキサンドルの改革の主なる結果は眞に文明流の新中等民族を出だすにあるが如し。露西亞人は往々中間の階級なきを誇り、之なきがために上下兩階級間の關係特に密なるを得と唱ふるものあるも、是れ決して然らず。其の所謂上下間の關係なる者は要するに物質上の關係に過ぎずして、別に道德上の鏈鎖存するに非ず。是れ決して健全なる社會組織に非ざるなり。然れども今や其の間に立て、同情及傾向の點より言へば人民に屬し、養育及學問の點より言へば近世文明に屬する新中等民族起り、露國の活動進歩の主力となるに至らんとす。露國の眞價の世に發揮せらるゝは當に此新階級勃興の後なるべきなり。

第六編　貴族

第一章

貴族と農民は二種の國民の如し。露國貴族の他國のに異る所。

一代貴族及世襲貴族。貴族の多數なると。貴族政治を成すに至らざる所以。家族制の影響

貴族と農民、即ち從前の地主と僕農とは全く其の思想風俗を異にするの別物にして、一は專ら西歐文明の風を學び、一は牢として舊習古例を守り、之を別種の階級と謂はんよりも、寧ろ二種の國民と謂ふを以て當れりとす。

抑も露國の貴族は他國に其例を見ざる一種特別のものにして、其の起原由來等全然他と異れり。第一に彼等は國務に服したる者の集合躰にして、結局主權者の手足に外ならず。又第二には何人にても卑しき地位より上りて貴族となり得るの制なるが故に、族制的精神に陷るの弊を免るゝを得たり。是れ其の主もなる特色

なり。實に貴族(dvorianin)とは元と宮人の意にして、畢竟宮廷に仕へ國務に服したる者を稱しゝなり。從て今日に於て或官等の官吏は皆貴族となるを得、依然として役人貴族の特色を保持せり。

貴族に一代と世襲との二種あり。一代貴族は父一代にて終るものなりと雖、其實其の子は「名譽市民」となりて同一の特典を享有するを得るが故に、結局唯だ貴族なる名義を失ふに過ぎざるなり。而して世襲貴族なるものも敢て業々數ものなるにあらず。彼得大帝よりアレキサンドル一世の終に至る百餘年間は、其の門戸甚だ廣くして、其の地位小尉よりも卑き文武官すら、皆世襲貴族と爲るを得たり。然し十九世紀の初年頃より次第に其の門戸を狹くするとを務め、終にアレキサンドル三世の時に至り、官等に因りて貴族となるの制を廢止せり。扨て上に記したる如く、何人も容易に貴族となり得るの結果として、其數非常に多數となり、且如何はしき徒輩を多く含むに至りたるは、亦已むを得ざるべし。即ち歐部露西亞のみに於て世襲貴族の數は六十萬に達し、一代貴族は三十五萬ありと云ふ。されば貴族は少しも珍らしからず、亦中には莫斯科帝國以來の舊家にして一種歴史上の光を放つ者なきにあらざるも、其の大多數は普通人民と少しも異なる所なし。

此等貴族の間に在て最も異彩を帶ぶるものは、往古露西亞を支配したる諸君公の子孫にして、是れ正に其の純の純なるものなり。蓋露西亞に於ては人皆貴族なりとは能く人の言ふ所なるも、其實種々の事情にて貴族となりたるものを除き去るときは、殘餘の眞貴族は實に六十に達せず。其中始め四十は國祖ルリック(八百七十九年死)又は大公ヴラヂミル(千〇十五年死)以來の舊家にして、實に九世紀より十六世紀の末に至るまで、露國を支配したる王家の後裔なるなり。而して此等の大貴族は政治上の一勢力たるを得るやと云ふに決して然らず。他日貴族院の如きものの起るの日ありとするも、之を組織して一勢力となるべきの望なきなり。是れ蓋一は露西亞の社會組織の歴史上自ら彼等の勢力を大ならしめざるの事情あり、且は其の家族制の爲めに其の强大となるを妨げらるゝに因るなり。

抑露西亞の家族制に於ては、社會の上下を通じて子は皆同等なる權利を有し、父の遺産は其間に(但男子のみ)等分せられ、貴族の稱號も亦一樣に襲がるゝの制なるが故に、本家は却て哀へて名義のみの分家益々多々となり、果ては貴族の空名をのみ

擁する者少からざるに至れり。されば華胃名門の公子公女にして、一年僅に五六ルーブルの金の爲めに下賤なる人に仕へ、或は劇場の唱歌師となり、又は貴婦人の御附女中となる者すらなきにあらざるなり。而かも猶其の亡びざる所以のものは、其の從來巨大なる領地を有したると、近來地價の非常に騰貴したると、又は「住民(イン)」ある土地(ビヤッドランド)」即ち僕農の住める土地に對して從來獨占の所有權を有したるに在り。且不動産は男子のみに傳ふるの制も、亦幾分か其の衰滅を防ぐに與りて力ありたるならん。

千七百十七年彼得大帝は勅令を發して貴族の不動産を世襲となすの制を開けり。但其相續者を長子に限らずして、父の選ぶ所に任かしたるは、其の最も他國に異る所なり。然れども此制は色々の弊あるに因り千七百三十年に廢せられたり。後千八百四十五年ニコラスは再び世襲財産の法を設けたるも、元來舊來の國情民俗と一致せざるに因り、實際に於ては之を行ふもの甚だ稀れなり。

第二章

貴族が政治上の勢力を占むるに至らざりし歴史上の原因。貴族の起原。「ドルジナ」及「ボヤール」の自由勤務。貴族と土地。大貴族の力を殺がんとする諸帝の政策。彼得の位階制

露國の貴族が政治上の勢力を占むるに至らざりし其の理由に就いては、別に亦露國社會の歴史的組織に深く原因するものあり。抑も貴族の起原を按ずるに、其の濫觴とも稱すべきはルリック等の頃ノブゴロッド及キーフ地方のスラヴ人間に現はれたる「ドルジナ」(Drujina)にあり。「ドルジナ」とは始め君公と地位を同ふし、共に露西亞建國の業に從ひたる者にして、其語は實に「友」を意味するなり。扨て此「ドルジナ」は去就極めて自由にして、思ふが儘に甲の君公より乙に轉ずるを得たり。而して此「ドルジナ」より出でたる「ボヤール(boyar君公の顧問の義)」なる者も、自由服務の權利を有したり。之を以て彼等は常に轉々諸公の間に遊びて、唯だ勢力あり金ある君公に就くを習とせしが、終に莫斯科「大公」の勃興するに及び、彼等は皆其下に集りて、他の諸公は次第に衰へ、而して彼等自身も亦大公の從僕となりて自ら甘ん

ずるに至れり。

ずされば「ボヤール」と云ひ「ドルヲナ」と云ひ、共に定所なき浪人にして、土地の根據なるものを少しも有せず。即ち其の一身去就の自由獨立を有したるは、却て政治上の勢力を得るの妨害たりしなり。

固より臣僚の功勞に酬ふるために、或は俸給若くは養老金の代に、之に土地を與ふるは普通の事なりしと雖、其の性質已に然るが故に、敢て永久世襲の私產として之を受くるにあらず。從て其一家の中心若くは其勢力の根據たる能はざりしなり。扨て主權者より特に勞に酬ふる爲めに土地を與へられたる者、及先祖より之を相續所有する者の、二種の土地所有者の中、後者は自ら勢力を養ひ易きに因り、莫斯科の君公は大に之に注意し、其の連枝の公子をして主なる公領地に接せる土地を所有せしめず、又其の併呑したる他の諸公は、其の祖先傳來の地を去て遠く且つ緣故なき國に移らしめたり。是れ實に十六世紀の頃に於てすら、猶彼等の孜々として務めたる所の政策にして、其如何に轉國移封の手段に依り、舊家名族の力を殺ぐに汲々たりしかば、當時英國女王エリザベスの國使として露國に在りたるフレッチェルの現に目擊したる所なり。斯くて貴族と土地との聯絡は全く斷たれ、貴族は基礎なく、根據なく、中心なく、唯だ王命の儘に驅逐せらるべき者となれり。是れ即ち貴族が政治上に於て極めて無勢力なる大原因なり。

彼得大帝は新に位階の制(テーブル、オブ、ランクス)を設けて其位(Tchin)を十四級に分ち、上は文武の百官より下は醫者、學者、記者、俳優に至るまで、凡て官職を奉じ、若くは或る學識技藝を有する者は、悉く其の身分に應じて之に位階を授けたり。而して其の稱號の如き、全く西歐より輸入したる新名稱にして、必ずしも事實上の意味を有するにあらず、醫者の大佐又は會議に出でざるの顧問官もあるの有樣にして、殆んど一笑に値ひするものあり。近年其の廢止說を唱ふる人あるは敢て怪むに足らざるなり。

第三章

露西亞の貴族と急激主義。貴族社會の外風崇拜。社交旅券とし

ての佛蘭西語。一種の別國民

露西亞の貴族は概して急激なる思想に富み、虛無黨の如き革命家を其間より出すと少からず。是れ其の未熟なる頭腦が俄かに西歐の急激なる新思想に刺激せられ、爲めに着實なる判斷を爲すと能はざるに因るものにして、蓋無經驗なる少年國には免れ難き所なり。且實際西歐の新教育を受けたる身を以て、露西亞の舊社會に處する時は事昔左支右吾して、不平不快の念は自から抑ふる能はざるものあるとならん。其の革命的思想を喜ぶに至るも亦已むを得ざるなり。

又彼等は幼少より佛人若くは獨乙人に就きて教育を受け、外國の言語を用ひ、外國の思想風俗を崇拜し、本國の者は一切之を賤みて顧みず。特に佛語は其の身分に缺く可らざる第一の標章にして、即ち其の交際社會に必要なる一種の旅券たりしなり。或紳士嘗て予に語つて曰く『予は結婚後已に十五年を經過せるも、其間予の妻に對し露西亞語を用ひたるとは、二度に過ぎざるべし』と。此の如く貴族は滔々として外を是れ崇拜し、本國の事物は悉く之を擯斥し、國家の觀念なるものは全く跡を絕ち、其の狀宛も多數國民には無緣なる外來の殖民の如き者となるに至れり。

註。原譯者たる露人ラヒガニ氏は自ら之に註して誇張の言にあらず、蓋以外の者現に吾等の幼少の時に陷り居たる所にして、決して下の如く云へり。曰く、此弊は現實に對せられたり、尼寺に稼襲なるとき、如何なるソーラの著書を發見するよりも、寧ろ女學生が無害なる露西亞語を用ふるとき、如何なる著書を過失を犯したる場合よりも烈しく叱責せらるるよりも、寧ろ女學生が無害なる露西亞語の書を拂ふるを見て、世人は一層奇怪なる事と思ひたり、予は十才なりしが、而かも佛語流の音調を用ひ、父兄は寧ろ之を喜びし居たるも、予は何んとなく自ら恥ぢたり、而して予が自己の國及自己の人民を發見したる時、始めて國民的學問復興。

然れども國粹論者と外國摸倣者との爭は彼得大帝以來の事にして、斯く餘りに外風を崇拜して國風國躰を破壞するに至るや、其の反動勃然として起り、既にニコラス帝の時に於て其の聲は朝野の間に聞へしが、久しからずして其反動も又極端に奔り、露西亞の名を有する者は、皆區別なく尊崇せらるゝに至れり。斯くて外風崇拜の貴族社會も幾分か其の面目に變化を來したりと雖、彼等は已に彼得以來百五十年間の因襲を經て、習慣既に第二の性となれるが故に、到底其の弊を一洗し去て直に國民と融和すると能はざりしなり。されば今日に於ても露西亞は精神上二個の別國民より成り、未だ渾然和合して一國民となるに至らず。是れ竟に二者の區別を正式に定めて一を他の從屬となすか、若くは中間の新階級を作りて上下間

の連鎖となし、以て其の統一融和を圖るか、二者其の一を選ぶの外に道なきなり。

第四章

貴族の特權。僕農解放の影響。特權は有名無實なり。キヤサリン二世の「貴族會」に與へたる特權。其の彼等に利益を與へざる理由。團躰としての貴族は無し

貴族はアレキサンドル二世の改革に至るまで三大特權を有したり。即ち兵役の義務、人頭稅及肉刑を免ぜらるゝの特權にして、是れ正に其の平民と異なるの要點なりしなり。然れども千八百七十六年全國皆兵役に服すべきの制を採ると共に、第一の特權は無効となり、次に肉刑は一般に免除せらるゝことゝなり、又人頭稅はアレキサンドル三世の爲めに全廢せられたるに因り、結局貴族の特權なるものは今は別に存せず。且つ夫れアレキサンドル二世以前に於ても、此の三特權は僧侶及商人にも與へらるゝとありしが故に、必ずしも貴族の獨占と稱すると能はざりしなり。されば其の特權中最も主要なるは所謂「住民ある土地」(インヘビタッド・ランド)即ち僕農の住居せる土地を所有するを得しなるべし。是れ即ち彼等をして土地を獨占せしめ貴族と地主とを同一意義の如く思はしむるに至りたる原因にして、彼等も之れが爲めに、其の中世紀の頃に缺きたりし所即ち土地に根據を有せざるの弱點を補ふを得、從て社會に勢力を占むるを得たり。然るに此の特權もアレキサンドル二世の僕農解放令の結果「住民ある」と「住民なき」との區別自ら消滅し、何人も皆土地を所有するを得るとなるや、亦全く有名無實のものとなれり。蓋し此土地所有に關する特權は貴族をして其位地を維持せしめたる大原因にして、之れなかりせば彼等は早く既に土地を蕩盡せしや必せり。既に千八百五十九年に其の土地の六割五分即ち三分の二は政府に抵當となり、他の三分一は大抵私人に抵當となり居たり。夫の僕農解放の當時若し中級社會に富民多かりしならんには、土地は皆其の手に歸して、社會上の地位に顚倒を來したるとならん。幸ひに然らずして土地猶其の手に存するも、而かも解放以來は次第に之を失ひ、已に四分の一は減じたりと云ふ。思ふに其の終に古來の特色を失ふべきは避け難きとならん。